兵庫県立看護大学
10周年誌
兵庫県立看護大学
10周年誌
看護系大学をリードする　
高等教育・研究機関としてさらなる発展を
—兵庫県立看護大学創立10周年に寄せて—

兵庫県知事
井戸敬三

平成5年4月、全国初の国公立の看護系単科大学として誕生した兵庫県立看護大学が創立10周年を迎えました。心からお祝いします。

看護大学は、資質の高い看護職の育成と看護学発展への寄与、そして安心して健康な暮らしのできる社会づくりをめざし、開学以来、数多くの人材を輩出してきました。大学院を含め、877名の卒業生・修了生の一人ひとりが、大学などの教育・研究機関はもとより、保健・福祉・医療などのさまざまな実践の場で、指導的立場で活躍されていることを心から願しく思います。

いま私たちは、21世紀の成熟の時代を迎えています。そこでは、人と人との絆や心のふれあいが新たな社会基盤となります。看護大学は、創立当初から「喜びと痛みと苦しみを分から合える温かい心を持ち、生命の尊厳を理解し、人としての権利を尊重して行動できる、ここが豊かな人間性を育むこと」をその教育目標の一つとしてきました。研究成果への内外の評価も高く、特に今年度は「21世紀COEプログラム」の研究教育拠点にも選定され、さらなる研究水準の向上と世界をリードする人材育成が期待されています。

私たちの願いは「県民生活の安定」です。県民の健康を守り、誰もが安心して暮らしていく社会をつくることこそ県政の基本です。このため、健康づくりへの総合的な取り組みを展開し、生涯にわたる保健・福祉・医療対策の拡充を図っています。このような取り組みを円滑かつ効果的に展開するためにも、看護大学の教育・研究機能は大きな支えとなります。

平成16年4月には、質の高い人材育成や研究活動をめざし、県立3大学が兵庫県立大学に統合されます。看護大学も兵庫県立大学看護学部として新しいスタートを切り、あわせて、看護学に特化した全国初の研究所、地域ケア開発研究所が設置されます。

大学をとりまく環境が大きく変化するなか、南村学長をはじめ、看護大学の関係の皆様には、これからも共に手を携え、一層ご活躍されることを期待します。あわせて、後に続く兵庫県立大学看護学部に学ぶ後輩を温かくご指導いただき、わが国の看護系大学をリードする高等教育・研究機関として今後とも大きな役割を果たされることを心から願っています。
兵庫県立看護大学
創立10周年を迎えて

兵庫県立看護大学は、平成5年4月に国公立では初の看護学の専科大学として開学しましたが、早いもので今年10周年を迎えることになりました。今秋までに、学部卒業生は575名、大学院修士課程は116名、博士後期課程は4名の修了生が輩立ててきました。卒業生や修了生は、それぞれの人生と重ねながら看護界における役割を果たしてくださっているように思われます。本学は、平成7年に編入制度を、平成9年に大学院修士課程、平成11年に博士後期課程を、そして平成13年には実践的、学際的研究を発展させるための附属研究所を設置し、開設しました。その間、教職員は、教育と研究および社会活動においてそれぞれが精神的に組みながら、学生の成長と大学の発展のために相互の理解と信頼をもって協働してまいりました。まるで疾風のかなを駆け抜けたかのよう10年間でした。

開学して間もなくの教職員会議で私は、「大学づくりは文化形成過程ではないかと思う。本学がいつか看護学を一つつの学派を打ち立てることができるほどになればと願っている」と述べた記憶があります。本学の歴史的評価はいずれかかしてくださるかと思いますが、今の私には、本学は与えられた使命のものに導かれてここにいたったという気がしてなりません。

この10年間を振り返るとき忘れないことは多々ありますが、本学の使命のようなものに繋がることとして私はふたつのことをしたいと思います。ひとつは、昭和38年から兵庫県における看護職の方々が引き継いでいた中でしっかりした本学への熱い思いです。開学時には兵庫県には、看護大学卒業者が大学院修了者は極めて少なかったことを忘れて、教員の大半が県外からこの地に集まってきました。そのような私たちを兵庫県看護協会会長の山崎京子様はじめ看護界の皆様は、心を置いて暖かく迎えてくださいました。だからこそ本学は、地域の看護職の方々と密接に繋がりを持ちながら、現場に深く根ざした教育や研究することができると考えています。それが現在のさまざまな事例検討会、臨床との共同研究や「まちの保健室」関連の実践・研究活動に繋がっているのではないでしょうか。

本学の使命ともなるもう一つの出来事は、2年目を終えるときに出雲市で教職員会議で申し上げた教員の養成活動が、学生や教職員自らが大変な経験をしましたが、被災地に立ち寄る看護大学としては、同時に実践家として研究者としての真価が問われることでもありました。直後の教職員から始まって今まで、本学は防災・災害看護に関する支援活動や研究に会長あけて取組んできました。

このような呼びかけは、未来である。最後に本学の研究者である川本教授をはじめとする多くの教職員が、本学の創立10周年を忘れないでください。
ごあいさつ  ..................................................... 1
学長からのメッセージ ........................................ 2
第1章 建学の精神および教育理念と教育目標 ..................................................... 7
第2章 10周年記念に寄せて ........................................... 11
第3章 兵庫県立看護大学の歩みと発展の概要
  大学のあゆみ ............................................. 17
  開学式 .................................................. 23
  第1回学部入学式 ........................................ 23
  阪神・淡路大震災 ........................................ 24
  大学校章・徽章制定 ..................................... 26
  学歌作成 ............................................... 26
  第1回学部卒業式 ....................................... 27
  大学院修士課程開学式 .................................. 28
  大学院学位授与式 ..................................... 28
  博士課程が始まって ..................................... 30
  附属研究所推進センター スタート ...................... 31
  名誉教授誕生 .......................................... 31
  地域ケア開発研究所 開設決定 ............................ 32
  兵庫県立大学 設置認可申請 ............................ 33
  21世紀COEプログラムに採択 ........................... 34
  教授会議事からみた大学の変遷 ........................ 35
第1章

建学の精神
および教育理念と教育目標
建学の精神

医学、医学の進歩による医療の高度化・専門化、高齢化を背景とした疾病構造の変化、国民の健康に関する意識の高まり等、保健医療環境の変化に伴い、看護の内容も急速に複雑・高度化してきています。このため、従来に増して専門的知識・技術を備え、適切な判断力・行動力を有する資質の高い看護職が求められていません。

私たちの大学は、このような社会的要請を背景に、看護のさまざまな分野で活躍できる資質の高い看護職を育成するとともに、看護学の教育・研究・実践を通じて、人々が安心して健康な生活を送ることのできる文化の形成と学問の発展に寄与することを目的としています。
教育理念

生命の尊厳を基調とした豊かな人間性の形成と共に先進的な知識と技術を教授し、看護に関する総合的能力を有する資質の高い看護職および将来の看護指導者を育成し、健康・福祉等の幅広い領域での活躍、貢献をめざします。

教育目標

学部
1. 人間の喜びや痛み、苦しみを分から合える暖かい心を持ち、生命の尊厳を理解して、人としての権利を尊重して行動できる、心豊かな人間性を養う。
2. 看護の専門職に必要な知識、技術を習得し、科学的な根拠に基づいた適切な判断と解決ができる能力、柔軟性のある批判的（critical）な思考力および社会状況の変化や科学・技術の発達に適応できる能力を養う。
3. 実践・教育・研究の場において、将来専門職として活躍できるための能力や、地域の医療・福祉等関連領域の人々と連携しうる学際的な能力を養う。
4. 国際的な視野で活躍できる能力を養う。
5. 自ら研究する態度を身につけ、看護を発展させる能力を養う。

大学院
修士課程においては、広い視野に立った看護学の精深な学識を授け、高度な専門性を有する看護実践等に必要な実践能力や、研究者の基礎能力を養い、国内はもとより外国において活躍しうる人材の育成を目的としている。

博士後期課程においては、高度な研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養い、日本国内外の看護学の分野において、広い視野のもとに自立して看護学を追求できる人材の育成、特に創造性豊かで、高度な研究者を育成することを目的としている。
第2章

10周年記念に寄せて
看護学を通じた平和への技術の発信拠点に

兵庫県立看護大学
創立10周年に想う

前兵庫県知事 貝原 俊民

生命の尊厳を基調とした豊かな人間性の形成とともに、先進的な知識と技術を教授し、看護に関する総合的能力を有する資質の高い看護職を育成し、健康・福祉等広域領域での貢献をめざすという教育理念のもと、真摯な取り組みを続けてきた「兵庫県立看護大学」。実りある成果を取めながら創立10周年を迎えたことは喜びにたえません。

「交流と共生」の世紀といわれる21世紀。私たち兵庫県民も、高齢化が進む近代都市を直撃した阪神・淡路大震災で、一瞬にして多くの大切なものを見失いましたが、あの惨禍の極限状態のなかで築き上げられた、看護師の方々の献身的な活動に、どれほど励まされ、勇気づけられたことでしょう。私たちは、人間相互の愛の強さを改めて認識し、「人の命は、結局、人が助ける」ということを痛感したところであり、保健医療体制のさらなる充実の必要性を再認識しました。

私が知り合いのある兵庫県立看護大学は、平成9年4月には大学院修士課程を設置するとともに、平成11年4月には博士後期課程を創設するなど、常に国内の看護系大学をリードする高等研究・教育機関として、着実なレベルアップを図ってきた。そして開学後10年を経過した今年、世界的研究・教育拠点の形成のため国（文部科学省）が進める「21世紀COEプログラム」に、公立の看護系大学として唯一採択されたという快挙を遂成。看護学の世界的研究・教育拠点を形成する資質ありと国が認められるほどの大輪の花を咲かせることができたのも、南村子学長をはじめとする関係の皆様のたゆまないご努力の賜物と、ここに改めて深く敬意と感謝の意を表します。

折しも兵庫の地には、アジア防災センター、人と防災未来センター、WHO神戸センターなどが集積し、防災・健康・福祉など平和の技術を世界に向け発信する一大拠点となりつつあります。

こうした機関と連携しつつ、兵庫県立看護大学が、看護学を通じた“交流と共生の世紀”を先導する我が国の平和の技術の発信拠点として、ますます発展されることを心から願ってやみません。
この実績に更なる
ご発展を期待します

貴学の開学の時期には、私は千葉大学看護学部の学長
という立場で日本看護協会大学会議の会長を務め
ていたので、祝賀記念行事の参加をさせていただきました。
あの行事が、つい先日のことのようにですが、その間、大学
院修士課程さらには博士課程を教養、優秀な卒業生を
多数逆に送られました。この間、私は貴学の外部評価委員
として、大学の診察活動の現状を細部にわたり勉強させていただく機会を得ました。
この10年間の貴学に所属する教職員の努力は、すばらしいものがあったと思います。私は前記の大学で開学
当初から24年間教員として就業活動があるのでも、10周年のときに卒業生が看護師・看護師・助産師として、ま
たその実践を踏まえた教育者として歩み出している姿を目の当たりに確認し、確かな実績と実感した鮮明な記
憶があります。

兵庫県立看護大学の10年の卒業生も着々と育っていますし、大学院修了生たちも全国各地で活躍しています。
また、阪神・淡路大震災に関する学問もない時期に遭遇され、このときの大学の皆さんがご活躍はすばらしい
ものでした。災害看護のボランティア体験からは、看護学の在り方を捉え、実践的な災害看護学の構築に
力を尽くされたことは、他の大学には類例のない実績となっています。これは、看護の大学の社会的役割を十
分説明できる成果でした。開学記念に伺った折、教員には若い方が多く、これで大丈夫かと思ったことは
事実ですが、だからこそ、この10年間でこのだけの実績を上げることができたのかもしれないです。次9年は、
おそらく、この実績の上に独自性を深め、学術的な実績を系統的に整えて行くことと大いに期待しています。

公立看護大学の先輩格の大学として発展させていかれることが強く望んでいます。

時代をリードする
大学に身を寄せ

1993年5月20日、青空に映し出される看護大学の校舎を
仰ぎながら、正面階段を上がったときの印象は、今でも鮮
明に私の脳裏に刻まれている。

あれから十年——。この大学に関わったすべての人々と
って、この十年はそれぞれがえのない十年だったにち
がいない。私にとっても、それは同じだった。

あの開学当初の学生募集のパンフレットの表紙には、「入っておもしろい／ケアを通して／自ら世界を／見
つめてみないか」という大きな活字が躍り、「でつか夢をのせて、子供線から、さあ Kick Off」と呼びかけていた。かつては、人生の最終の坂にかかっていた私も、この呼びかけに年甲斐もなく胸を高鳴らせた一人だっ
た。明石に向かうための横浜のホームに立ったと、この高鳴りが甦えてきた。

いま、日本の医療はいまだもなく病院病院が中心である。しかし、その病院が生まれた西欧では中世の修
道院神聖がその発祥であり、それと連携していたのは修道尼兼看護師であった。西欧の病院病院はケアから出
発した。そして、今日ふたたび、医療は従来の治療（ケア）から看護（ケア）が中心になることが求められ
る時代となった。

かつて、ケアは「イクリア紀行」（相良守峰訳）で、「人道主義が最後の勝利を占める」という実実である。
ただ私は同時に世界は一個の大きな病院となり、各人はお互いに他者の人道上有の看護者になり終えるのではある
まいかと、怖れられているのだった。それから二百十一年、世界はケアの予言通りとなった。さきのパン
フレの「だからこれから看護」という言葉は、たんなるキャッチフレーズではなく、時代をリードする理念となっ
た。私はいつも、この大学にその息吹を感じてきた。

この12月24日、私はこの大学での最後の授業をする。そして、それは、私の長い教員生活の時間足に組まれ
た授業の「最終講義」となる。心からの感謝の捧げていないわけではない。
BON VOYAGE

開学十周年おめでとうございます。
とは言っても、統合の結果わたしたしが講義はこれで終わりです。さようなら、そして、すてきな第二の航海を期待します。と申し上げることになります。

この十年間で看護という仕事の社会的な認知され方はずいぶん違ってきましたように思います。少し前までは医者の使い手としてしか見られていなかったのが、独立した、個の、患者さんにとって欠くことのできない、支え手、理解者、治験者に向けて共に歩むものとしての役割を期待され始めていると言っていいのです。

開学前「演劇論文」で講義をいう申し出にはいささか驚いたけれども、これは南学長と服部（現宮島）朝子さんの英断でしょう。わたしのレッスンは「からだとことばのレッスン」と呼ばれていて、演劇的方法は用いませんが、人間関係の実践そのものです。しかし学生の中にはタカラ扎木みたいなこともできるのかなと毎日した人もあったようです。

初めての時間に、まず歌ってみましょうと言って学生さんが選んだのが「行のうた」。はてこの周りに田舎人はだらかな、と思うわ外をのぞいたのを思い出します。目を輝かせる人、テクサラル人、ある日突然活動活き活識始める人、人、人……。

患者さんに「からだと」を実在で働きかけ、まずは、抱き取ること、そして話しかけること、相手の身にふれたこと、を目指して十年。数年前の宮島さんの調査で、現場に入った時には思い当たって役立つことが多かったと言ったのが喜びでした。できれば一年生だけでなく、大学院生で深めたかったが。

看護の学は舟出したばかりと外見は思っています。常に体の実践と、対象化する理論構築とが交じり合って展開する、学としての方法が近代科学の思考を超えるを得る視野を含むだけに今大学で学んでいる人たちこそその建設が委ねられて、未来の学だと言えるでしょう。だからだからがむを重ね合い、人と人が深く出会うことにおいてのみ真実たりうる。未来の学が遅かに航路を取り石でゆかれることを期待して。

Bon Voyage！さようなら、よい航海を！

飛躍する母校づくりへの願い

後援会 会長 藤井 正憲

看護大創立10周年を迎えられましたことを、心より慶び申し上げます。看護大の歴史は、高齢化、情報化、国際化、成熟化等の社会情勢の変革に対応するため、兵庫県の英断と南学長はじめ関係者の熱意とご尽力により、開設されました。

小規模ながら美しい桜並木とモダンな校舎に囲まれて、優れた指導者と恵まれた教育条件のもと、創立以来、創造力にあふれた優秀な学生を多数社会に送り、地域福祉の向上に寄与された役割は、誠に大きいものがあります。

日本には、四年制大学が七百校近くありますが、学生数の減少に伴い、大学は競争の時代に入っているにもかかわらず、看護大の発展、充実は極めてしく、著しく歩み続けています。

ここ数年間においても、大学院の開設、地域ケア開発研究所の開設等々と、現代社会の課題に応える研究成果の発信と提言に、看護大に寄せられている期待を見ると驚くと思います。

こうした活気ある看護大に、心強く思える反面、来年度からの県立大学への経費にともない、多くの課題の早期対応も迫られていますが、今後は、スケールメリットを活かし、日本だけでなく世界へ発信できる体制づくりを進めて欲しいと願っています。

最近、本学の活動が、よくマスコミに取り上げられています。このことは看護大にとっては大きな評価です。活気ある活動が、母校発展の推進力となりますし、社会で貢献できる実力のある学生をどれだけ育てられるか、大学の評価の一つの条件と言えているからです。

10周年は、建物の歴史ではなく、大学を通じてそこでお互いに研鑽した者の歴史であり、今後創られていく一過程ではありませんが、この記念すべき年に、御縁を頂いたことに大変光栄に思いますとともに、記念事業のご尽力賜りました大学関係者の皆様とこれまでの後援会の推進にご協力頂きました役員の方々に、心よりお礼申し上げます。
開学10周年に寄せ

兵庫県立看護大学同窓会会長・竹原 歩

兵庫県立看護大学同窓会会長をさせて頂きまして竹原歩です。

このたびは母校が開学10周年を迎えるにあたり、これまでご尽力頂いた南学長をはじめ諸先生方、職員の方々、学校関係者の皆様には心よりお礼を申し上げます。また、記念誌への寄稿の話を頂き、大変光栄に存じます。

私が母校に入学したのは1994年、開学2期生でした。その当時は教職員と学生、地域の方々で作る小さなアットホームな大学で、楽しい学生生活を送りました。その中でもやはり忘れられないのは1995年の阪神・淡路大震災です。

非常に多くの犠牲者が出た大震災は、精神的に未熟だった私にとってはとてもショック的なことでした。心を抑えつつも時間は後を追っていました。そうした混乱の中で先生方が大学を拠点として、看護者として地域に出られる姿を見て、さらにその後行われた大学での講義に大きな影響を受けました。看護師として働く現在の私の基本を作るもの一つです。

私は卒業して5年が経ちました。現在兵庫県立鶴路循環器病センターで勤務しておりますが、毎年多くの後輩を送り出している母校に頃も喜びを感じます。3大学が統合されるなど変革の時期となりますが、今後とも変わらず多くの後輩を地域に送り出し、欲しいと思っています。

最後に同窓会会長会では、卒業生、教職員の方々に多く入会して頂き、今後とも情報交換の場として活用して頂けたらと考えています。ホームページはhttp://www.keyaki-kai.com/、Eメールはinfo@keyaki-kai.comです。どうぞお気軽にお越し下さい。

共に歩む県協会と大学

兵庫県立看護大学会長 近田 敬子（兵庫県立看護大学）

兵庫県立看護大学に身を置きながら、兵庫県看護協会長としての役割を担わなければならないと、自らを駆り立てている力の源には、二つの事柄がある。

一つの一つは、看護大学附属図書館に飾られている納戸企伯による120号2枚の絵画にある。その絵は、看護界の大先輩である住吉さんと兵庫の県立看護大学をという授興が込められたことであると聞いたことがある。すなわち、兵庫県に病院に病院、帰らぬ方がとなられたが、その後遺症として多くの寄付を県に寄せられた。その遺志は見事に組織団体および県下の関係者を動かし、およそ20年後の平成5年に大学が創設された。その後遺志とともに県下看護者の皆さんの情熱が伝わり、県に開かれた大学となり、今年で10周年を迎えるに至った。矢車に投じられたその遺志に添わねばと思う気持ちが、大学人である私よりも実協会活動に従事する機会になっている。

もう一つは、大学創設後の5月に1000名にも及ぶ看護者の皆さんが、貸し切りバスを仕立てて大学新設見学にこられた時のような成功に由来する。陸前大迫を含む、やっと金銭が足った思いで、寄贈のナイチンゲール像の前で“我が大学”という言葉が発せられた際、大学に対する熱い想いを感じさせるを得なかった。県下の看護界のために何らかの役割を果たさなければならないと肝に命じて、協会活動を始めた。ふと気がつくと、県協会会長になっていた。

二足の草鞋で充分なことが出来ているとは思えないが、協会活動に関わることによって、看護教育としても生かされ、成長していることに気づかされる。共に歩き・高め合うことの真の意味を経験していると言える。話すすれば、看護の質の向上を目指して、共に歩む存在としての大学への期待が、多面的に存在する。協会活動は先駆的な課題に取り組むことが多く、一昨の不安を抱えながらの活動に他ならない。それゆえに、確かな方向づけの得られる支援が期待されている。
第3章

兵庫県立看護大学の歩みと発展の概要

兵庫県立看護大学10年の歩み
開学式
第1回学部入学式
阪神・淡路大震災
大学校章・徽章制定
学歌作成
第1回学部卒業式
大学院修士課程開学式
大学院学位授与式
博士課程が始まって
附属研究所推進センタースタート
名誉教授誕生
地域ケア開発研究所開設決定
兵庫県立大学設置認可申請
21世紀COEプログラムに採択
教授会議事からみた大学の変遷
兵庫県立看護大学10年の歩み

学長 南 裕子

兵庫県立看護大学が10周年を迎え、来年の春には兵庫県立大学看護学部および看護学研究科として生まれ変わろうとされているこの時期に、本学の歩みを振り返りながらその折々の問題とそれをどのように乗り越えてきたかを学長としてまとめることができるのはとても光栄なことである。開学までの時期については、「兵庫県立看護大学5周年誌」に記載されているので、ここでは省略する。

しかし、一言記すならば、本学が今日あるのは、大学創立を強く要望された兵庫県下の看護者の皆様と開学準備に関わられた兵庫県職員の方々のご尽力によることを忘れてはならない。本学の基盤がこの時期に築かれたといっても過言ではないと考えられるからである。また、開学から5年目までのことで、上記の5周年誌に記載されていることは、紙面の関係でここでは省略する。また、教育や研究活動についてはそれぞれの方々が書かれているので、私は主として管理的な立場からその振返りを行いたい。

1．教育と学生に関すること

1) 独自な学部教育について

本学は単科大学であるので、開設当初苦心したことは、学生の教養教育についてである。講師以上の教員の三分の一は語学や体育を含む基礎教育を担当教員であり、他方の大半は、看護学に関連する基礎科目を担当されている。また、学外から約20人の非常勤講師を通いたい、その大半が基礎教育関連の教育科目担当である。また、看護学自体が学際的な実践学であるという視点から、4年次研修する看護科（いわゆる卒業論文）は、看護学の専門教員だけでなく、全教員が参加してきた。1月始めの寒いホワイエで展示される研究成果の発表では、視野の広い学生が果たしたことを実感させてくれる。

看護学専門教員は、医師、看護師に関わらず基本的に臨床能力の高い人を採用してきた。この姿勢は実習指導を担当する助手の採用にももちろん適応される。これは、研究や教育業績を重んじる通常の大学人事と異なるものだ。看護学の教育にとって、初めて現場に出る学生の実習体験は極めて重要である。学生は、実習を通して科学的な知識や技術が統合されてArtとなる部分を体験するし、現場での体験は学生の成長を促し、卒業後の活動に深く影響を及ぼすからである。卒業間近の学生が学長室を訪れてきて、残る указанの多くは実習での体験であり、本学の教員の学生を枠に嵌めずにそれぞれの成長を見守る一貫した姿勢への感謝である。

二人のアメリカ人の教授が英語で専門教育を行っていた時期も長く、現在ではアメリカから二人の助教授がいる。また、①国際的機関で指導的に活動の教員、②在外研修制度を活用し、海外で研究生活を行った教員、③国際交流委員会を中心としたさまざまな活動、④学部生の洋上セミナー、⑤附属研究所推進センターにおける国際地域研究活動など国際的な活動は活発である。今年は、米国のワシントン大学看護学部と姉妹提携を結んだが、今後さらにHUMAP（兵庫・アジア太平洋大学間交流）枠組み下でのオーストラリア、中国、インドネシアにおける看護学部との姉妹提携を進める計画である。国際化に本学の特色のひとつである。

本学は、規模の小さな大学であるが、学生指導はさらに少人数教育を目指してきた。特に、学生が教育だけでなく生活相談できる体制を整えることに腐心してきた。学生委員会が中心となって、助手を含む全教員が数人ずつ受持つチューター制度は、4月桜の木々の下で行われる学外オリエンテーションなど毎年の工夫によって活性化するようになった。学生部長の熱意のもと、保健室の歴代保健師は、不安な学生を支えつつも助け、最近急増している自分探しに時間がかかる学生への対応はきめ細やかといえる。

1期生が基盤を敷いた学生会は、先輩-後輩のつながりの中で、さまざまな試みを重ねてきている。特に、最近はクラブ活動や学外祭などに不参加の学生が増える中で、大学文化の育ててきた。その際には、クラブ活動における指導者の皆様や学生委員会の教員、学生部主幹の支えがあってのことである。

学部の3年次に編入することができる編入制度が開始したのは、1995年からである。最初は、看護師の免許をもつ短期大学卒業生を迎えているが、専門学校卒業生も含めるようになった。兵庫県には短期大学が多く、専修学校卒業生が多いので、
当然のことである。

2）大学院の修士課程および博士後期課程の教育について

大学院修了課程は、1997年にその教育を開始した。本学の修士課程は、高度な専門職業人の育成を重点として開始し、専門看護師の育成に精力的に取り組んでいる。日本看護系大学会議において専門看護師教育課程として認定されたのは7分野であるが、いまのところ日本の看護系大学院では一番多い。教員は、修了生の職場再開に努力し、修了生もバイオキュア精神をもって現場で専門看護師として活躍しており、現在18名がすでに認定を受けている。また、教育者への要望が高いため、教育者として存在することも少なくなく、博士後期課程への進学者も多く出ている。さらに、行政若職能団体、病院管理など多様な場で活躍している人も少なくない。

本学の博士後期課程は、高度な専門職業人を活用できるような水準の実践的知識と技術の開発のできる研究者を育成を目指している。入学者は昨年まで22名であり、その内4名が修了し、大学での教育・研究若職能団体での専門看護師制度促進に携わっている。

2. 研究に関すること

開学直後の第2回教授会では、看護学の発展を促すためには学際的研究が必要であるという認識から、学内の講座を越えた共同研究の必要性について議論がなされた。当初は当時の社会問題であったHIV/AIDSに関連する研究を考えていたが、途中で大震災を経験したことによって、県からの特別研究費による災害関連の共同研究となり、そしてそれが現在の附属研究奨学金において災害看護研究活動へ、そして21世紀COEプログラム「ユビキタス社会における災害看護観点の形成」が採択されることにより次第に発展してきたのである。

本学の教員は、研究にも熱心であり、積極的に外部の競争資金を獲得する努力が払われてきた。2002年には公立大学の教員一人当たりの科学研究の取得は全国4位であった。厚生科学研究所において他の研究費獲得に対しても積極的である。震災後の改正の財政は苦しいが、大学の教員研究費に関しては特別な配慮がされていて、従来の教員研究費の減額は比較的少なく、その他に学長権限で配分される特別研究費がある。本学の課題の一つは、基本科目の教員内、非実験系として予算化されているなかで、実際には調査研究を行う実験系の教員がいることである。この方々への予算の配分は学内努力によってもかなわれているが今後とも課題として残る。

本学には28名の助手がいるが、大半は実習指導者を主な役割にしている。開学当初は、学部卒業生で臨床経験がある人が多かったが、次第に修士課程の生が増えてきている。若手の研究者の育成をいかにするかが今後の課題である。

本学開設時から現在まで、県下の病院や保健所、教育機関との共同研究費が予算化されている。研修・研究委員会が2年間にわたる共同研究の選考から研究成果の発表まで世話役を務めている。国を重ねる毎に、研究の質が向上し、実践の改善につながるような成果が得られているのは頗も貴重なことである。

平成13年に開設した附属研究所推進センターは、国際地域ケア、災害ケア、そして「まちの保健室」や両国ケアなど看護相関に関する研究を行っている。現在は非常勤だが、4名の研究員が就任し、学内の講座を越えた研究を共同で行っている。来年には、世界有数の「地域ケア開発研究所（仮称）」の開設が計画されており、実践的研究がさらに促進することが期待される。

3. 社会活動に関すること

地域に根ざした関西の大学として、本学は開学当初から一般市民向けの公開講座を地域交流委員会が中心となって行ってきた。また主に専門職を対象として国際セミナーが国際交流委員会が中心となり震災の年を除いて毎年開催してきた。いずれも毎回参加される市民や看護者の数多く、本学の重要な社会活動を行っている。

さらに、最近は兵庫県下の国公私立大学が参画する「ひょうご講座」の事業である「オープン・カレッジ」、神戸大学学術都市公開講座など、大学として参画する研究会は少なくない。さらに、地元の兵庫県が開催する看護職への研修会、兵庫県看護協会の研修会等以外にも全国組織からの講演会・研修会など教員派遣の要請が高い。

その他、文部科学省、厚生労働省、兵庫県などから審議委員や検討委員会へ教員派遣を求められて、多くの教員が活躍している。また、日本看護協会など職能団体、日本看護系大学協議会における
4. 大学の環境にかかわること

本学の建物は、昭和時代前期から古墳時代前期にかけての集落と水路が発見されている吉田遺跡の上に建っている。大学校舎を建設する前と、来年開設予定の「地域ケア開発研究所（仮称）」の建設前に埋蔵文化財調査が行われた。特に、後者は何かにかかわって多くの方々に見られ、暫し休むの神社の生活に思いを馳せたものである。

本学の創設は、安藤直雄氏によるものである。養原道民前知事が「学生や卒業生がいつまでも愛している建物」を建てるようにと依頼され、「水と光」をテーマに本学の設計が行われた。大変ユニークな美しい建物とキャンパスであるが、この建物に対する評判は当初から真二つに分かれ、安藤氏には、1994年1月に基調講演をしていただいたが、そのとき、学生や教職員からこの建物に関する厳しい批判をするという出来事があった。しかし、安藤氏はこれらの批判を真摯に前向きに受けとめることができたので、大学の設立後学生が直接彼らと親しむことができた。以後、この建物の美しさに感動して授業を受ける学生も出るようになり、10年前の今日、基礎工程の完成とともに、コンクリート打ちっぱなしの冷たい美しさも落ち着き、風格が増している。CNSA祭では、中庭にステージを設けることが通例になった。私は、四季の光の移ろいによって変化する建物の影や、水面に映る木々の姿を見るのが好きである。

この建物に縁の話はいくつかある。迷路のようなになっているので迷う新入生は少ない。開学当初には学長室などで雨漏りがし、ガラスを破り落とすなど対応の準備も発生した。台風の時に、体育館の横が床に曲がったために体育館の床と講堂の天井が水没し、学生や教職員が一丸となって水を出ることに懸命の努力をしたことがある。阪神淡路大震災では、建物の一部が損傷することはあったが、家を失った学生や教職員を受けとめて、全国から被災地に駆けつけられたボランティア看護の対策本部として機能ることができた。

建物の利用の仕方は、基本的にはあまり変わりがいないが、大学院設立に伴って教室や教員研究室の配置を変更した。2001年春には、附属研究所推進センターが建設されたが、2003年初夏に竣工され、現在は来年秋開設予定の「兵庫県立大学地域ケア開発研究所（仮称）」の建設工事中である。

附属図書館についても次々と問題が発生したが、歴代附属図書館長や事務長等を含む幹部、サポート役の事務長や事務次長の努力で乗り越えてきた。図書館の当初からの課題は、開館時間の延長であった。まず、午後7時までの開館とし、大学院博士後期課程開設後は午後10時まで院生と教職員に開放した。しかし、学部の学生の強い要望もあって、現在は学部生にも9時まで開館している。IT化によって良くなくなったことも多いが、ときどき故障に悩まされている。また、大学院の開設等によって、収蔵数は順調に拡大してきたが、当初5万冊収容と見込んでいたスペースはほぼ満杯となっており、今後の課題である。

大学のOA化、IT化に関しては、その必要が生じた度に委員会を設けて検討してきた。教育に関わるOA機器の整備は、本学は充実しているといえよう。学内LANは1999年から始まったが、学部生にメールアドレスを提供するまでにはいたっていない。しかし、県立大学になるとそれも解決できそうである。

私は、環境整備は事務局が命権としていた。その監督のもとに総務課の職員は、台風や震災の後の余剰をはじめ、炎天下における水まきやOA化やIT化対応など大変な苦労をされてきた。本学が実質機能を保っているのは、それ等の努力の賛辞である。

5. 大学の運営・管理組織について

1）教授会と専門委員会

単科大学における決議機関はいうまでもなく教授会である。本学の第1回教授会は1993年4月7日に10：05から18：10までという長時間にわたって開催された。参加者は学長を始めとする部局長、その他の構成員25名及び事務局長を始めとする幹部職員であった。現在の教授会は学部を入る構成員は、36人であるが、初年度は就任していない教員がいたためである。議長は学長が務め、会議は大講義堂で2重のロジタイプに組み合わせられた。学長は授業で右に学生数部と図書館長、
左に事務局長と事務局次長が座る講壇は現在に続いている。教授会会議議題は、常勤講師、助教授、教授であり、助手は傍聴者が許されている。第1回教授会議題は資料1の通りで、本学の組織を決め重要な会議であった。教授会は、1年目はほぼ毎週水曜日午後に開かれ、この年は合計2回であった。3年目からは通常は、月1回、第1水曜日の1時10分から開催するようになってきて、今に至っている。もちろん、入試判定などのために臨時教授会もあるが、緊急事態のために臨時教授会を開催したのは阪神淡路大震災発生に対応するためのものであった。その他の学生の事故や事件のために緊急臨時教授会を開催するに至らなかったのは本学にとって幸いなことであった。

教授会では、学部の教育研究に関わる重要案件はもちろん、大学院や附属推進センターの立ち上げなど本学の発展に関わる事項は必ず審議したが、議論を通して教員間の理解が深まっていった。本学は新設大学であったために、教員の大半は兵庫県からではなく全国から集まっており、大学についての考え方や教育に対する姿勢もかなり異なっていたのである。いわゆるコンセンサスを培って行く過程には痛みもあったが、それを避けなかったことで今の大学があるといえる。

教授会の審議は、大体スムーズな連携がされたが、特に学生の教育や福利厚生に関する討議では、当初は議論が紛糾していて、学生にとって何が望ましいのかという視点に立って、最終には教員の意見が一致することが多かった。私が本学の教員に寄せる最大の信頼は、学生のためなら骨を惜しまず苦労を共にできることである。

学長として一番苦労する教授会は、当然のことながら人事案件である。特に昇任人事の急激な、学際的な基準の定めにかかわりの苦労を要した。基本科目担当の教員たちは一人一人が学問を背負っていることになり、自然科学系、人文科学系、社会科学系や研究学部系によって研究実績の問い方が異なっているからであった。しかし、研究業績以外の教育実績や社会実績を評価対象とすべきであるという意見には教授会の同意が得られた。

人事委員会から推薦された採用・昇任候補者が教授会で承認されないということが重なり、教授会では時間をかけて今の体制を整えた。すなわち、採用や昇任人事の基準を具体的に明確にしたこと、および教員の会で構成される人事委員会を設け、教員の任用の決定は人事委員会に付託され、教授会は報告を受けるということになった。平成10年10月、人事委員会のもとに教員審査会を設け、教授以外の採用には助教授や講師を委員とすることができるようになった。この改革によって以後、人の任用に関して教授会で紛糾することはなくなった。

教授会で精力的に審議をしたにもかかわらず県の事情で結実しなかったのは「医療系大学」に関することであった。

教授会のもとに教員選考委員会を始めとする15の専門委員会を置くことを第1回教授会で決定したが、その大半の委員会がいかに形で今日まで継続している（資料2）。全く継続されなかったのは、環境美化委員会である。この委員会は第2回目の教授会で、教授会の専門委員会というよりも学生や職員共に協議することが望ましいという理由で専門委員会をしないことが決定された。しかし、結局、全学の動きは立ち上がらず、建物等の安全や美化は事務局の担当となり、以後学生や教職員が一丸となって環境の美化に動くという理想は実現しなかった。

大学院を開設するに伴って、①全学委員会、②教授会のもとの委員会および③大学院研究科委員会に区別して専門委員会等を設けることにしている（資料2）。

資料1: 教授会

1993年 第1回教授会

日時：1993年4月7日 10:05～18:10
場所：大会議室
出席者：南学長、近田学生部長、吉本図書館長他25名の構成員。
柏木事務局長、横田事務局次長、長田学生部次長兼学生課長、松原総務課長

20
議題
1. 県立大学の運営組織
   1) 部局長会議に関する内規
   2) 学長選考規程
   3) 学生部長選考規程
   4) 附属図書館長選考規程

2. 学則、教授会規程について
   1) 学則
   2) 教授会規程

3. 専門委員会について

4. その他
   1) 開学式と入学式
   2) 議事録署名人について

教授会の開催回数（臨時教授会を含む）

<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>開催回数</th>
<th>年度</th>
<th>開催回数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1993</td>
<td>28</td>
<td>1998</td>
<td>15</td>
</tr>
<tr>
<td>1994</td>
<td>28</td>
<td>1999</td>
<td>17</td>
</tr>
<tr>
<td>1995</td>
<td>17</td>
<td>2000</td>
<td>18</td>
</tr>
<tr>
<td>1996</td>
<td>20</td>
<td>2001</td>
<td>18</td>
</tr>
<tr>
<td>1997</td>
<td>17</td>
<td>2002</td>
<td>15</td>
</tr>
</tbody>
</table>

資料2：専門委員会およびその他の委員会

第1回教授会で決定した専門委員会
1. 教員選考委員会
2. 教務委員会
3. 実習調整委員会
4. 入試制度・入試委員会
5. 予算委員会
6. 機密選定委員会
7. 広報委員会
8. 留学委員会
9. 公開講座委員会
10. 学生委員会
11. 図書委員会
12. 地域・国際委員会
13. 自己点検評価委員会
14. 環境美化委員会
15. 将来構想委員会

2003年度存在する委員会
1. 全学委員会
   1) 自己点検・評価委員会
   2) 図書館委員会
   3) 研究倫理委員会
   4) 新県立大学設置に向けた準備・検討委員会
   5) 衛生委員会

2. 教授会のものとの専門委員会
   1) 人事委員会
   2) 教務委員会
   3) 実習調整委員会
   4) 入試制度委員会
   5) 入試委員会
   6) 予算委員会
   7) 機密選定委員会
   8) 広報・学報委員会
   9) 留学委員会
   10) 学生委員会
   11) 地域交流委員会
   12) 国際交流委員会
   13) 研修・研究委員会

3. 大学院看護学研究科委員会
   *研究科委員会のものとの委員会を兼ねる

第1回教授会で決定した専門委員会
2）管理運営について
執行機関としては学生部長のもとに学生部、図書館長のもとに図書館、事務局長のもとに事務局が設けられ、横の繋がりをもって運営するためには局長会を設けている。部長会は原則毎週金曜日15時から開催されるが、暦の要因を考慮したとして必要に応じて総務課長会を開催することを決定した。教授会における審議事項についても、審議議題の調整が必要なものがある。このため、本学において重要な課題の審議を行っていた。例えば、自己点検評価委員会を立ち上げるまでの準備、防災や消防体制の検討、セクシャルハラスメント防止対策案、研究倫理審査体制の検討、法人化に向けた勉強会などである。
本学は、事務局職員に恵まれた。開学準備のときから関わっていった横田成樹事務局長（開学当時は事務局次長）を始め、その時の職員の大半が本学開学時に就任されたので、スムーズな移行ができた。当初は事務局（総務課、学生部、図書館を含む）も連日、夜遅くまで、日曜祭日も出動されるというハード的な職場であった。公立大学は、よく事務局のあり方が問題になるが、本学は事務局職員と教員団体との関係については、かなり理想的な独自の文化を育ててきたという自負がある。教授会もとり、専門委員会などには必ず事務局の幹部・担当職員が出席し、議会の整理や検討事項の事前の下調節はもちろろん、審議の中でも意見を積極的に述べていただいた。本学の発展には、歴代の事務局職員の皆様の多大な資献があったことを特記しておく。

6. 本学の自己点検評価・他己評価の取組み

開学以来、拡大部局長会において大学の自己点検評価に関する勉強会を行い、全学的に自己点検評価のあり方についての考え方を、どのような方法で行うかという検討会をしていた。その結果、部局長と学内から選出された教員（助手を含む）からなる委員会を立ち上げ、学長が委員長となって行うことになった。第1回自己点検評価は、1993年から1996年8月までを対象に行行った。学内からはかなり厳しい点検評価が行われたので、元保健環境部長として開学に深い関わりのある原安井博之氏に「大学というのは大変なものですね」というお見舞いのお手紙をいただいたことが忘れられない。小規模ながらも活発な大学として機能するには、教員一人一人の負担が重いことに起因する批判が多かったのである。

しかし、学長として、学外から西島安則先生（京都大立芸術大学長、元京都大学総長）と平山朝子先生（岐阜県看護大学長、元千葉大学学部長）を招いたが、二人には概ね良く頑張っているという評価をしていた。

第2回自己点検評価（1998-1999）は、あわせて大学基準協会の維持会員になることを目指していた。大学基準協会の維持会員になるには、相互評価を受ける必要があったが、基本的には大きな問題は指摘されず、維持会員となることが出来た。2001年は、第2回自己点検評価で問題となった課題について、どのような改善がされているかを調査して、報告書としてまとめた。なお、第3回自己点検評価（2000-2002）は、現在までの段階に入っている。このように、本学は、開学当初から極めて真面目に自己点検評価を行い、その結果を改善に生かしてきた。限られた資源のなかであったとしても、問題解決に向けて前向きに全学的に取組みできたといえる。

7. とりまとめ

開学時、教職員を前に「大学という文化形成」について語ったとき、「新しい文化を生み出すことは夢と希望に満ちた側面がある中では、時に痛みも伴うものだと思うが、お互いの力を合わせて兵庫県立看護大学の文化を育てよう」と呼びかけた。それから10年後の今、私は本学の学生と教職員はまさにこの夢と希望を追いかけ、痛みを乗り越えながら、相互理解と信頼を深め、本学独自の文化を育ててきたように思う。

しかし、大学の本領が問われるのはもはやこれからのことである。学生による評価もその公表など教育における課題も残っているし、看護学の発展を著しく促進し、社会を動かすと大学研究が生まれているわけではない。21世紀COEプログラムが始まったばかりであり、来年度に予定の「地域ケア開発研究所（仮称）」においてどのような実践研究が生まれるかはこれからからの挑戦である。

また、本学は来春からの県立大学である神戸商科大学と姫路工業大学と統合し、兵庫県立大学看護学部および看護学研究科として再出発をする。10年の経験をもと、新たな課題に対応するためにカリキュラムも講義構成も大幅な変更が行われることになっている。

全く異なる学問分野の学部・大学院の学生や教員との交流が、本学の今まで培った文化にどのような変化をもたらすか、極めて興味深い。本学は、開学初年度の教授会で英語名称をCollege of Nursing Art and Science, Hyogo（CNAS, Hyogo）としたが、ArtとScienceが融合した新しい学問としての看護学発展の一翼を担うべく、今後ともためまぬ努力を積み重ねてほしいものである。私は来年から今までとは異なる役割で、この学部と研究科の発展を見守っていきたいと思っている。
開学式

開学式は平成5年4月15日に挙行され、兵庫県立看護大学は教員46名、職員20名による新しいスタートをきたした。開学式では賀来俊民 兵庫県知事、南谷子 学長により式辞が述べられ、来賓として川崎三雄 兵庫県議会議長、岡田進裕 明石市長、公立大学協会長の蜂須賀啓悦 名古屋市立大学長より御祝辞を頂いた。

第1回学部入学式

平成5年4月16日、第1回学部入学式が行われ101名の第1期を迎えた。入学式では101名の新入学生が紹介され、浅井弥代さんが新入生代表の言葉を述べた。その後各講座ごとの教員・職員のユニークな紹介が行われ、そして入学式終了後、教員による新入生のための学芸案内が行われた。
阪神・淡路大震災 ～阪神・淡路大震災と看護大学の対応～

◆ 1995年1月17日午前5時46分 一地震発生一
教職員による学生・教職員の安否確認、一時避難所として学生の学内宿泊・炊き出し。

◆ 1月19日
学生・教職員の安否最終確認し、本人及び家族の中で生命を失われた人はなし。

◆ 1月18〜23日
余震も続き、まず生活基盤の確保対策をとる。第1週目休講、第2週目より賃貸賛論があっ
たが授業が再開される。

◆ 1月24日
登校した学生に説明会を行う（大学の対応と授業再開の経緯、余震対策、学生の被害状況
調査）。

◆ 1月26日〜2月1日
学生の不安解消のための相談窓口を設け、学長・学生部長が登校できない学生の自宅を
訪問し、実態把握につとめた。

◆ 2月
後期試験はほぼ予定通り実施された。

◆ 2月7・8日
1・2回生は学年集会を開催する（春休み中の連絡先調査、新たな下宿探しの情報、4月か
らの学生生活）。保健室において心のケア支援が行われた。

◆ 3月5日〜9日
冬期課外活動のスキーを予定通り実施する。実施の可否については、意見対立が起こった。
阪神淡路大震災後の救援活動
－「ここをのケア」のボランティア活動－

兵庫県立看護大学 精神看護学教授 近澤 篤子

被災直後より様々な形で救護によるボランティア活動が展開されたが、「心のケア」に関する印象深い取り組みの一つは、アンダーウッド教授による被災地の住民の看護管理者を対象とした心理教育アプローチである。看護師自身が被災後の心身の変調を正常なストレス反応として理解し、日常の行動様式を再構成するための活動の機会になると同時に、それぞれの被災体験を語りあうことを通じてサポート的な関係性が育まれる機会ともなるこの有効な方法を、私は同行させていただくことを通じて学び、自ら実践させていただいた。

もう一つは心理学・精神看護学の担当教員じめ有志の教員と学生による避難所への精神的な訪問活動である。避難所での共同生活に疲れ、仮設住宅への移転から取り残される心細さを抱えた方に、自然発生的な個別面接や子どもたちとの遊びを通して寄り添った体験は、忘れがたい出会いの記憶としてそれぞれの胸に生き続けているものです。

阪神淡路大震災について

兵庫県立看護大学 地域看護学助教授 井伊久美子

阪神淡路大震災から10年を経た現在、被災し倒壊した家屋や避難所、仮設住宅の記憶も身に染まるまでとなりました。私は阪神淡路大震災を契機に発足した災害看護学会や看護ネットワーク活動に関わらせていただきました。震災時にもその後も災害時の保健領域における看護活動を考慮させていただく機会を得、自分自身は非力ですが、多くの方々との関係の中で看護のパワーや実感してきました。しかし一方で、震災以降、まだに時間が止まったままの方々に出会いと、10年が経って長期的ではないと言う自然の力の大きさと小ささを学ぶ人も人との支えあいの大切さを改めて感じます。震災後10年の様々な経験と同時に災害に強い地域のあり方を考えることができればと思っています。
大学校章・徽章制定

大学のシンボルマークは開学前に公募が行われ、応募作品の中から渋谷由夫氏によるデザインが選ばれた。このマークは「ナース」のイニシャル「N」をモチーフに、未来を目指す若鳥の姿を「N」の字のシルエットに重ね合わせて表現している。また、グリーンの羽根は愛の心を、ブルーの羽根はナーシング「アート」と「サイエンス」をシンボライズしている。

大学の徽章は本学の学生と教員からデザインを公募して、元本学の川口孝助教授によるデザインが選ばれ、開学時より用いられている校章のイメージを生かし、動きのあるものとしてアレンジされている。

学歌作成

学歌は、作詞を安水歓和先生、作曲を中村茂隆先生にお願いした。作成前に大学を見て頂き、キャンパスが水と緑と光をテーマとしていること、学歌として敵かななもの、また、学生たちが和やかに歌えるものをとお願いした。

兵庫県立病院大学 学歌

安水 歓和 作詞
中村 茂隆 作曲

1. 桜並木の 風の色
   燃える花の色 土の色
   学び育み 歌い出す
   生命への愛 看護の心
   ČNÁŠ HYÓGO ČNÁŠ HYÓGO
   明日にとどける 今日の想いを

2. 流れる水に 身をひたし
   苦しむ人に 寄り添って
   恋む心と共にある
   生命への愛 豊かな運命
   ČNÁŠ HYÓGO ČNÁŠ HYÓGO
   明日にとどける 今日の願いを

3. 溢れる光 空に満ち
   生きる力を 引き出して
   生きる喜び 語り合う
   生命への愛 羽ばたく散る
   ČNÁŠ HYÓGO ČNÁŠ HYÓGO
   明日にとどける 今日の祈りを
第1回学部卒業式

平成9年3月25日、第1回学部卒業式が挙行され、編入生10名を含む105名の卒業生を送り出した。場内拍手の内に卒業生が入場し、一人ひとりが壇上に上がり南村学長から学位記が授与された。
大学院修士課程開学式

平成9年7月2日、兵庫県立看護大学大学院修士課程の開学式が行われた。関西地区では初めての看護学修士課程の開学式に雨天にも関わらず、230名が参加した。設置主体である兵庫県の井戸敏三副知事から公立大学として、初めての看護系単科大学の開設の経緯や、今後への励ましが込められた言葉を頂いた。

平成9年度第1期生は26名が入学した。

大学院学位記授与式

平成11年3月25日、平成10年度看護学部3期生および大学院修士課程第1期生の合同卒業式／学位記授与式が行われた。

例年通り、看護学部卒業生112名は、南学長から一人ひとり卒業証書を手渡され、暖かい挨拶のなかで式が進行した。また、今年は大学院の修士課程の修了生21名も南学長から一人ひとり学位記（看護学修士号）を授与され、心新たにして専門職として活躍する抱負を熱く語り合っていた。
SHORT COLUMN
修士課程を終えて

専門看護師として就職して

関西ろうさい病院 精神看護専門看護師 早川 昌子
(学部入学1997年卒業)(大学院修士課程1999年修了)

1997年に編入生として看護学部を、1999年に大学院看護学研究科を修了し、再び臨床の看護現場に戻って2001年には精神看護専門看護師として認定審査に合格し、新卒リエゾンナースのうえにも恵まれた時間が過ぎてゆこうとしている。新しい役割に慣れて、そこそこ“仕事”が出来るようになるまでには、はがゆい思いをし、成長しなければ自分に落ち込む...と、初めて看護師として一歩踏み出した十数年前を体験したような印象がある。実際に、我ながら成長は遅いし、自分に対するexcuseも多い。制度としての歴史が浅い業界ゆえに、現実的に困難な問題も早くも多い。しかし、臨床看護現場にいることがとても楽しく、信頼できるスタッフと仕事をしてゆく充実感は、本当に“クセになる”ほど私を魅了している。つくづく、看護師である自分が幸せに感じるこの業である。

看護管理者認定に合格して

兵庫県立成人病センター 看護部次長 成田 康子
(大学院修士課程 2000年修了)

看護管理者認定制度は、多様なヘルスケアニーズに対応する質の高い組織的看護サービスを提供する事を目指し、看護管理者の資質の向上を目的として制定されています。質の高い組織的看護サービスを提供するために、まずは自分自身が参加する院内の会議で、看護サービスの視点から発言・提案してゆく事が非常に重要になります。また、その提案で組織のわずかな変化が実感できた時は、看護管理者として大きな充実感と明日へのエネルギーを感じます。会議での発言力は、大学院時代に身につけた論理的思考力と同窓生との人間のネットワークによる情報交換により支えられています。今後は、県立病院と看護大学の協働の下となり県全体の医療の質の向上に貢献してゆきたいと考えています。

小児看護専門看護師の認定を受けて

兵庫県立こども病院 小児看護専門看護師 演田 中紀
(大学院修士課程 1999年修了)

「病気を持ちながらも、優しくそして温かく育っていく子ども達が、自分らしく生きられるように支援したい」 そんな思いを抱きながら看護師を続け、2002年11月に小児看護専門看護師の認定を受けた。専門看護師としての活動はまだ確立されており、自身の能力も未熟であるため、課題は山積みであるが、1つ1つ地道に解決していきたいと考える。パイオニアとしての大変さもあるものの、数多くの素敵な方々に支えられていることを心強く感じなる。子どもと家族によりよいケアをタイミングよく効率よく提供できるように、そして私達医療者も充実感を持っていきたいと願っている。周囲の方々と協力して頑張っていきたいと思う。
博士課程が始まって

平成11年4月に博士後期課程第一期生を5人迎え入れた。専攻領域は、生涯健康看護学分野における発達看護学（小児看護学）2名、健康看護学（社会看護学）領域2名、および広域健康看護学分野の国際地域健康看護学領域1名であった。本学の博士後期課程は、大学設置基準の14条特例により働きながら学ぶことができるよう配慮されている。

SHORT COLUMN

博士課程に進学して

博士課程に入学して

兵庫県立看護大学　成人看護学　講師　森　菊子
（大学院修士課程2000年修了）（大学院博士後期課程2003年入学）

修士課程を修了する時には、まさか自分が博士課程に進学するだろうとは考えていませんでした。いざ進学してみても思うことは、例えば理論看護学Ⅱの授業のように、南教授、片田教授に学生がたった6名だけで教えていただけるというとても恵まれた環境があることです。また、授業のためのプレゼンテーションの準備は大変ですが、準備する上での知識をさらに深めることができるとともに、プレゼンテーションを行うことで返ってくるものもとても大きいということです。本当に先生方が学びの深さに感銘するとともに、この課程を通じて、看護における「自分作り」をしていきたいと思っています。

博士課程を終えて

兵庫県立看護大学　成人看護学　講師　渡辺　かづみ
（大学院博士後期課程2002年修了）

兵庫県立看護大学10周年おめでとうございます。兵庫県立看護大学院博士後期課程の一学期として3年間の学びを終え、大学教員として働き始め2年目となりました。2年目になりやっと周りを見る余裕が少し出せました。博士後期課程入学前と比べ私自身が変わったと感じることは、「概念」に対して慎重に向かうようになったこと、「創造」することの楽しみが増えること、「独自性」にこだわるようになったということです。例えば講義の準備をしている時や、研究や研究指導をしている時、または学会等に参加していても上記のことを感じます。このような時、教育の力を感じる一方で、まだまだ未熟な自分も自覚させられます。

兵庫県立看護大学は10年目を迎え新たに大学として発展していると思いますが、私の10年後が博士後期課程修了生として役割を果たせているように、毎日を送っていきたいと改めて思いました。
附置研究所推進センターがスタート

平成13年4月、兵庫県立看護大学附置研究所推進センターが設立された。この附置研究所推進センターは、看護ケアシステムの開発・検証の実践研究の拠点として、設置を進めている「地域ケア開発研究所」の前身として研究実績を高めるためにスタートしたもので、学内外からの支援を受けながら、本格的始動を開始した。

名誉教授誕生

平成14年11月19日、本学に平成6年4月より平成13年3月まで務職されたパトリシア・アンダーウッド元教授が、教育上、学術上顕著な功績があったことが認められ、本学初の名誉教授とされた。アンダーウッド教授は、特に日本の看護界において先駆的な看護管理学の分野で学部教育及び大学院教育に大きな貢献をされた。
地域ケア開発研究所 開設決定

本学は、「地域ケア開発研究所（仮称）」の設置に向け、設立推進委員会を設け、外部資金の確保に向け、募金活動を続けながら、県による研究所の建物の整備を要望していた。その結果、平成15年2月、研究所の建物の建設にかかる県予算を平成15・16年度に計上することが決定され、平成16年10月に「地域ケア開発研究所」が開設されることが決定された。

災害看護学、初の研究所

被災地でのケア生かす

兵庫県立大 04年に新設

高齢者ケア 地域の手で

県立看護大に研究所

平成15年2月15日(土) 朝日新聞より

平成15年2月14日(金) 神戸新聞より
兵庫県立大学  設置認可申請

平成15年7月、文部科学省の大学設置・学校法人審議会は、兵庫県が申請していた神戸歯科大学、姫路工業大学及び兵庫県立看護大学を統合して、平成16年4月に開設予定の兵庫県立大学の新設を認めるよう、文部科学省に答申した。8月1日、文部科学省は兵庫県立大学の設置認可を兵庫県に通知した。

http://web.pref.hyogo.jp/daigaku/index.html
21世紀COEプログラムに採択される

平成15年7月17日、文部科学省が発表した「21世紀COEプログラム」の研究教員指名により、本学は、全国の私立医学系大学で唯一選ばれました。このプログラムでは、「ユビキタス社会における災害看護拠点の形成」をテーマに、世界的規模で、災害によって生じた生命や健康への被害を、最小限に抑えるための看護支援方法を、求めるべきユビキタス社会に向けて構築することを目的としている。
教授会議事からみた大学の変遷

1993（平成5）年

諸規程の成立と大学運営のためのしくみづくり

4月 開学：初代学長 南村茂子。大学運営組織図・部局長会議内規、学長、学生部長・図書館長等の選考規程成立。学則・教授会規程の解釈。

専門委员会概要と各委員原案は都長会議で作成。開学式・入学式4月8日。開学記念日4月15日。

委員会：入試制度委員会は当面拡大都長部局で行い、入試委員決定。

予算：開設機器及び教員研究費配分。

教授会規程：教務・学生各委員会の規程成立。

5月 規程：定年・出講に関する規程、入試・実習調整・記録・学長・学長・広報・国際交流委員会等の規程成立。

教授会参加：構成員以外の参加を許可。

学務委員会：学務委員会の参加を許可。

既修得単位：入学前の単位認定を審議。

大学見学会：1,000名程度の受け入れ。

6月 規程：機種選定・地域交流委員会等の規程成立。

学務：教務のデザイン・ロゴの検討。

7月 規程：図書館規程成立。開館時間と休館日は今後の課題。記要編集と発行細則を定める。

入試：6年度入学者選抜方法の審議。

クリスマス・毎月1日大学合同説明会の開催。

予算：学生実験実習用備品購入計画の承認。

8月 規程：図書館規程・教員選考基準の成立。

学内OA化：都長直轄の基本計画書の作成。

教職員住宅：大学教職員住宅管理規則の作成。

大学行事：公開講座・国際セミナーを設ける。

9月 規程：図書館委員会規程成立。

教員選考：教員選考内規成立とともに、教員選考委員会を設置。募集方法と選考方法を審議。

7年度の入試体制：編入学試験の実施体制。

共同研究：地域の病院・保健所等との共同研究事業の説明と推進は研究・研究委員会担当。

10月 授業料免除：学業成績基準制度。

予算：学年進行中は都長で予算関係を扱う。

報告：大学基準協会会長職として加入。第1回大学祭計画。

11月 大学英語名称：COLLEGE OF NURSING ART AND SCIENCE KYOGO。

在外研究員：在外研究員制度化。

12月 入試：推薦入試・一次選抜受験者182名中22名の合格を承認、今後の合否判定のあり方について入試制度委員会で検討。

教授会のあり方：教授会・専門委員会・都長会議・拡大都長会議・事務部門との関係を討議。

委員会：委員会の委員を再検討し、調整する。

規程：研究研究委員会・入試制度委員会・研究員等の規程成立。

在外研究員：6年度は中期2名を採用。

課外活動：冬季スポーツ課外活動計画を承認。

特別講義：大学設計者は安藤忠雄氏の講演とパネルディスカッションを開催することに決定。

1月 履修：再履修・再受験結果（学内申込）の進級取扱い内規にについて意見交換。

大学入試センター試験問題、初回の受け入れ。

入試判定：7年度入試から、入試委員会で手続の原案を作成する。

大学退学者：説明と参加の決定。

2月 退職：前期日程307名。後期日程197名。奨学金1名の出願状況、平均倍率6.3。

編入カリキュラム：基本的考え方の意見交換。

教育：チューター制・試験欠席者の取扱いの検討。

紀要英語タイトル：College of Nursing Art and Science KYOGO Bulletinに決定。

3月 入試：前期日程62名の合格。採点やり直し課題は今後に検討。後期日程14名の合格者、追加合格者の取扱いを定めた。

自己点検・評価：委員会設置と完成年次まで拡大都長会議構成員を委員とする。

学内の学習：フォロー必要な学生への対応体制の検討。再選択と再受験の評価の確認。

安全対策検討会：実習・演習に係る安全対策のための検討会を設立。

学生相談制度導入：4～5名の学生を担当。

1994（平成6）年

大学運営円滑化のための諸規程等の改正と大震災への対応

4月 大学院設置：設置決定。教授5名の委員決定。

大学院学則の計画。

体育大会：計画立案。

5月 予算：6年度開設機器備品整備・教員研究費等の配分。非実験系教員への充実案の承認。県立大学における民間資金等の取扱説明。

6月 大学院設置：採用予定の改正提案を採用委員会が原案を作成する。

科目等履修生制度：7年度からの創設と規程の
1995（平成7）年

規程の解釈と微調整および遂行、大学院準備期

4月
授業：4月17日より平常授業に復帰。

5月
大学院設置基本計画：基本的枠組みを採択。

7月
課外活動：大学行事として位置づける。

9月
教員人事：地域看護学教授を新たに公募決定。

10月
昇任人事：地域学教授を新たに公募決定。

11月
教員選定報告：新しいルールで人事委員会から

12月
教員選定報告：新しいルールで人事委員会から

1996（平成8）年

学部完成記念日と大学院開設申請に向けて

4月
研究機：横浜市衛生局から1年間、愛媛県立医

5月
大学院設置認可申請書：基本計画からの審議経

6月
大学院人事：申請段階における予定教員の公表

3月
当面の授業時間：交通機関の運行状況を勘案し

5月
大学院設置認可申請書：基本計画からの審議経

6月
大学院人事：申請段階における予定教員の公表

方法の了解事項。
大学院規程：研究科委員会規程、学術規程として認定のため、文部省に提出し、7月27日文部省に認可された。

7月
大学院設置認可申請書：7月27日文部省に受理される。履修規程は、審査として承認。

大学院新開設に伴う実地調査：9月9日までに大学院整備費年次計画に基づいて大学院情報処理室改

9月
大学院施設調査要旨：カリキュラム要旨は著者、教員審査は社会局による審査。

10月
社会実習課題：20名の受験者に対して、4名を合格者とした。

災害緊急時職員行動マニュアル：大学全体のマニュアルを作成することを決定。

大学歌・雑誌：第1期生の卒業に際して、公募に補助者の認定を決定。

初回経済見計表：スケジュール・論文構成・発表方法等を定める。

11月
大学院配置：文部省の指導要項、情報処理実習を大学院に申請し、配置の認定を実行。

学長選考規則・同施行細則：期限満了に伴う初めての選挙を控え、解釈及び要項について設問。

細則で特別選挙の順序は、特別選挙の順序で、さらに2次選挙の選挙は、選挙実施の所信表明の書を加えることになる。

12月
選挙管理委員会の設置：学長選挙に伴う5名の管理委員を選出。

大学院設置認可：12月19日付で認可。

1月
大学院設置：9年4月分の間、入試等を実施するために、大学院設置委員会を組織する。

卒業式：式のあり方として、卒業生が贈る賞を設けて、辞表は学部優秀者が述べる。閉会後に出会いを認定した。

学長選挙結果：1月25日9日2日、南村教授に決定。

2月
学生選挙図書館選挙：任期満了に伴う選挙が実施される。

3月
学生寮体制の充実：学年担当配置・相談担当を3年生まで拡大・4年生は総合看護担当教員。

1997（平成9年）

学部充実部と工学部準備

4月
研究部：研究科委員会の3年間の継続・職員の担当を求める。

学部規程：研究科委員会の3年間の継続・職員の担当を求める。

研究科規程：研究科委員会の3年間の継続・職員の担当を求める。
1998（平成10）年
大学の拡充と大学間連携促進
4月 研修員：日中医学協会派遣により研修員受け入れ
人事：経済系採用人事の延滞を承認。
昇任人事：教授から教授への昇任投票で白票の投票が数票、再投票に持ち込まれ、人事委員会報告は否決され、差し戻される。臨時教授会において昇任が承認となる。
5月 五周年記念事業：開学当初の出来事などを記載する方向で記念誌作成が承認。
6月 専門学校卒業者の編入学：社会的要請に鑑み12年度入試から受け入れることを承認。
社会人入試選抜方法：【志望の動機】を選抜日程で扱うことに変更。
看護学研究科博士後期課程設置協定書：文部大臣に提出。
7月 大学連携ひょうご講座：11年度から学外科目を設けることで承認。
9月 採用人事：経済系担当教員を助教授に10月採用で承認。
10月 学位英文表記：学士（BSN）、修士（MSN）、博士（Ph.D.）となる。
人事見直：【現行の昇任人事の概要と問題点】
昇任人事見直しの概要：兵庫県立看護大学教員の昇任取消申請"異議"提出"教授会規程案"提出人事委員会規程案"提出教員懇談規程案"等の審議の結果、各案ともに承認。
11月 編入学資格：出願資格で看護系専門学校卒者見込み含むを認めることの承認。
単位互換：神戸研究学園都市大学連携協議会共同事業として、単位互換講座を開設する。
紀要編集・発行細則：投稿資格拡大の改正。
12月 退職人事：本学助手から講師等に応募する際、結果が決定してから後任人事を遂める。
大学入学資格認定取得規程：本規程は外国人大学卒業者を想定したものであり、これを承認。
単位互換科目：学術都市互換科目は、教育学（通年）・社会学（前期）・地域経済学（後期）となる。
1月 再入学の取扱内規：内規案制定。
昇任人事：講師から助教授4名の昇任と助教授が講師に採用されることが決定。
2月 編入学試験科目：専門学校生の入試に伴い受験科目変更の提案があったが、時期尚早で、2年後に再提案することとなる。
学内ＬＡＮ：ラテン工事進捗状況及び取り扱い説明書実施計画の報告。
3月 再入学：学則第31条第1項により再入学を承認。
の解釈で承認。
学園都市大学間単位互換講座の単位認定方法：
本学と同一内容の科目および選択に該当する互換科目を承認。
1999（平成11）年
人権擁護と倫理的配慮と教育
4月 研修員：日中医学協会派遣により、研修員受け入れ（看護管理学）。
倫理審査体制：研究倫理体制の確立に向けての構想の提案。
施設管理システム：Lotus Notesにより開始。
図書館閉館時間：午後10時まで延長。
5月 視学委員現地視察：教養教育に関する視察結果所見の指摘項目を7項目を各委員会で検討。
大学基準協会維持委員：12年度に加入申請し、そのための作業を開始する。
入試問題作成体制：3つの組を設けて、より研究・検討され入試問題の作成に臨む。
6月 セクシャルハラスメント防止：文部省より規程の制定通知が来る。当分の間、地球生活者会議で対応する。
7月 セクシャルハラスメント防止策：傷つけた人のサポートシステムを作る方針で合意。
被験者謝罪の統一：統一化の申し合わせ。
人事：実施基礎講座教授の後任を講師で、成人看護学講座講師の後任は講師で公募。
9月 学則変更：学校教育法改正に伴う編入学資格（専修学校専門課程修了者）の文書承認。
国際交流：姫妹提携大学についてHUMAPの制度、国連検討に入れる。
倫理委員会設立までの経過措置：委員会を設立し、地球生活者会議で研究計画書の審議。
10月 研究倫理委員会規程：規程案及び運営要領を承認。
委員は次回選挙で選出。
11月 シラバス：自己点検・評価および文部省規制委員の指標から検討。
今後の予算：県財政厳しく、次年度は8割確保の状況。研究費は外部資金の導入の要請。
研究倫理委員会の運営：申し合わせて事項案を審議後、教授会で3名で助教授3名の選出。
1月 在外研究：12年度は中程2名と内地1名の枠となるが、13年度はゼロに変更。自費での在外研究大学を変更となる。
研究倫理外部委員：基準により1名を承認。
2月 休学に関する学則の解釈：学則留用を理由とする休学は現行学則では解釈できない。審議の結果「学則留用」と「家庭の事情」を認める。
セクシャルハラスメント防止対策：原案の審議
を行い、学生からのフィードバックにより、修正を加え、教授会経由で学生に配付する。

附属研究室推進運動体制：外部資金導入のための対策を部局長が考え、運動を進める。県の先行投資で大学南側用地を3月に売買契約締結予定。

3月 英語担当授業：教員の人権及び学生の学習する権利に関する討議の場を効果的に保つために審議し、人事委員会に付託する。

県立大学検討懇話会：看護大学としてのスタンスを審議。

大学統合案：県立大学統合案の検討。

2000（平成12）年度

県立大学統合案検討と附属研究所設立

4月 県立大学検討懇話会：懇話会において県統合に関する大学の考え方を示した。附属研究所設立は今回の検討案と共に実施の必要かを検討する。

5月 HUMAP：HUMAP（兵庫・アジア太平洋大学間交流ネットワーク）に参加する。在外研究取扱い変更：短期は全額公費で2名以内、中長期は往復旅費を除く管理費から支分で1名。内地留学学は旅費と研究費を除く管理費から支分で1名とする。

入試制度改正：《推薦入試》募集人数30名、県内・県外枠無し、但し県内枠2名・県外枠および衛生総合2名の薦める。平均対数4.1は否決。《一般入試》後期日程は4教科4科目とし、地理・公民・理科から最高得点を判定に用いることを承認。

6月 オリエンテーションセミナー：将来構想委員会から次年度企画を検討の提案に、学生委員会・教務委員会で調整。

県立大学検討懇話会：フリートーク論議の結果、説明会の開催を要望し、再検討に再検討を。

7月 カリキュラム変更提案：通年科目の廃止・科目の再配置等の提案に対し、家教条件適応的に考慮して再検討とする。

助手の病院等への研修：原則週1回と上位教員の同意を得る。

「県立大学のあり方」中間まとめ：各意見を集約して、懇話会に表明することになる。

9月 人事：成人看護学講師予定者決定。

附属研究所設立：大学の自治が得られたが、新設資金は外部資金のみが示唆された。

カリキュラム変更：7月の再提案手続き確認。

人事：教授退職後の教育管理看護学ポストを凍結し、新たに看護の分野に計画科目を立てる。

学長選挙規定に係る緊急提案：学長は任期満丁を迎えるが、県立大学統合・附属研究所の課題を巡り、継続して学長を務める。そのために学長選挙規定の改正を提案したい緊急動議があっ

11月 学長選挙規定改正：附属のみの改正にとどめた案が提案され、多種の議論結果、承認。

新科目の教員公募：教育管理看護学教授の後任は、カリキュラム改正案とともに新科目で実践基盤看護学2年担当し、講師を公募。

学長選挙：施行細則に基づき日程・場所・管理委員会事項の報告。

12月 調査報告の改正：カリキュラム改正に伴う調査報告を改正。

1月 将来構想委員会の提案：県立大学の基本構想（理想・実態）の説明後、審議。

2月 入学試験関係：入学試験成績関係もの受験要領が、開示することを決定。

附属研究所：附属研究推進センター構想（附属研設推進班・センター運営班）の説明、構成員・プロジェクト名の紹介。

3月 附属研究推進センター教員：2名採用の報告。

2001（平成13）年度

大学完成年次と前向きな県立大学の学内検討

4月 国家試験：結果と次年度に向けての対応。

5月 後任人事：看護生態学教授の公募。

6月 大学基準協会加盟：維持会員加盟・登録。附属研究推進センター教員：採用報告。

8月 卒業生キャリアアップ：学内委員会の設置。県立大学改革推進：推進委員会の審議機能を踏まえて意見交換。

兵庫県版「単科互換制度」：14年からひょうご大学連携事業として構築する。

9月 入試対策：関関同立・チェック体制・責任の所在・科目の見直し等の審議。

災害発生時行動マニュアル：14年度からは教員と職員別のものを一本化したチーム編成。

大規模防災訓練：東急交通の実施。

10月 附属研究推進センター：第1号発行。

新県立大学基本計画案：総合的見解としては、県立のメリットが見えてこない権義。

12月 総合看護学：学生担当の均等化を図るための仕組みづくりへの提案。

昇任人事：成人看護学教授へ、小児看護学教授への昇任決まる。

1月 新県立大学基本計画案：県立大学の承認。学内準備検討委員会設立、計画の承認と反映の体制を整える。既存のカリキュラム委員会との関連を確認。
2月 ひょうごオープンカレッジ：14年度から新設するが、公開講座を伴せて開講。
規程廃止：将来構想棟会規程の廃止。
10周年記念事業：実施で承認。

3月 学士編入制度導入：入試制度委員会からの提案により検討開始。
口語英語Ⅰ：非常勤講師で対応を決議。

2002（平成14）年
積極的な新県立大学への推進

4月 研修員：日中医学協会派遣により研修生を受け入れ。
学問変更：既定単位認定を除く学則第15条を変更。
学則第30条単位間隔科目：単位認定方法と本学における選択科目領域を決定。
ひょうごオープンカレッジカリキュラム：初回受け入れのテーマ・主旨を決定。

5月 カフェテリア運営：学生生協に委託。
新県立大学設置事務推進体制：学内・県側の準備検討委員会組織の明示。

7月 回生入試出願資格改正：国立事務廃止。
教員昇任取扱内規制例処置：講座内教員昇任に伴う教員の昇任申請期限の延長。

10月 名誉教授設置要綱：授業規程の検討と承認。
創立10周年記念事業：趣旨・内容の承認。

11月 昇任人事：15年4月1日付で4名の教授・1名の助教授が決定。
名誉教授：第1号の決定（バトリシアアンダーウッド氏）。

12月 附属研究推進センターレポート報告集：第1号の発刊および授業規程の承認。
看護学・保健学視学委員による実施審査：大学完成年次の伴う視学委員会を12月10日に受け入れ。

1月 高大連携講座：ユニティで高校生に単位互換講座開講を試行承認。
新県立大学看護学部長後補者の選考の終了：看護大学学長選考規程に基づき、選考スケジュールが定まる。

新県立大学看護学部・看護学研究科の教育課程：全体概要の明示。
法人化所管：学内準備検討委員会が所管。
新県立大学看護学部専任教員公募：新科目・単位認定者の確立とともに公募。

2月 教育会議：実習調整会議として開催。
附属研究所：名称は「地域ケア開発研究所」となり、预算計上される。研究員4名配置となるが、整備等関係は外部資金対応が条件。

新県立大学看護学部長（研究科長）：片田教授が候補者に決定。新大学への円滑な移行を図るために15年度の役割を申し合わせる。

3月 新入生なんでも相談：初めての試みとしての入学後相談体制をつくる。
新県立大学設置認可に伴う学生募集停止：決議。

2003（平成15）年
10年のまとめと新大学移行の具体準備

4月 助産師課程：15年度入学者、17年度編入学も募集できるよう申請する。
看護学教課程：新大学カリキュラムにおける該当専門教育科目の決定。

広域看護学講座の教員編成：16年度からの在宅看護学の位置づけを、15年度から広域看護学講座の所属とする。

5月 学内準備・検討委員会報告：仮設授業システム・看護学部の生涯学習事業・設置認可申請書などの動向。

文部科学省視察所見：教育内容の工夫・改善点の指摘で、授業評価の体系化の課題が残された。

6月 新大学移行に伴う規程：入試の方針及び要項確認・履修規程の検討。
10周年記念事業（冠）：国際セミナー予定。
学生による授業評価：検討方針の確認。

7月 高大連携：明石南高校との連携を承認。
兵庫県立大学看護学部規則：看護学部になるに際しての規則案を承認。

COEとして認定：「ユビキタス社会における災害看護指導」への取り組み決定。
兵庫県立大学設置認可：7月31日付で認可。

9月 客員研究員規程と就任：客員研究員規程成立と研究員として准教授から就任。

10月 国際交流の推進：県のワシントン州姫路市と提携の一環として、ワシントン大学看護学部と姫路市提携を決定。

埋蔵文化財調査結果：附属研究所の建設に関する埋蔵文化財の調査証明会開催。

11月 学生による授業評価：2003年後期からの実施の流れ案と評価書の検討。

12月 10周年記念事業。
第4章

現況

教育組織・教職員
大学の機構
看護学部看護学科の教育体制（講座編成）
教員紹介
大学院看護学研究科の教育体制
教職員数
教育・研究
看護学部看護学科の教育課程
大学院看護学研究科の教育課程
共同研究・教育助成等一覧
学内行事
年間スケジュール
国際・地域交流
附属図書館
附属研究所推進センター
卒業生の動向
卒業生・修了生の就職先
大学の機構

基礎教育
（哲学系、社会学系、社会福祉系、心理学系、教育学系
経済系、統計・情報系、保健体育系、外国語系）

看護学部看護学科

基礎看護学講座
（看護生態学、看護病態学、基礎看護学）

実践基礎看護学講座
（実践基礎看護学 I, 実践基礎看護学 II
教育・管理看護学）

専門教育

成人老人看護学講座
（成人看護学、老人看護学）

母子看護学講座
（母性看護学、小児看護学）

地域看護学講座
（精神看護学、地域看護学）

学長

大学院看護学研究科
修士課程

成人看護学分野
（がん看護学、成人健康看護学）

母子看護学分野
（母性看護学、小児看護学）

地域精神老人看護学分野
（地域看護学、精神看護学、老人看護学）

看護管理・教育学分野
（看護管理学、看護教育学）

看護基礎科学分野
（看護生態学、看護病態学）

大学院看護学研究科
博士後期課程

生涯健康看護学分野
（発達看護学、健康看護学）

事業局総務課

学生部学生課

附属図書館

附属研究所推進センター

43
基礎教育

哲学系

人間は、自己の存在とその活動、つまり、科学や実践や技術が自衛自衛によって問いに
なる存在者である。その問いを問うことが哲学である。物質と情報という豊かな知識を積む
現代は、私たちは哲学することを、人間の存在を全世界と対立の問いを求める時
代である。

社会学系

価値観の多様化が進む現代社会において、自己と社会の関係について学び、考え、行動
することが強く求められている。自らを育んだ家族、地域社会、国家について知識を深め、
さまざまな社会と文化に関心を持つことが、自己および他者を理解し求ることにつながる。

社会福祉系

人口の高齢化など深刻な社会環境の変化は必然的に新たな保健・医療・看護として福祉
ニーズを生み出す。高齢者ケアの例を挙げたまでもなく、地域住民の良好なサービスを提
供するためには、従来の枠組みを越えた関連領域の連携が不可欠であり、その一翼を担う
のが福祉の役割である。

心理学系

心理学（Psychology）は、文字通り「ところ（Psyche）」についての学問である。現代心
理学は、臨床心理学や発達心理学など様々な分化しているが、根本にのって、「ところ」
の探求であり、本学では、特に人間について、また「ひと」と「人」ととの関係について
の知を深めている。

経済学系

ヘルスケア・サービスの需要と供給がどのような行動に基づいているかを解明し、そして
望ましいヘルスケア・システムのあり方を検討する。そのために体系的に経済学を学習
し、その応用力を身に付けることを目的としている。

統計・情報系

看護学においても他の分野と同じく、研究対象となるデータを集め、そのデータを処理
し、そして何らかの有用な情報を引き出すとする。統計・情報系科では、コンピュータ
を道具として利用する基本的な能力を身に付け、データを分析するための基本的な統計
理数や分析手法を学び、分析結果を適切な読み取り能力を高めることを目的としている。

保健体育系

身体運動やスポーツについて歴史学的社会学的視点から現代社会における役割や
意義を考えるとともに、成人病予防効果が期待される「運動」の生理学的知識を高め、生涯
にわたって自己の健康を管理できる能力を身に付けるためのプログラムが用意されている。

外国語系

人文学（Humanities）を深く学んだ3人のスタッフ（米国人含む）の力を結集し、
英語の語学的な基礎から原書講読や卒業論文まで、学徒の質を高めるための個別的・多
彩で新鮮なプログラム（文学、英文学、異文化研究を含む）を提供する。人間の出会い
に富み、大画面の映像設備と質の高い視聴覚機材を備えた環境で運営に近い。

教育学系

教育とは、人の学びを支援する営みである。このような教育を捉えることから、教育学
にとって最も基本的な二つのテーマが、立ち上がってくる。一つは、学びとは何かという
こと、二つ目は、そうした学びをどう支援していけばいいのかということ、である。本学
における教育学は、この二つのテーマに、社会文化的な観点からアプローチする。
専門教育

Nursing Education

専門教育は、基礎看護学、実践基礎看護学、成人・老人看護学、母子看護学、地域看護学の5つの大講座により構成されている。学生たちは、看護基礎科学と基本的な看護技術を身につけた上で、成人看護、老人看護、母性看護、小児看護、精神看護、地域看護など、自らの興味のある分野を選択し、更に深く臨床実習を通して学ぶことができる。

基礎看護学講座

Basic Nursing Science

基礎看護学では、看護学の基盤となる理論及び方法論について教授する講座で、看護生態学、看護病態学、基礎看護学の3科目群より構成されている。

看護生態学

Nursing Physiology and Anatomy

人体の構造や機能、調節機構およびそれらをとりまく物理的な環境との相互作用などについて学ぶ分野である。授業科目として発酵形態学、生態機能学、栄養代謝学および、それらに関する実習科目的ある。

看護生態学は人間生態学のうち、とくに看護学に深く関与する領域を対象にしたものである。この分野は、人間と他の動物種との共通した生命の成り立ちを扱う部分と、人間という大脳の非常に進化した動物種が直面する問題を扱う部分である。従って看護生態学では、身体と社会の関連性を重要視する。

看護病態学

Nursing Pathobiology

看護問題を判断していく上で必要とされる疾病の概念、病状の原因や経過、薬物と生体との相互作用などについて学ぶ分野である。授業科目として看護病態学、感染免疫学およびそれらに関する実習、薬理学、疾病論などの講義がある。疾病論では、内科的な疾患、母性疾病、小児疾病、外科的疾患について学ぶ。高度の判断力が要求される看護では、患者の病態を正確に把握する必要がある。そのためには疾患の本態、臨床経過、治療法、学際法などの科学的な知識が不可欠である。修得した知識および科学的な考え方は基にして、患者の苦しみがわかる看護専門職を育てることが看護病態学の目的である。

基礎看護学

Theoretical Nursing

看護の歴史、保健医療の動向、看護学の理論体系や概念など、看護学を学ぶ上で基本となる知識や方法を探求する分野である。この分野は、基礎看護学、人間工学、研究法の講義を担当している。基礎看護学Ⅰでは、看護の歴史や社会における看護の役割などをいて学び、基礎看護学Ⅱでは、看護を「科学」「技術」「哲学」「宗教」などのキーワードとともに検討し、基礎看護学Ⅲでは看護理論について学ぶ。人間工学では、看護作業の基本原理を学べるように必要な知識を学ぶ。研究法は、研究を実施するために必要な基本的なプロセスを学ぶ。
実践基礎看護学講座
Nursing Foundations

実践基礎看護学講座は、看護学の基礎領域と実践領域を有機的につなぐために、看護実践の基礎となる理論、技術および実践法について教授する講座で、実践基礎看護学Ⅰ、実践基礎看護学Ⅱ、教育・管理看護学の3科目群より構成されている。

実践基礎看護学Ⅰ
Nursing Practice Ⅰ

“生活”“健康”“環境”を基本概念に、生活の中の健康について論じるとともに、
健康的な生活をその人の能力に応じて最大限によりよく送ることができるように支援
していくための、独自の理論と方法論を探究する分野である。授業科目として生活健
康論、生活援助論およびそれらに関する演習と実習がある。生活健康論は学生の体験
をもとに、「生活の中の健康」について考えるものである。生活援助論は健康的な生活
を、その人の能力に応じて最大限によりよく送ることができるように援助するための、
知識と実践法を学ぶものである。

実践基礎看護学Ⅱ
Nursing Practice Ⅱ

“治療看護”ともいうべき新しい分野である。治療看護とは看護者が、対象に対し
て看護学固有的知識と技術を用いて治療的に働きかけることであり、その方法論を体
系化し、看護学の一領域として確立することをめざしている。授業科目として治療援
助論およびそれに関する演習と実習があり、ケアリングの技術や援助法をその基礎に
置き、疾病や治療に対する人間の反応を看護の視点で考察し、Symptom Managementを含む様々な介入技術を開発するための知識と実践法を学ぶものである。

教育・管理看護学
Nursing Systems

看護におけるヘルスケア提供システム、管理および教育について教授すると共に、
専門職あるいは看護ケア提供者のリーダーとして活躍できる人材の育成をめざし、実
践が必要な知識や方法論を探究する分野である。授業科目として、看護システム論と
それにに関する演習および実習がある。看護システム論は看護におけるリーダーシップ、
組織、集団に関する基礎的な概念を学び、演習を通じて、それらの概念を実際のシス
テムや体験に照らして考え応用していく能力を養う。また、看護システム論Ⅰは看護
活動が展開されている場における看護ケア提供システムと看護管理を中心に、看護シ
ステム論Ⅱは教育システムと教育と実践をつなぐシステムを中心に学習し、システム
への理解を深める。これらの授業を通じて、単に管理者としてかのまな、専門職と
してまた看護ケア提供者のリーダーとして実践していくために必要な知識を提供する。
第4章 現況

成人・老人看護学講座
Adult/Gerontological Nursing

成人・老人看護学では、人間のライフサイクルに特有な健康現象の理解と、看護に必要な知識・技術について教授する講座で、成人看護学と老人看護学の2科目群より構成されている。

成人看護学
Adult Nursing

成人看護学は、成人期にある人々の健康問題や成人期に特徴のある健康障害のうち、特に身体的な健康問題に焦点をあて、その看護援助に関わる知識・技術を修得し、実践力の基礎を身に付けることを教授する。成人期を年齢群から向老年にわたる長期間と位置づけ、成人の中心概念を「成熟（Maturity）」と定義する。成人看護学は、ケアリング概念をもとにした看護プロセスをとおして「治験」「セルフケア」「セルフプロモーション」を看護を実践することによって、人々の苦痛を緩和し、病気の回復・健康の保持・増進に貢献する。

老人看護学
Gerontological Nursing

老人看護学は、老年期のさまざまな状況にある人々が、加齢の過程で生ずるかも知れない、また急性・慢性疾病から生ずるかもしれない健康問題に対応しつつ、社会生活の営みを可能な限り豊かにしていくことを援助するための理論と方法を探求することを目指している。

科目群の構成は、2年次の老人特性論で老年期にある対象の特性を理解するとともに、老人をめぐる保健・医療・福祉の動向と、老人看護の機能についての概要を学び、老人ふれあい実習1、2における体験と統合させながら、理解を深めていく。3年次で老人援助論・演習において老人とその家族に対する看護援助やサポートシステムについて学び、4年次で援助論演習B（長期実習）では、個別に老人を受け持ち、看護実践を体験し、総合看護では老年期の対象の援助にあたる看護職が専門職として社会の期待にどのように応えているのか、考えていくたい。

母子看護学講座
Maternal-Child Health Nursing

母子看護学講座は、生産年齢にある女性とその家族、さらに乳児を対象とし、これらの人々が抱える健康現象を理解・援助するための理論や方法論を追求する分野である。母子看護学と小児看護学の2科目群から構成されていて、授業・実習・演習・研究が学習の機会として準備されている。

母性看護学
Maternal Health Nursing

妊娠・分娩・座化期にある母児に生じる身体的・心理的・社会的変化を理解し、この時期特有の健康課題（例えば、親になることや新しい命を含めた家族を形成すること）と、それらに対する看護援助を学ぶ。また、これらの健康課題が家族の中で持つ意味を考え、家族をとりまく環境や社会システムについても学び、母性看護の機能や役割、そのあり方について、現在および将来を含めて概観する。

小児看護学
Child Health Nursing

看護対象としての乳児と親、および健康概念の意味づけを理解した上で、乳児看護の機能と役割を学ぶ。具体的には、乳児の成長・発達と健康状態が乳児の生活能力に与える影響との機序、また乳児の反応を理解し、必要となる援助の技術や実践法について学ぶ。これには健康な乳児はもとより、病気や障害を持つ乳児が生活を行う意味を、子どもや親・家族との関わりを通して考えることも含まれる。
広域看護学講座は、複雑化する社会構造の中で生じる心の健康問題や地域社会の健康問題を巡って、個人および集団へのアプローチの理論と実践を探求する講座であり、精神看護学と地域看護学の2つの科目群で構成されている。

精神看護学

精神看護学は、社会におけるメンタルヘルスの着問題および心の健康障害をもつ人々に対する看護のアプローチを探求する学問領域である。心理学・精神医学の理論や基礎知識を踏まえ、心の病生态と日常生活との関連に焦点を当てた精神看護の視点から、心の健康／健康障害について考察するとともに、心身を病む人々への精神看護の概念モデルおよび方法論・技術論を実証的につみ求めるを目指している。さらに、教育研究活動を通じて、精神障害者への支援システムを主とする、地域に根ざしたメンタルヘルス・ケアシステムのあり方を検討し、看護の役割を探っていきたい。

地域看護学

地域看護学は、地域に暮らす様々な人の健康レベルの向上を目的にそのアプローチのあり方を探求しようとする分野である。本学での地域看護学の内容は、疾病とそれを生み出す原因、その背景の関連から、地域の問題を構造的にとらえることから始めていく。ここでは、健康問題と生活や労働のあり方、地域の社会資源の質、文化や習慣等の関係を理解していく。さらに、こうした地域での健康問題に対して、集団活動、組織的取り組みを通し、個人、家族が問題に対応していく力がついていくプロセスについて、個人、集団、地域の段階を巡って理解することを中核に、対象である住民の方々とともに、どのように取り組んでいくかその展開のあり方を明らかにすることを目指している。
大学院看護学研究科の教育体制

修士課程（博士前期課程）
修士課程のめざすもの

修士課程は高度な専門的知識や技術の修得を基本とした、全国ではじめての専門看護師育成のための本格的プログラムと、看護管理・教育・研究の専門家を育成するためのプログラムにより構成されています。

高度な専門的知識・技術の開発
学術研究の推進
災害看護学教育の質の向上
国際的な研究活動への貢献

修了後の進路
本学修士課程は、広い視野に立った学際的な教育研究をめざしており、修了者は社会の幅広い分野で活躍できるものと確信しています。大別すると専門看護師、看護管理者、教育者および博士後期課程への進学者に分けることができます。

専門看護師：本学修士課程は日本看護系大学協議会から専門看護師教育課程として7分野が認定されており、修士課程修了者に対する期待は非常に高いといえるでしょう。

看護管理者：保健医療福祉環境の複雑・高度化が進み看護の体制や医療のしくみが大きく変化する中で、高度な管理・経営能力をもつ看護管理者が求められています。本学修士課程修了者をはじめ、優れた看護管理者への需要は大きくなるでしょう。

教育者：全国各地で看護系大学院の開設が計画され、基礎教育の高等教育化が急速に進展していることから、この傾向は今後一層顕著になるものと予測されます。
●修士課程

共通科目

本学の修士課程は看護学専攻のみの課程であることから、広い視野をもつ実践技術を育成するため、分野を越えて学習することができる科目編成を行っています。それが共通選択科目で、専門的能力を高めるために必要となる学際的な科目群から構成されています。

また、専門領域を深める過程において共通する、看護の基本となる科目を共通必修科目として配置しています。

●担当教員

- 石井 誠士（垂直的学間）
- 金 外淑（心理療法原理）
- 藤原 順（生涯教育論）
- 岡元 行雄（現代家族社会学）
- 松浦 和幸（保健統計学、情報活用論）
- 山下 真宏（保健福祉学）
- 長田 浩（保健教育学）
- 穴吹 章子（ケア文学論）
- サンプル マーク（社会文化人類学）
- 長尾 昭義（生涯スポーツ論）
- 柴田 真志（運動療方論）
- 南 裕子（理論看護学）
- 野澤美江子（看護研究法）
- 津田万寿美（医療看護）
- 石川 信（国際保健学 非常勤講師）
- 上泉 和子（看護管理 非常勤講師）

成人看護学分野

がん看護学領域

がん看護学領域では、がん看護に関する高度な知識、技術を用い、がんの予防、健康教育や治療の選択に伴う意志決定をサポートする能力を修得するとともに、がん治療に伴う看護および治療後の生活調整を支援し、がん患者の体験する症状、精神的苦痛に対して対応できる能力を修得します。また、バリアフリーケアを含むがん終末期ケアが提供できる高度な能力を修得します。

成人健康看護学領域

成人健康看護学領域では、糖尿病を中心とした生活習慣病の予防や療養法支援のための看護技術及びモデルの開発、呼吸器疾患を中心とした慢性病の症状管理や増悪予防のための看護技術及びモデルの開発を行っています。

●担当教員

- 内布 敦子
- 荒尾 暖惠

- 野並 華子
- 森 菊子
- 林 優子（非常勤講師）
第4章 現況

母子看護学分野

母性看護学領域

母性看護学領域では、移行期の概念を基盤とし、
生成年齢の適性や家庭が相対する健康問題に
に対する効果的な支援ができるよう、看護援助に必要
な諸理論を学び高度な能力を修得します。

小児看護学領域

小児看護学領域では、成長発達とセルフケア看
護理論を基盤に小児の健康状態を捉え、環境の影
響を考慮しながら健康の増進、疾病や障害による
小児の心身の反応について諸理論を用い、適切に
支援できる高度な能力を修得します。

地域・精神・老人看護学分野

精神看護学領域

精神看護学領域では、個人および集団の心の健
康についての理解を踏まえ、精神看護に関する諸
理論と方法を学ぶことで、リエゾン精神看護もしく
は精神障害者への看護のいずれかの分野におい
て高度な実践能力を発揮し、看護ケアを改善する
ことのできる専門看護師の育成を目的としていま
す。

老人看護学領域

老人看護学領域では、生涯発達論を基盤に、老
人の加齢過程や健康生活を理解し、老人看護の分
野において、専門的な支援できる高度な能力を
修得します。

地域看護学領域

地域看護学領域では、プライマリヘルスケアの
概念を基盤にして、国内外の地域社会において、
健康問題に対する的確なアセスメント・活動計画
・評価と、組織的な問題解決のための住民の力量
形成および保健・医療・福祉分野等の調整・統合
ができる高度な能力を修得します。

●担当教員
山本あい子
工藤 美子
新道 幸恵（非常勤講師）

●担当教員
片田 範子
勝田 仁美
蝦名美智子（非常勤講師）

●担当教員
近澤 範子
玉木 敦子
宇佐美しげり（非常勤講師）
野末 聖香（非常勤講師）

●担当教員
水谷 信子
松岡 千代
太田喜久子（非常勤講師）

●担当教員
森口 育子
井伊久美子
中野 緑美（非常勤講師）
看護管理・教育学分野

看護管理学領域

看護管理学領域では、保健・医療・福祉の行政と看護管理システムについて、国際的な幅広い視野を身につけるとともに、行政の仕組み、看護管理および経済に関する理論や方法を探究することで、将来、保健・医療・福祉におけるさまざまな場でリーダーシップを発揮でき、看護行政や看護管理に携わる得る能力を修得します。

●担当教員
藤原裕美子

看護教育学領域

看護教育学領域では、専門的知識、技術の修得および人格形成などの側面をもつことを基盤としており、教育の原理およびそれに際する教育内容や方法の特性を学び、現行の教育課題を明らかにしていきます。学生は先駆的な教育課程の編成並びに教授案の作成を試み、特に臨床教育に焦点を当てて教育評価法を開発し、基礎並びに継続教育担当者としての能力を修得します。

●担当教員
近田敬子
藤原 瞳

看護基礎科学分野

看護病態学領域

病む人の病因、病態および看護についての理解を深めるための基礎的研究法を修得します。

●担当教員
鶴間和浩
鶴山 治

看護生態学領域

生活する人間の構造、調節機能を看護学の視点から総合的に探究し、理解を深めるとともに、生体の形態、機能、代謝の解析に必要な基礎的な方法およびその応用に関する研究法を修得します。

●担当教員
加治 介介
坂下 瑠子
生涯健康看護学分野  
生涯健康看護学分野は、生涯にわたる人間の成長・発達を基盤とし、個人や家族を対象として、健康状態の違いにかかわらずその人、あるいはその人達の生活や人生の質の向上を図る働きかけの方法を構築するための教育研究を追求する看護領域で構成されています。

広域健康看護学分野  
広域健康看護学分野は、集団やコミュニティを対象としながら、日本および諸外国の看護を取り巻く環境と共に働きかけ、組織やそこで働く人々の行動特性、生涯にわたる教育方法のあり方などの探求を特色とする看護領域で構成されています。

共通科目  
看護学の研究者の基盤をより確かなものとするために、修士課程において配置した理論看護学、看護研究法に加え、理論看護学IIと看護学研究法IIを配置しています。同様に高等教養科目については、さらに専門的な理論と研究を深め、新たに看護学の発展を支持するものとして、高度な関連科目を配置しています。さらに、修士課程の災害看護に加えて災害看護学IIを配置し、災害時に生じる心・身・社会・環境について看護の観点から分析し、災害看護学の構築を探求しています。
## 教職員数

平成15年4月1日現在

<table>
<thead>
<tr>
<th>教員</th>
<th>教授</th>
<th>助教授</th>
<th>講師</th>
<th>助手</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>基礎教育</td>
<td>7</td>
<td>5</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>専門教育</td>
<td>12</td>
<td>8</td>
<td>4</td>
<td>28</td>
</tr>
<tr>
<td>附属研究推進センター</td>
<td></td>
<td></td>
<td>3</td>
<td>1</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>事務職員等</th>
<th>局長</th>
<th>局次長</th>
<th>部次長/課長</th>
<th>課長補佐</th>
<th>主査/主任</th>
<th>否員等</th>
<th>臨時</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>事務局総務課</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>5</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>学生部学生課</td>
<td></td>
<td></td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>附属図書館</td>
<td></td>
<td></td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td>4</td>
</tr>
</tbody>
</table>
第4章 現況

教育・研究

看護学部看護学科の教育課程

カリキュラムの概要
学部のカリキュラムは、「対象論領域」「環境論領域」「活動論領域」および「総合領域」の4領域を基軸に、基礎教育と専門教育が統合的に教授されるように構成されています。

対象論領域
看護の対象となる人間について、さまざまな方向から探求する領域です。

環境論領域
人間を取り巻く環境について、健康との関連を含め探求する領域です。

活動論領域
さまざまな健康現象に対する働きかけ（看護実践）の方策を探求する領域です。

総合領域
上記3領域を補完し、人間性の形成や研究心の向上に働きかける領域です。

なお、各領域の関係および学年ごとの構成割合を図に示すと下記のようになります。

○各領域の関係

対象論
環境論
活動論
総合領域

理論的 ➔ 実践的

○学年別にみた各領域の割合

学年度 | 対象論領域 | 環境論領域 | 活動論領域 | 総合領域
--- | --- | --- | --- | ---
1 |  |  |  | 96%
2 |  |  | 25% | 75%
3 |  | 50% | 25% | 25%
4 | 25% | 75% |  | 0%

57
(2) 配置科目
一方、各領域には「基本科目」 「専門支持科目」および「専門科目」を配置しています。基本科目および専門支持科目は、従来の一般教育科目に該当するもので、専門支持科目は、専門科目とより関連が深く、基本科目との間をつなぐだけ支持するものをさします。

① 基本科目および専門支持科目
a 対象論領域では哲学、倫理学、法学および心理学を基本科目として設定すると共に、専門科目との関連から人間論、バイオエシックス、医事法学および発達心理学を専門支持科目として設定し、人間を幅広く捉えるように図っています。
b 環境論領域では社会学、文化人類学、国際関係学、経済学、および歴史学を基本科目として設定するとともに、専門科目との関連から人間工学、家族社会学、医療人類学、社会福祉・社会保障論および医療経済学を専門支持科目として設定し、人間を取り巻く周囲の環境に対する視野を広めるように図っています。
c 活動論領域では教育学、論理学、化学、地域経済学、統計学および情報科学論を基本科目として設定するとともに、専門科目との関連からコミュニケーション論および臨床心理学を専門支持科目として設定し、理論的裏づけをもった実践が可能となるように図っています。
d 総合領域では演劇論、文学、認知科学および総合科目Ⅰ ～Ⅲを基本科目として設定し、領域の枠にとらわれないさまざまな現象や、時代の流れに即した事柄を学習できるように図っています。また専門支持科目として原書講読を設定し、専門領域の見解を広めかつ必要な文献の検索や講読を行い、自ら研究を深めることができるように図っています。

② 専門科目
a 対象論領域では医療や看護の対象としての人間を、その本質や発達の視点、人間関係の視点あるいは心と身体の両面からとらえられるように、「人間と看護」 「ライフサイクルと健康」 「こころのしくみと健康」および「からだのしくみと健康」という観点から科目を設定しています。

b 環境論領域では物理的、社会的な視点に加え、生活の側面からも環境を捉えることができるように、「地球環境と健康」「保健医療福祉と健康」および「生活と健康」という観点から科目を設定しています。

c 活動論領域では働きかけの基本を踏まえ、臨床看護や看護の社会的役割について捉えられるよう、「基本の援助論」「健康問題と援助論」および「看護システムと健康」という観点から科目を設定しています。

d 総合領域では看護に携わる人間としてのこころの豊かさや視野の広さ、論理的な思考、研究・探究の基礎が身につくよう、「看護研究」および「総合看護」という観点から科目を設定しています。

③ 外国語科目および保健体育科目
外国語科目および保健体育科目は総合領域に配置しており、文字どおり総合的な教育ができるように図っています。
なお、各科目の学年ごとの構成割合を図に示すと下記のようになります。また、教育科目的設定は、次頁の表のとおりです。

●学年別にみた各科目の割合
<table>
<thead>
<tr>
<th>領域</th>
<th>区分</th>
<th>（1年次）</th>
<th>（2年次）</th>
<th>（3年次）</th>
<th>（4年次）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>基 本</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>哲 学</td>
<td>2</td>
<td>倫理学</td>
<td>2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>心理学</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>法 学</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>生物学</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>専 支 門 特</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>発達心理学</td>
<td>2</td>
<td>医事法学</td>
<td>医療専門カリキュラム</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>人間論</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>専 象 領 领</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>基礎看護論 A</td>
<td>1</td>
<td>成人特性論</td>
<td>1</td>
<td>基礎看護論 C</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>基礎看護論 B</td>
<td>1</td>
<td>老人特性論</td>
<td>1</td>
<td>臨床栄養学</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>発生形態学 I</td>
<td>1</td>
<td>母性特性論</td>
<td>1</td>
<td>疾病論 II</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>発生形態学 II</td>
<td>1</td>
<td>小児特性論</td>
<td>1</td>
<td>疾病論 III</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>生態機能学 I</td>
<td>1</td>
<td>家族健康論</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>生態機能学 II</td>
<td>1</td>
<td>精神健康論 I</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>看護病態学</td>
<td>1</td>
<td>精神健康論 II</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>生態機能学 II</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>家族代謝学 II</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>感染免疫学</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>薬理学</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>疾病論 I</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>疾病論 IV</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>形態機能学実習</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>看護病態学実習</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>基 本</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>社会学</td>
<td>2</td>
<td>国際関係論</td>
<td>2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>文化人類学</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>食生活論</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>歴史学</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>經済学</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>専 支 門 特</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>家族社会学 I</td>
<td>2</td>
<td>人間工学</td>
<td>2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>社会福祉・社会保障論</td>
<td>2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>生活健康論 I</td>
<td>1</td>
<td>在宅看護概論</td>
<td>1</td>
<td>環境保健論 A</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>生活健康論 II</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td>環境保健論 B</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>地球環境論</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td>保健医療福祉システム論 I</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>保健医療福祉システム論 II</td>
</tr>
<tr>
<td>領域</td>
<td>区分</td>
<td>（1年次）</td>
<td>（2年次）</td>
<td>（3年次）</td>
<td>（4年次）</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>----------</td>
<td>----------</td>
<td>----------</td>
<td>----------</td>
</tr>
<tr>
<td>基本</td>
<td></td>
<td>化学 2</td>
<td>教育学 I 2</td>
<td>教育学 II 2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>教育学 II 2</td>
<td>地域経済学 2</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>専門</td>
<td></td>
<td>コミュニケーション論 I 2</td>
<td>臨床心理学 I 2</td>
<td>臨床心理学 II 2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>動</td>
<td></td>
<td>生活援助論 1</td>
<td>生活援助論 I 1</td>
<td>看護システム論演習 1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>領</td>
<td></td>
<td>治療援助論 1</td>
<td>治療援助論 II 1</td>
<td>看護システム論演習 I 1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>域</td>
<td></td>
<td>生活援助論演習 1</td>
<td>治療援助論演習 I 1</td>
<td>看護システム論演習 I 1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>援助実習 I 1</td>
<td>援助実習 II 1</td>
<td>援助実習 V A 2</td>
<td>援助実習 VI A 4</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>援助実習 III 2</td>
<td>援助実習 IV 2</td>
<td>援助実習 V B 2</td>
<td>援助実習 VI B 4</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>援助実習 V C 2</td>
<td>援助実習 V D 2</td>
<td>援助実習 V E 2</td>
<td>援助実習 VI C 4</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>援助実習 V D 2</td>
<td>援助実習 V E 2</td>
<td>援助実習 VI D 4</td>
<td>援助実習 VI E 4</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>援助実習 VI F 4</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>援助実習 VII 1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>演劇論 2</td>
<td>文学 2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>認知科学 2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>総合科目 I：人間の生と死 2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>総合科目 II：女性と社会 2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>総合科目 III：芸術と科学 2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>外国</td>
<td></td>
<td>英語講読 A 1</td>
<td>英語講読 C 1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>言語</td>
<td></td>
<td>英語講読 B 1</td>
<td>英語講読 D 1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>口語英語 A (LL) 1</td>
<td>口語英語 C (英作文) 1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>口語英語 B (LL) 1</td>
<td>口語英語 D (英作文) 1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>義会話 A 1</td>
<td>義会話 C 1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>義会話 B 1</td>
<td>義会話 D 1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>外国</td>
<td></td>
<td>獨語 A 1</td>
<td>獨語 C 1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>言語</td>
<td></td>
<td>獨語 B 1</td>
<td>獨語 D 1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>仏語 A 1</td>
<td>仏語 C 1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>仏語 B 1</td>
<td>仏語 D 1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>中國語 A 1</td>
<td>中國語 C 1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>中國語 B 1</td>
<td>中國語 D 1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>保体</td>
<td></td>
<td>保健体育講義 I 1</td>
<td>保健体育講義 II 1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>健育</td>
<td></td>
<td>体育実技 I 1</td>
<td>体育実技 II 1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>原書講読 I 1</td>
<td>原書講読 III 1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>原書講読 II 1</td>
<td>原書講読 IV 1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>専門</td>
<td></td>
<td>研究法 I 1</td>
<td>総合看護 (卒業論文) 2</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
9 実習の基本的な考え方

(1) 実習の目的
日常生活や社会における様々な健康現象を看護の観点から見直し、ライフサイクル各期の人々の生活援助や治療援助にかかわる看護実践を体験することにより、また、多様な看護提供システムのあり方を実際に学ぶことによって、次のような能力を養うことを目指しています。
① 幅広い健康レベルにおける人間の心身の状態や生活について理解するとともに、看護の機能と役割に対する認識を深めます。
② 患者との人間関係を形成し、対象を総合的に理解する能力を養います。
③ 看護技術の習熟を図り、対象の個別性に応じて計画的な看護実践を展開できる基礎的な能力を養います。
④ 各領域の特殊性を学び、専門分野について主体的に研究する態度を育みます。

(2) 学習の基本方針
健康レベルの高い、身近な人々の生活から徐々に、健康レベルの低い人々の生活へと認識の幅を広げていくように、また、看護実践の基礎的な知識や技術を習得した上で、より高度なレベルの学習へと進めるように配慮して、講義との関連性を重視しながら4年間の実習全体を次のように段階的に構成しています。

第1段階：身近な人々の日常生活やさまざまな社会現象に目を向け、広い視野から健康について見直すことから始めて、生活の場と治療の場との接点である外来へと、徐々に看護の対象への認識を深めていきます。

各研生活体験を広げるような自主活動を重視し、個別またはグループでの取り組みによって体験的に得た情報をもとに、ディスカッションする方法をとります。

第2段階：入院中の患者への看護ケアを通して病む人の心身の状態や入院生活についての理解を深め、あるいは地域で生活する人々への保健活動の実際を学ぶことにより、各領域の特殊性や対象の個

別性に応じた看護ケアを実施できる基礎的な能力を身につけます。

領域別に小グループに分かれ、病院では個別に患者を受け持ち、また、地域においては家庭訪問や集団指導を行うことにより、看護実践を体験的に学びます。

第3段階：さまざまな看護の場においてグループ別の課題学習を行い、活動の基盤となる看護提供システムについて理解を深めます。また、特定の領域に関して系統的な研究を行うことにより、より深い知識を獲得し、看護実践の向上を目指す研究的な態度を培います。

(3) 実習科目の構成

<table>
<thead>
<tr>
<th>実習の段階</th>
<th>実習科目</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>第1段階</td>
<td>援助実習Ⅰ（生活援助実習）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>援助実習Ⅱ（フィールド体験実習）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>援助実習Ⅲ（受診過程体験実習）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>援助実習Ⅲ（老人ふれあい実習－1）</td>
</tr>
<tr>
<td>第2段階</td>
<td>援助実習Ⅳ（療養援助実習）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>援助実習Ⅳ（老人ふれあい実習－2）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>援助実習Ⅴ（領域別短期実習）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>援助実習Ⅵ（領域別長期実習）</td>
</tr>
<tr>
<td>第3段階</td>
<td>援助実習Ⅶ（システム論実習）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>（総合看護）</td>
</tr>
</tbody>
</table>
(5) 実習の時期と期間

<table>
<thead>
<tr>
<th>週数</th>
<th>1 - 6</th>
<th>7</th>
<th>8</th>
<th>9</th>
<th>10</th>
<th>11</th>
<th>12</th>
<th>13</th>
<th>14</th>
<th>15</th>
<th>16</th>
<th>17</th>
<th>18</th>
<th>19</th>
<th>20 - 27</th>
<th>28</th>
<th>29</th>
<th>30</th>
<th>31</th>
<th>32</th>
<th>33</th>
<th>34</th>
<th>35</th>
<th>36</th>
<th>37</th>
<th>38</th>
<th>39</th>
<th>40 - 41</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4年</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

(6) 実習施設一覧

〇病院:

1. 県立尼崎病院
2. 県立塚口病院
3. 県立西宮病院
4. 県立加古川病院
5. 県立淡路病院
6. 県立光風病院
7. 県立柏原病院
8. 県立こども病院
9. 県立成人病センター
10. 県立脳循環器病センター
11. 県立のじくく療育センター
12. 県立総合リハビリテーションセンター中央病院
13. 国立神戸病院
14. 公立豊岡病院
15. 明石市立市民病院
16. 関西青少年サナトリウム

●健康福祉事務所（保健所）

<table>
<thead>
<tr>
<th>施設名</th>
<th>施設名</th>
<th>施設名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1. 西宮市保健所</td>
<td>14. 福崎健康福祉事務所</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2. 赤塚健康福祉事務所</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3. 赤塚健康福祉事務所</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4. 伊丹健康福祉事務所</td>
<td>17. 佐用健康福祉事務所</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5. 川西健康福祉事務所</td>
<td>18. 山崎健康福祉事務所</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>6. 三田健康福祉事務所</td>
<td>19. 豊岡健康福祉事務所</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7. 加古川健康福祉事務所</td>
<td>20. 浜坂健康福祉事務所</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8. 明石健康福祉事務所</td>
<td>21. 和田山健康福祉事務所</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>9. 髙砂健康福祉事務所</td>
<td>22. 柏原健康福祉事務所</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>10. 社健康福祉事務所</td>
<td>23. 篠山健康福祉事務所</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11. 西脇健康福祉事務所</td>
<td>24. 洲本健康福祉事務所</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>12. 三木健康福祉事務所</td>
<td>25. 津名健康福祉事務所</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>13. 加西健康福祉事務所</td>
<td>26. 三原健康福祉事務所</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

備考：実習内容に応じて診療所、福祉施設、学校などの関連施設においても実習を行う。
(7) 実習施設の位置図

備考 1：西宮市保健所以外の保健所は健康福祉事務所が正式名称
2：公立豊岡病院、県立柏原病院及び県立淡路病院については宿泊所を準備
●修士課程

【1】 教育課程編成の特色
(1) 専門分野の構成
学部における看護領域では講座を中心として専門科目群を配置する教育形態を取り、それぞれの特徴を活かした科目構成をとっている。修士課程においては、さらにその分野の特性を考慮した専門科目間の連携を密にし、総合的な教育課程を置くために5つの基本となる分野を編成した。なお、5つの分野の構成は次のとおりである。

看護学研究科修士課程

看護学専攻

成人看護学分野

母子看護学分野

地域・精神・老人看護学分野

看護管理・教育学分野

看護基礎科学分野

(2) 専門分野に関する専門分野別科目の配置
各々の専門分野において、その専門性を高めるための専門分野別科目を配置する。なお、専門分野の中でも、さらに学生の目的に応じ選択ができるように選択領域を設けており、5分野の特徴と領域は下記のとおりである。

① 高度な実践能力を持つ専門看護師の育成
高度な知識と卓越した実践能力を持って活動できる専門看護師の育成をめざし、成人看護学、母子看護学及び地域・精神・老人看護学の3分野を置いた。この3分野においては、それぞれの分野に必要な諸理論と高度な援助技術を探求する。

② 看護管理・看護教育の専門家の育成
将来、世界的視点から看護行政や看護管理及び看護教育に携わることのできる人材の育成をめざし、看護管理・看護学分野を置いた。看護管理・教育学分野は、看護管理学及び看護教育学からなり、それぞれの諸理論と方法を探求する。

③ 基礎看護学における研究者の育成
将来、基礎看護学の研究を深め開発する能力の育成に関連する課程として看護基礎科学分野を置いた。基礎看護学分野は、看護生態学、看護病態学からなり、それぞれの理論と方法論を探求するとともに、独自の理論構築や研究を行う。

(3) 高等教育科目の配置
本学の修士課程は1専攻のみを置く課程であるところから、広い視野を持つ人材の育成を図るために分野を越えて学習する特色ある編成を行い、学内外から看護学に深く関連する学間分野の参加を博した学際的な視野を育む高等教育科目を配置し、共通選択科目として学生が選択できるようにした。

(4) 国際的研究所・教育への貢献
本学では、外国人教員の採用をはじめ共通選択科目への国際保健学の設置、地域看護学領域等における近隣諸国での海外協力を内容とした実習の計画等、国際的な研究・教育の視点を育む環境を立っている。また、教員が保健医療福祉分野において世界的な規模の活動に積極的に参加している点も本学の特徴であり、看護における国際的研究や交流の拠点としての役割を担うことをめざす。
【2】教育課程の概要

教育課程は全学的科目と専門分野別の科目から構成されている。

1）全学的科目

① 共通必修科目
専門領域を深める過程において、共通する看護の基礎となる理論看護学と看護研究法を共通必修科目として配置する。

② 共通選択科目
専門的能力を高めるために必要となる学際的な科目群を共通選択科目として配置する。

2）専門分野における科目

① 分野別共通科目
成人看護学、母子看護学、地域・精神・老人看護学及び管理学科の4分野に共通するものを分野別共通科目として配置する。

② 分野別専門科目
それぞれの専攻分野に関する専門性を高め、研究能力を養うために必要となるものを分野別専門科目として配置する。

③ 専門分野と領域
各専門分野は、その専門性を構築する複数の有機的につながった領域からなり、各分野の特性と領域は次のとおりである。

1）成人看護学分野
成人看護学分野では、健康問題や課題を持つ人への教育や支援、成人期の病気を持つ人の働きかけなど高度な看護援助諸理論を修得するとともに、臨床コンサルテーション等の専門看護師としての機能と役割を開発して行くための諸理論と方法を修得する。

ア がん看護学領域
がん看護に関する高度な知識、技術を用い、がんの予防や健康教育とともに、がん治療に伴う看護及び治療後の生活調整を支援し、がん患者の体験する症状、精神的苦痛の緩和やがん終末期ケアが提供できる高度な能力を修得する。

イ 成人健康看護学領域
成人健康看護に関する高度な知識、技術を用い、成人の健康増進や慢性病を生きる人々に対して症状アシスタンス、再発予防のための健康の調整、社会資源の活用などの療養法を支援できる高度な能力を修得する。

2）母子看護学分野
母子看護学分野では、子ども、母、性、家族の構成員の健康を深く考え、同時に、母子を含めた家族を一つの単位として理解し、高度で複雑な課題を解決するための諸理論と方法を修得する。

ア 母性看護学領域
移行期の概念を基盤として、産生年齢にある女性や家族が遭遇する健康問題に対し、効果的に支援できるよう看護援助に必要な諸理論を学び高度な能力を修得する。

イ 小児看護学領域
成長発達とセルフケア看護理論を基盤に小児の健康状態を捉え、環境の影響を考慮しながら健康の増進、疾病や障害による自覚、自己の自覚に反応に対し、適切に支援できる高度な能力を修得する。

3）地域・精神・老人看護学分野
地域・精神・老人看護学分野では、地域及び集団の健康問題に対して地域社会に密着した形で対応していくことを重視し、国内外の保健、医療・福祉環境の変化に創造的かつ前向きに取り組むことのできる諸理論と方法を修得する。

ア 地域看護学領域
プライマリヘルスケアの概念を基盤にして、国内外の地域社会において、地域問題に対する的確なアセスメントと計画・活動評価、組織的な問題解決のための住民の力量形成、保健・医療・福祉分野の調整、統合などができる高度な能力を修得する。

イ 精神看護学領域
個人及び集団の心の健康についての理解を深め、精神看護に関する諸理論と方法を学び、リハビリ精神看護もしくは精神障害者への看護のいずれかの分野において高度の技能を発揮し、看護ケアを改善していく能力を修得する。

ウ 老人看護学領域
老人の加齢過程や健康生活に関わる間
題に対して、高度な専門的援助を実践し、また看護方法の開発に貢献できるように老人看護に必要な理論とその活用、老人の健康評価の方法、看護ニードの分析方法、サポートシステムの推進方法などを修得する。

4）看護管理・教育学分野

看護管理・教育学分野では、変動の激しい社会にあって将来を見通した創造的な看護管理及び看護教育のシステムを構築していくために、看護行政、看護管理、基礎看護教育及び継続教育に関する諸理論と方法を修得する。

ア）看護管理学領域

保健・医療・福祉の行政と看護管理システムについて国際的な幅広い視野を身につけるとともに、行政の仕組み、看護管理及び経済に関する理論や方法を探求することで、将来、保健・医療・福祉におけるさまざまな場でリーダーシップを発揮でき、看護行政や看護管理に携わり得る能力を修得する。

イ）看護教育学領域

看護教育学は、専門的知識、技術の修得及び人格形成などの二側面を持つことを基盤としており、教育の原理及びそれぞれに関わる教育内容や方法の特殊性を学び、現行の教育課題を明らかにする。学生は先駆的な教育課程の編成並びに教授案の作成を試み、特に臨床教育に焦点を当てる教育評価法を開発し、基礎並びに継続教育担当者としての能力を修得する。

5）看護基礎科学分野

看護基礎科学分野では、看護学の対象である生活者としての人体の構造と機能及びその異常や人間の健康現象と環境との関わりについての理解を深めるために看護生態学、看護病態学の2つの領域を置いている。この2つの領域は分野別専門科目が有機的につながっており、学生はそれぞれの目的に合わせた科目の選択ができる。

ア）看護生態学領域

生活する人間の人体の構造、調節機能を看護学の視点から総合的に探求し、理解を深めるとともに生体の形態、機能、代謝の解析に必要な基礎的な方法及びその応用に関する研究方法を修得する。
<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>科目コード</th>
<th>授業科目の名称</th>
<th>配当年次</th>
<th>単位数又は時間数</th>
<th>担当教員</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>共通必修</td>
<td>P001</td>
<td>理論看護学</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>南野裕子</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>P002</td>
<td>看護研究法</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>美江子</td>
</tr>
<tr>
<td>共通選択</td>
<td>Q001</td>
<td>哲学的人間学</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>石金井</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Q002</td>
<td>心理療法原論</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>井上</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Q003</td>
<td>現代家族社会学</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>加藤</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Q004</td>
<td>保健経済学</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>末田</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Q005</td>
<td>保健統計学</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>長橋</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Q006</td>
<td>情報活用論</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>宮本</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Q007</td>
<td>保健福祉学</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>佐藤</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Q008</td>
<td>ケア文学論</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>まつり</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Q009</td>
<td>運動処方論</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>石田</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Q010</td>
<td>生涯スポーツ論</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>松本</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Q011</td>
<td>生涯教育論</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>山本</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Q012</td>
<td>国際保健学</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>松村</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Q013</td>
<td>社会文化人類学</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>石原</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Q014</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>鈴木</td>
</tr>
<tr>
<td>分野別共通科目</td>
<td>R001</td>
<td>看護倫理</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>片山</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>R002</td>
<td>看護と保健政策</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>米田</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>R003</td>
<td>看護教育</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>高石</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>R004</td>
<td>看護管理</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>藤原</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>R005</td>
<td>地域保健活動論</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>井上</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>R006</td>
<td>看護コンサルテーション</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>佐藤</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>R007</td>
<td>看護ヘルスアクセスメント</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>安西</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>R008</td>
<td>災害看護</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>上野</td>
</tr>
<tr>
<td>成人看護学分野</td>
<td>S011</td>
<td>成人生活身体論</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>野田</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S012</td>
<td>ストレス看護論</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>野村</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S021</td>
<td>がん看護論</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>鈴木</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S022</td>
<td>症状緩和論</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>田中</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S013</td>
<td>成人看護援助論</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>佐藤</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S014</td>
<td>がん治療看護論</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>小林</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S015</td>
<td>成人看護実践演習Ⅰ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>井上</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S016</td>
<td>成人看護実践演習Ⅱ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>佐藤</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S017</td>
<td>成人看護実践演習Ⅲ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>安西</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S025</td>
<td>がん看護実践演習Ⅰ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>田中</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S026</td>
<td>がん看護実践演習Ⅱ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>小林</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S027</td>
<td>がん看護実践演習Ⅲ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>佐藤</td>
</tr>
<tr>
<td>母子看護学分野</td>
<td>S031</td>
<td>母性健康生活論</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>本田</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S041</td>
<td>小児健康生活論</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>本田</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S042</td>
<td>小児看護論</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>本田</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S032</td>
<td>母性援助論Ⅰ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>本田</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S033</td>
<td>母性援助論Ⅱ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>本田</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S043</td>
<td>小児看護方法論Ⅰ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>本田</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S044</td>
<td>小児看護方法論Ⅱ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>本田</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S035</td>
<td>母性看護実践演習Ⅰ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>本田</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S036</td>
<td>母性看護実践演習Ⅱ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>本田</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S037</td>
<td>母性看護実践演習Ⅲ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>本田</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S045</td>
<td>小児看護実践演習Ⅰ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>本田</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S047</td>
<td>小児看護実践演習Ⅱ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>本田</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S048</td>
<td>小児看護実践演習Ⅲ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>本田</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（ ）は非営動講師
<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>科目コード</th>
<th>授業科目的名称</th>
<th>配当年次</th>
<th>単位数又は時間数</th>
<th>担当教員</th>
<th>頁</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>地域・精神</td>
<td>S051</td>
<td>地域看護活動論</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>森口</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S052</td>
<td>地域組織活動論</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S053</td>
<td>国際地域看護論</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S054</td>
<td>家族看護学</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S061</td>
<td>精神健康論</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S062</td>
<td>精神看護方法論Ⅰ</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S063</td>
<td>精神看護方法論Ⅱ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S064</td>
<td>リュイション精神看護論</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S065</td>
<td>精神障害者看護論</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S071</td>
<td>老人健康生活論</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S072</td>
<td>老人看護サポートシステム論</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S073</td>
<td>老人看護方法論</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S074</td>
<td>老人看護方法論</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S056</td>
<td>地域看護実践演習ⅠA</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S057</td>
<td>地域看護実践演習ⅠB</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S058</td>
<td>地域看護実践演習Ⅱ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S067</td>
<td>精神看護実践演習Ⅰ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S068</td>
<td>精神看護実践演習Ⅱ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S069</td>
<td>精神看護実践演習ⅢA</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S161</td>
<td>精神看護実践演習ⅢB</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S076</td>
<td>老人看護実践演習Ⅰ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S077</td>
<td>老人看護実践演習Ⅰ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S078</td>
<td>老人看護実践演習Ⅲ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>伊戸</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S081</td>
<td>看護組織論</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>野崎</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S082</td>
<td>組織行動管理論</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>野崎</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S083</td>
<td>看護経済学</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>野崎</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S094</td>
<td>看護教育制度論</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>野崎</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S095</td>
<td>看護教育方法論</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>野崎</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S096</td>
<td>継続教育論</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>野崎</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S087</td>
<td>管理・教育学科論</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>野崎</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S088</td>
<td>管理実践演習</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>野崎</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S089</td>
<td>教育実践演習</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>野崎</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S116</td>
<td>看護生態学論Ⅰ</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>加坂</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S117</td>
<td>看護生態学論Ⅱ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>加坂</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S118</td>
<td>看護生態学演習Ⅰ</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>加坂</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S119</td>
<td>看護生態学演習Ⅱ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>加坂</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S103</td>
<td>看護生態学論Ⅰ</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>加坂</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S104</td>
<td>看護生態学論Ⅱ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>加坂</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S105</td>
<td>看護生態学演習Ⅰ</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>加坂</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S106</td>
<td>看護生態学演習Ⅱ</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>加坂</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S120</td>
<td>看護生態学研究法A</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>加坂</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S121</td>
<td>看護生態学研究法B</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>加坂</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S122</td>
<td>看護生態学研究法C</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>加坂</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S123</td>
<td>看護生態学研究法D</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>加坂</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S124</td>
<td>看護生態学研究法ⅠA</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>加坂</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S125</td>
<td>看護生態学研究法ⅠB</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>加坂</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S126</td>
<td>看護生態学研究法ⅠC</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>加坂</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S127</td>
<td>看護生態学研究法ⅠD</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>加坂</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S128</td>
<td>看護生態学研究法ⅡA</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>加坂</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S129</td>
<td>看護生態学研究法ⅡB</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>加坂</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S130</td>
<td>看護生態学研究法ⅡC</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>加坂</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>S131</td>
<td>看護生態学研究法ⅡD</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>加坂</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（ ）は非常講師
（1）教育課程の特色

（1）専門分野の構成

学部における看護領域では講座を中心として、専門科目群を配置する形態を取り、それぞれの特徴を生かした科目構成をとっている。修士課程においては、さらにその分野の特徴を考慮し、専門科目間の連携を密にし、総合的教育課程を置くために、五つの基本となる分野を編成している。博士後期課程では、看護学の1専攻、2分野の構成とした。その他、共通して選択できる科目を配置する。

看護学研究科博士後期課程

生涯健康看護学分野

広域健康看護学分野

（2）専門分野別科目の配置

<table>
<thead>
<tr>
<th>専門分野</th>
<th>授業科目</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>生涯健康看護学</td>
<td>発達看護学特論Ⅰ〜Ⅱ、発達看護学演習Ⅰ〜Ⅱ、健康看護学特論Ⅰ〜Ⅳ、健康看護学演習Ⅰ〜Ⅳ</td>
</tr>
<tr>
<td>広域健康看護学</td>
<td>組織看護学特論、組織看護学演習、看護教育学特論、看護教育学演習、国際地域看護学特論、国際地域看護学演習</td>
</tr>
<tr>
<td>（共通科目）</td>
<td>理論看護学Ⅱ、看護学研究法Ⅱ、高等社会統計学、哲学の人間学Ⅱ、ケア文学論Ⅱ、学習支援方法論、脳症病態学、臨床栄養学、災害看護学Ⅱ</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（3）教育課程編成の特色

二つの専門分野には、理論と研究の専門性を高めるために、専門分野別の授業科目を配置した。特徴は理論を中心とした科目であり、演習は専門の研究法を指導する科目である。

また、分野を越えて履修できる共通科目を配置したが、これは修士課程の科目内容をさらに高めた学術科目である。

① 実践的研修者の育成

修士課程では、高度な専門職業人の育成を主な目的とした教育課程を編成しているが、博士後期課程では、看護実践の質の向上を目指して、自立して研究を行うことができる実践的研究者の育成を目指しており、修士課程と有機的な関連性がある。

② 生涯健康看護学分野における（生涯健康の）看護研究の開発

個人又は家族として、それぞれの生涯における健康生活の向上についての直接的な看護介入に関する理論と研究法を探求する上で、成長発達を主な概念とした発達看護学とそれぞれの独自の健康観や状態にあわせた生活を中心とした健康看護学を配置する。

③ 広域健康看護学分野における（看護を取り巻く環境や広い分野の）看護研究の開発

国際的な看護・医療支援活動の探求を中心とする国際地域看護学、これらの医療組織の中での看護役割を探求する組織看護学及び実践教育を含めた多様で、独自的な看護教育方法の開発を目指す看護教育学を配置し、人々が健康に生活する仕組みやそれを支える組織について探求する。

④ 研究者としての基盤と学際的な視野を考慮した共通科目の配置

修士課程の共通科目を基礎として看護学研究者の基盤をより確かなものとし、研究に学際的な深まりを持つことができる高度な理論や、研究法を修得するために必要な科目を共通科目として配置する。
（4）大学院設置基準14条（昼夜開講制の实施）
学習意欲を持ちながら昼間就学することが困難な社会人の働きながら学ぶ機会を確保するために、昼夜開講制を実施している。
授業時間については、1~5限（9:00~17:50）に加えて、6~7限（18:20~21:30）とするが、指導教員と社会人学生とが個々に相談の上、授業を行う。また、社会人学生の履修指導や研究指導については、学生に適度の負担が生じないように、学生のニーズに合わせた柔軟な指導体制をとるとともに、夜間開講科目を設置し、個人指導が集中的に行えるよう時間的な配慮を行う。

【2】教育課程の概要
（1）生涯健康看護学
生涯健康看護学分野は、生涯にわたる人間の成長・発達を基盤とし、個人や家族を対象として、健康状態の変化にかかわらず、その人、あるいはその人達の生活や人生の質の向上を図る働きかけの方法を構築するための教育研究を追求する看護領域で構成される。
この分野は発達看護学Ⅰ・Ⅱ及び健康看護学Ⅰ・Ⅳで構成され、それぞれ特論と演習を配置する。特論においては研究の枠組みを構築する方法やその基本となる理論、研究手法を深く学び、演習ではその領域で用いられる高度な研究手法を修得する。

① 発達看護学
発達看護学は、小児、女性、家族を対象として、それそれぞれが成長発達する過程で遭遇する課題や、健康状態の変化に伴って生じる健康生活上の問題や現象にかかわらず、発達看護学にについて探求する上で、必要となる理論や研究法を学び独立して研究を進める能力を修得する。
主として、発達看護学Ⅰは母性看護学に、発達看護学Ⅱは小児看護学に焦点を置く科目である。

② 健康看護学
健康看護学は、成人期や老人期にある人々を対象に、心身の健康状態の変化に伴う生活の変化や、その変化に対応するための看護ケアについて探求する際に、必要な演繊の研究法や、帰納的研究法を修得するとともに、自立して研究が進められる能力を修得する。
主として、健康看護学Ⅰは成人看護学に、健康看護学Ⅱは老人看護学に、健康看護学Ⅲは精神看護学に、健康看護学Ⅳはがん看護学に焦点を置く科目である。

（2）広域健康看護学
広域健康看護学分野は、集団やコミュニティを対象としながら、日本及び諸外国の看護を取り巻く環境とその環境への働きかけ、組織やそこまで働く人々の行動特性、生涯にわたっての教育方法のあり方などの探究を特色とする看護領域で構成される。この分野は、組織看護学、看護教育学及び国際地域看護学から、それぞれ特論と演習を配置する。特論においては、研究の枠組みの構築や、その基本となる理論や、研究手法を深く学び、演習ではその領域で用いられる研究手法を修得する。

① 組織看護学
発達する医療福祉制度の中で、看護力を有効に発揮するために、組織的管理にかかわる現象について看護の観点から理解を深め、研究方法を推進する。

② 看護教育学
21世紀を担う看護職の育成に必要となる実践に根ざした看護教育法について、基礎教育・継続教育の双方から理論を構築し、高度な研究方法を探索する。

③ 国際地域看護学
国際地域看護学は、人々の健康課題や問題を地球規模でとらえながら、国際看護協力のある方を探求するため、人々の健康課題等について国境を超えた世界レベルで考え、研究するとともに、特定の国の文化や国境の違いを踏まえながら看護援助活動を通じて、その国特有の健康問題等について実践に根ざした解決方法を探求する。

（3）共通科目
看護学の研究者の基盤をより確かなものとするために、修士課程において配置した理論看護学、看護学研究法Ⅰの科目に加えて理論看護学Ⅱと看護学研究法Ⅱを配置する。また、高等教養科目として配置した科目については、さらに精深な理論と研究を深めることを目的として配置し、新たに看護学の発展を支持する基礎的な関連科目を配置する。さらに、修士課程の災害看護学Ⅰに加えて、災害看護学Ⅱの科目を配置し、災害時に生じる心・身・社会・環境について、看護の観点から分析し、災害看護学の構築を探究する。
<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>科目コード</th>
<th>授業科目の名称</th>
<th>配当年次</th>
<th>単位数又は時間数</th>
<th>担当教員</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>選択自由</td>
<td>前期後期</td>
</tr>
<tr>
<td>共通</td>
<td>K001</td>
<td>理論看護学 II</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>K002</td>
<td>看護学研究法 II</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>K003</td>
<td>高等社会統計学</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>K004</td>
<td>哲学的人間学 II</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>K005</td>
<td>ケア文学論 II</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>K006</td>
<td>学習支援方法論</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>K007</td>
<td>腫瘍病態学</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>K008</td>
<td>臨床栄養学</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>K009</td>
<td>災害看護学 II</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>L001</td>
<td>発達看護学特論 I</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>L002</td>
<td>発達看護学演習 I</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>L003</td>
<td>発達看護学特論 II</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>L004</td>
<td>発達看護学演習 II</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>L005</td>
<td>健康看護学特論 I</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>L006</td>
<td>健康看護学演習 I</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>L007</td>
<td>健康看護学特論 II</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>L008</td>
<td>健康看護学演習 II</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>L009</td>
<td>健康看護学特論 III</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>L010</td>
<td>健康看護学演習 III</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>L011</td>
<td>健康看護学特論 IV</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>L012</td>
<td>健康看護学演習 IV</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>M001</td>
<td>組織看護学特論</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>M002</td>
<td>組織看護学演習</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>M003</td>
<td>看護教育学特論</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>M004</td>
<td>看護教育学演習</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>広域健康看護学分野</td>
<td>M005</td>
<td>国際地域看護学特論</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>広域健康看護学分野</td>
<td>M006</td>
<td>国際地域看護学演習</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（ ）は非常勤講師
## 共同研究実施状況

<table>
<thead>
<tr>
<th>実施年度</th>
<th>共同研究先</th>
<th>テーマ</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>5～6</td>
<td>兵庫県立病院</td>
<td>障害者と共に生きる地域づくりをめざしての取り組み 一精神障害者の実態と医療ニーズ調査を通じて</td>
</tr>
<tr>
<td>5～6</td>
<td>兵庫県立尼崎病院</td>
<td>臨床実習指導における看護師の体験世界 一困っている場面の分析から</td>
</tr>
<tr>
<td>5～6</td>
<td>兵庫県立尼崎病院</td>
<td>術後肺合併症予防を目的とした看護ケアの分析 一予防活動としての意味について</td>
</tr>
<tr>
<td>7～8</td>
<td>兵庫県立成人病センター</td>
<td>病院知を受けた患者への看護支援の検討 一事例を通じて見えた看護師の状況</td>
</tr>
<tr>
<td>7～8</td>
<td>兵庫県立高齢者病院機能研究センター附属病院</td>
<td>高齢者高齢者の倫理に関するナースの関与とその効果 一遠隔リテラシーの場面から</td>
</tr>
<tr>
<td>9～10</td>
<td>兵庫県立加古川病院</td>
<td>親とみられる過程を支援する 一両親学部を通して妊婦から分娩までのかかわりを考える</td>
</tr>
<tr>
<td>9～10</td>
<td>兵庫県立こども病院</td>
<td>臨床実践における看護師の内省に関する研究 一小児ICUにおいて患者の写真が与える影響</td>
</tr>
<tr>
<td>9～10</td>
<td>兵庫県立加古川看護専門学校</td>
<td>看護基礎教育におけるクリティカルシンキング育成方法 一2年課程学生の看護過程に用いられている思考様式</td>
</tr>
<tr>
<td>11～12</td>
<td>兵庫県立尼崎病院</td>
<td>急性期看護における臨床判断能力開発プログラムの検討</td>
</tr>
<tr>
<td>11～12</td>
<td>兵庫県立加古川病院</td>
<td>臨床期における患者の家族への看護ケア 一心のケアに焦点をあてて</td>
</tr>
<tr>
<td>11～12</td>
<td>公立豊岡病院</td>
<td>臨床現場における有用な「日常手洗い」方法の検討 一手洗いの効果と微生物学的観察</td>
</tr>
<tr>
<td>11～12</td>
<td>兵庫県立柏原病院</td>
<td>同居中での介護を引き受ける者の心理を検討 一6事例の案内へのインタビューを分析して</td>
</tr>
<tr>
<td>11～12</td>
<td>兵庫県立柏原保健所</td>
<td>精神障害者が安心して暮らせる街づくりをめざして 一精神障害者と家族のニーズ調査を通じて</td>
</tr>
<tr>
<td>13～14</td>
<td>兵庫県立尼崎病院</td>
<td>キャリア・デベロップメントプログラムの開発 一人前看護師のキャリアニーズの把握</td>
</tr>
<tr>
<td>13～14</td>
<td>兵庫県立成人病センター</td>
<td>ライフイベントが中堅看護師の臨床能力に与える影響</td>
</tr>
<tr>
<td>13～14</td>
<td>兵庫県立尼崎病院</td>
<td>初回化学療法を受けるがん患者の治療過程の体験 一消化器がんおよび消化器がんをもつ人に焦点をあてて</td>
</tr>
<tr>
<td>13～14</td>
<td>兵庫県立成人病センター</td>
<td>がん患者の在宅移行に向けてのアプローチ 一アセスメントツールの活用の効果</td>
</tr>
</tbody>
</table>

72
<table>
<thead>
<tr>
<th>テーマ</th>
<th>研究代表者</th>
<th>共同研究者</th>
<th>期間</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>病室、病棟環境におけるニオイの発生要因と患者の居住性に関する研究</td>
<td>根本 清次</td>
<td>川口 孝奈・桜井 利江・藤田 仁美・嶋山 治南 裕子</td>
<td>平成6年～平成8年</td>
</tr>
<tr>
<td>療養疾患のカルシウム代謝異常についての臨床的研究</td>
<td>吉本 義生</td>
<td>桜井 利江・前田 環 (兵庫県立高齢者福祉機能研究センター)</td>
<td>平成6年～平成7年</td>
</tr>
<tr>
<td>看護学的な視点による東洋医学および伝統・民間療法の検討</td>
<td>南 裕子</td>
<td>藤田 仁美・川口 孝奈・根本 清次・桜井 利江</td>
<td>平成6年～平成7年</td>
</tr>
<tr>
<td>高齢者の睡眠覚醒リズムに及ぼす床内暖房器具の影響</td>
<td>服部 朝子</td>
<td>近田 敬子・柴田 真志・若村 智子・柴田しおり・志村 満子</td>
<td>平成6年～平成7年</td>
</tr>
<tr>
<td>構造モデルを用いた入院環境の評価に関する検討—環境看護学のターゲット設定の明確化を通じて—</td>
<td>川口 孝奈</td>
<td>根本 清次・松浦 和幸・桜井 利江・藤田 仁美・南 裕子</td>
<td>平成6年～平成7年</td>
</tr>
<tr>
<td>看護大学編入学カリキュラムのモデル開発に向けて—短期大学を卒業した看護師の学習要求の分析—</td>
<td>平沢 勝美</td>
<td></td>
<td>平成6年</td>
</tr>
<tr>
<td>初期糖尿病患者に効果的な保養指導を行うための指標の検討—運動療法に関して—</td>
<td>豊田 裕子</td>
<td></td>
<td>平成6年</td>
</tr>
<tr>
<td>ヨガ呼吸法をとり入れたリラクゼーションによる便秘改善法の開発と検討</td>
<td>志村 満子</td>
<td></td>
<td>平成6年</td>
</tr>
<tr>
<td>テーマ</td>
<td>研究代表者</td>
<td>共同研究者</td>
<td>期間</td>
</tr>
<tr>
<td>-----------------------------------------------------------------------</td>
<td>------------------</td>
<td>-------------------------------------------------------------</td>
<td>-------------</td>
</tr>
<tr>
<td>病室、病棟環境におけるニオイの発生要因と患者の居住性に関する研究</td>
<td>根本 清次</td>
<td>川口 孝泰・桜井 利江・田中 仁美・関山 治南 裕子</td>
<td>平成8年～平成8年</td>
</tr>
<tr>
<td>術後疼痛のある子どもの痛み緩和ケアの実態の把握と看護介入方法の構築</td>
<td>片田 覇子</td>
<td>大崎富士代・高倉裕子</td>
<td>平成7年～平成9年</td>
</tr>
<tr>
<td>痴呆疾患のカルシウム代謝異常についての臨床的研究</td>
<td>吉本 祥生</td>
<td>櫻井 利江・前田 潔</td>
<td>平成6年～平成7年</td>
</tr>
<tr>
<td>看護学的な視点による東洋医学および伝統・民間療法の検討</td>
<td>南 裕子</td>
<td>勝田 仁美・川口 孝泰・根本 清次・桜井 利江</td>
<td>平成6年～平成7年</td>
</tr>
<tr>
<td>高齢者の睡眠覚醒リズムに及ぼす床内暖房器具の影響</td>
<td>服部 朝子</td>
<td>近藤 敏子・柴田 眞志・若村 智子・志村 満子・大原 美香</td>
<td>平成6年～平成7年</td>
</tr>
<tr>
<td>構成モデルを用いた入院環境の評価に関する検討</td>
<td>川口 孝泰</td>
<td>根本 清次・桜井 利江・勝田 仁美・松浦 和幸</td>
<td>平成6年～平成7年</td>
</tr>
<tr>
<td>描画法における人間像の発達的研究</td>
<td>沢口 純二</td>
<td>前川あさ美（東京女子大学文理学部講師）</td>
<td>平成7年～平成9年</td>
</tr>
<tr>
<td>痴呆性老人のQOLを高めるケア技術の開発</td>
<td>水谷 信子</td>
<td>竹崎久美子・辻塚 千代・塩塚 優子・三上 由郁</td>
<td>平成7年～平成8年</td>
</tr>
<tr>
<td>精神障害者への地域ケアにおけるケースマネジメント・モデルの開発に関する研究</td>
<td>近澤 範子</td>
<td>青木さとみ・大川 貴子・小高 恵実</td>
<td>平成7年～平成9年</td>
</tr>
<tr>
<td>老人保健施設の日常生活援助における看護職機能の専門性について</td>
<td>竹崎久美子</td>
<td></td>
<td>平成7年</td>
</tr>
<tr>
<td>終末期ケアにおける看護判断と援助技術の開発に関する研究</td>
<td>内村 敦子</td>
<td>柴田 秀子・和泉 成子・河野 文子</td>
<td>平成7年～平成9年</td>
</tr>
<tr>
<td>テーマ</td>
<td>研究代表者</td>
<td>共同研究者</td>
<td>期間</td>
</tr>
<tr>
<td>----------------------------------------------------------------------</td>
<td>------------</td>
<td>---------------------------------------------------------------------------</td>
<td>----------</td>
</tr>
<tr>
<td>病室、病棟環境におけるニオイの発生要因と患者の居住性に関する研究</td>
<td>根本 清次</td>
<td>川口 孝泰・樫井 利江・勝田 仁美・錦山 治南 裕子</td>
<td>平成6年〜平成8年</td>
</tr>
<tr>
<td>委任疼痛のある子どもたちの痛み緩和ケアの実態の把握と介護介入方法の構築</td>
<td>片田 篤子</td>
<td>大崎富士代・高谷裕紀子 中岡 亜紀</td>
<td>平成7年〜平成9年</td>
</tr>
<tr>
<td>描画法における人間像の発達的研究</td>
<td>滝口 純二</td>
<td>前川あさ美(東京女子大学)</td>
<td>平成7年〜平成9年</td>
</tr>
<tr>
<td>终末期ケアにおける看护判断と援助技术の开発に関する研究</td>
<td>内布 敦子</td>
<td>柴田 秀子・和泉 成子 河野 文子・フィンチーウッドP</td>
<td>平成7年〜平成9年</td>
</tr>
<tr>
<td>老い者のQOLを高めるケア技术の开発</td>
<td>水谷 信子</td>
<td>竹崎久美子・松岡 千代 塩塚 隆子・桶谷 佳代</td>
<td>平成7年〜平成8年</td>
</tr>
<tr>
<td>精神障害者への地域ケアにおけるケースマネージメント・モデルの开発に関する研究</td>
<td>近澤 範子</td>
<td>青本さとみ・小高 恵実 住吉里矢子</td>
<td>平成7年〜平成9年</td>
</tr>
<tr>
<td>看护学における生活構造論の構築に向けての検討</td>
<td>近田 敬子</td>
<td>宮島 朝子・志村 潤子 大原 美香・植波 寿子</td>
<td>平成8年〜平成9年</td>
</tr>
<tr>
<td>看护・人間工学的な视点による高齢者自立支援椅子の开发</td>
<td>川口 孝泰</td>
<td>小河 幸次(北海道大学) 樋本 清次</td>
<td>平成6年〜平成8年</td>
</tr>
<tr>
<td>WHO式癌疼痛治癒法の临床现场における运用を阻害する要因</td>
<td>藤間 成子</td>
<td></td>
<td>平成8年</td>
</tr>
<tr>
<td>テーマ</td>
<td>研究代表者</td>
<td>共同研究者</td>
<td>期間</td>
</tr>
<tr>
<td>--------</td>
<td>------------</td>
<td>------------</td>
<td>------</td>
</tr>
<tr>
<td>継続的看護管理教育モデルの開発</td>
<td>上泉 和子</td>
<td>アンダーウッド・P&lt;br&gt;勝原裕美子&lt;br&gt;荒井 螢子(国際療育福祉大学)&lt;br&gt;金井沙子(国際療育福祉大学)&lt;br&gt;岩井 邦子(里離病院)&lt;br&gt;平井さよ子(横浜市立大学)&lt;br&gt;佐藤 紀子(東京女子医科大学)&lt;br&gt;豊増 佳子(里離病院)</td>
<td>平成9年～平成10年</td>
</tr>
<tr>
<td>癌性疼痛のある子どもの痛み緩和ケアの実態の把握と看護介入方法の構築</td>
<td>片田 範子</td>
<td>勝田 仁美・高谷裕紀子&lt;br&gt;中岡 亜紀・古橋 知子</td>
<td>平成7年～平成9年</td>
</tr>
<tr>
<td>終末期ケアにおける看護判断と援助技術の開発に関する研究</td>
<td>内布 敦子</td>
<td>ラーソン・P・河野 文子&lt;br&gt;竹本 明子</td>
<td>平成7年～平成9年</td>
</tr>
<tr>
<td>精神障害者への地域ケアにおけるケースマネージメント・モデルの開発に関する研究</td>
<td>近澤 範子</td>
<td>宇佐美しおり・住吉里矢子&lt;br&gt;郷良 淳子・千藤 明美</td>
<td>平成7年～平成9年</td>
</tr>
<tr>
<td>看護学における生活構造論の構築に向けての検討～震災後1年目の生活変化の体験から～</td>
<td>近田 敬子</td>
<td>宮島 朝子・志村 満子&lt;br&gt;大原 美香・植波 勝子</td>
<td>平成8年～平成9年</td>
</tr>
<tr>
<td>看護・人間工学的視点による高齢者自立支援椅子の開発</td>
<td>川口 孝泰</td>
<td>小河 哲次(北海道東海大学)&lt;br&gt;西 美和子</td>
<td>平成8年～平成10年</td>
</tr>
<tr>
<td>中高年者に対する整形外科の術前術後リハビリテーション看護プログラムの開発</td>
<td>柴田 眞志</td>
<td>野並 榮子&lt;br&gt;飯岡由紀子</td>
<td>平成9年～平成11年</td>
</tr>
<tr>
<td>テーマ</td>
<td>研究代表者</td>
<td>共同研究者</td>
<td>期 間</td>
</tr>
<tr>
<td>----------------------------------------------------------------------</td>
<td>------------</td>
<td>----------------------------------------------------------------------------</td>
<td>-------------</td>
</tr>
<tr>
<td>繰続的看護管理教育モデルの開発</td>
<td>上泉 和子</td>
<td>アンダーワッド・P 勝原穂美子 荒井 樹子(国際医療福祉大学) 金井Pak雅子(国際医療福祉大学) 岩井 郁子(聖路加看護大学) 平井さと子(横浜市立大学) 佐藤 紀子(東京女子医科大学) 豊増 佳子(聖路加看護大学)</td>
<td>平成9年～平成10年</td>
</tr>
<tr>
<td>教科学習における物語的(ナラティブ)ディスクコースの分析</td>
<td>藤原 頌</td>
<td>松崎 正治(鳥取大学) 山住 勝弘(大阪教育大学)</td>
<td>平成10年～平成12年</td>
</tr>
<tr>
<td>看護・人間工学的な視点による高齢者自立支援体系の開発</td>
<td>川口 孝泰</td>
<td>小河 幸次(北海道東海大学) 西 美和子</td>
<td>平成8年～平成10年</td>
</tr>
<tr>
<td>中高年者に対する整形外科の術前術後リハビリテーション看護プログラムの開発</td>
<td>柴田 真志</td>
<td>野並 葉子 飯岡由紀子</td>
<td>平成9年～平成11年</td>
</tr>
<tr>
<td>在宅療養における居住空間の形成に関する基礎的研究所</td>
<td>宮島 朝子</td>
<td></td>
<td>平成10年～平成12年</td>
</tr>
<tr>
<td>癌患者の症状緩和技術の開発に関する研究</td>
<td>内布 敦子</td>
<td>ラーソン・P・滋野みゆき 竹本 明子・山本 真澄</td>
<td>平成10年～平成13年</td>
</tr>
<tr>
<td>糖尿病患者の療養法から導かれた外来における看護モデル(coaching)の開発</td>
<td>野並 葉子</td>
<td>飯岡由紀子・山川清統理子 小野 和子</td>
<td>平成10年～平成11年</td>
</tr>
<tr>
<td>傷害性老人のQOLを高めるケア技術の確立とその効果測定方法の検討</td>
<td>水谷 信子</td>
<td>竹崎久美子・塩塚 優子 森谷 佳代・井藤由香里</td>
<td>平成10年～平成12年</td>
</tr>
<tr>
<td>地域で生活する精神障害者のセルフケアを支えるサポートシステムのモデルの開発</td>
<td>字佐美しおり</td>
<td>近澤 範子・住吉重矢子 千藤 明美</td>
<td>平成10年～平成11年</td>
</tr>
<tr>
<td>老人保健施設における専門看護師(老人看護)の機能と実践に関する試案検討</td>
<td>竹崎久美子</td>
<td></td>
<td>平成10年～平成11年</td>
</tr>
<tr>
<td>テーマ</td>
<td>研究代表者</td>
<td>共同研究者</td>
<td>期間</td>
</tr>
<tr>
<td>----------------------------------------------------------------------</td>
<td>------------</td>
<td>---------------------------------------------------------------------------</td>
<td>------------</td>
</tr>
<tr>
<td>教科学習における物語的（ナラティブ）ディスコースの分析</td>
<td>藤原 顯</td>
<td>松崎 正治（鳥取大学）山田 勝弘（大阪教育大学）</td>
<td>平成10年～平成12年</td>
</tr>
<tr>
<td>中高年者に対する整形外科の術前術後リハビリテーション看護プログラムの開発</td>
<td>柴田 真志</td>
<td>野並 菜子 飯岡由紀子（杏林大学）</td>
<td>平成9年～平成11年</td>
</tr>
<tr>
<td>在宅療養における居住空間の形成に関する基礎的研究 －QOL向上に関与する環境要因－</td>
<td>宮島 朝子</td>
<td></td>
<td>平成10年～平成12年</td>
</tr>
<tr>
<td>腫瘍患者の症状緩和技術の開発に関する研究</td>
<td>内布 敦子</td>
<td>ラーソン・P・流野みゆき 竹本 明子・山本 真澄</td>
<td>平成10年～平成13年</td>
</tr>
<tr>
<td>糖尿病患者の療養法から導かれた外来における看護モデル(coaching)の開発</td>
<td>野並 菜子</td>
<td>山川真理子・小野 和子 柴田 真衣</td>
<td>平成10年～平成11年</td>
</tr>
<tr>
<td>健康性老人のQOLを高めるケア技術の確立とその効果測定方法の検討</td>
<td>水谷 信子</td>
<td>竹崎久美子・片谷 佳代 井藤由香里・多田 祐美</td>
<td>平成10年～平成12年</td>
</tr>
<tr>
<td>地域で生活する精神障害者のセルフケアを支えるサポートシステムのモデルの開発</td>
<td>宇佐美しおり</td>
<td>近澤 眞子・山本良枝 千藤 明美</td>
<td>平成10年～平成11年</td>
</tr>
<tr>
<td>高齢者の介助起立時における生体への影響と援助方法に関する検討</td>
<td>川口 孝泰</td>
<td>鳥山 治・小西美和子 飯田 健夫（立命館大学）</td>
<td>平成11年～平成12年</td>
</tr>
<tr>
<td>移行期の男性差（思春期・子育て期・更年期）のヘルスプロモーションモデルの構築</td>
<td>山本あい子</td>
<td>工藤 美子・篠崎 和子 増井 耐子・鈴木 靖</td>
<td>平成11年～平成13年</td>
</tr>
<tr>
<td>老人保健施設における専門看護師（老人看護）の機能と実践に関する試案検討</td>
<td>竹崎久美子</td>
<td></td>
<td>平成10年～平成11年</td>
</tr>
<tr>
<td>テーマ</td>
<td>研究代表者</td>
<td>共同研究者</td>
<td>期間</td>
</tr>
<tr>
<td>----------------------------------------------------------------------</td>
<td>----------------------------------------------------------------------------</td>
<td>----------------------------------------------------------------------------</td>
<td>-----------------------</td>
</tr>
<tr>
<td>災害時における看護支援ネットワークの構築に関する研究</td>
<td>南 裕子</td>
<td>中西 睦子 (神戸市立看護大学) 中島紀恵子 (北海道医療大学) 新道 幸恵 (青森県立保健大学)</td>
<td>平成12年～平成14年</td>
</tr>
<tr>
<td>教科学習における物語的 (ナarraティ) デイスコースの分析</td>
<td>藤原 顕</td>
<td>松崎 正治 (島根大学) 山住 勝広 (大阪教育大学)</td>
<td>平成10年～平成12年</td>
</tr>
<tr>
<td>小児における聴覚障害者支援方法の開発</td>
<td>片田 堺</td>
<td>藤田 仁美・松林 知美 野田奈巳子・田本 悟</td>
<td>平成12年～平成13年</td>
</tr>
<tr>
<td>在宅療養における居住空間の形成に関する基礎的研究</td>
<td>宮島 朝子</td>
<td>荒尾 晴恵・滋野みゆき 山本 真澄・宮野さつき</td>
<td>平成10年～平成12年</td>
</tr>
<tr>
<td>癌患者の症状緩和技術の開発に関する研究</td>
<td>内村 敬子</td>
<td>水谷 信子 白崎亜美子・山地 佳代 多田 佑美・梅垣 順子</td>
<td>平成10年～平成12年</td>
</tr>
<tr>
<td>痴呆性老人のQOLを高めるケア技術の確立とその効果測定方法の検討</td>
<td>川口 孝泰</td>
<td>鶴山 治・鯨島 輝美 佃 健夫 (立命館大学)</td>
<td>平成11年～平成12年</td>
</tr>
<tr>
<td>髄関節の介助起立時における生体への影響と援助方法に関する検討</td>
<td>山本あい子</td>
<td>工藤 美子 木村 老居 寺村 康子・鈴木 静</td>
<td>平成11年～平成13年</td>
</tr>
<tr>
<td>阪神・淡路大震災による北浜町の地域社会と住民生活の変容</td>
<td>周元 行雄</td>
<td>長屋 昭義・松浦 和幸 福留 留美</td>
<td>平成12年～平成14年</td>
</tr>
<tr>
<td>一八県神社の祭礼ののケアスタディを中心としてヒト成長ホルモン分泌促進物質(GHS) 受容体遺伝子転写調節の分子機構</td>
<td>加治 秀介</td>
<td>千原 和夫 (神戸大学)</td>
<td>平成10年～平成12年</td>
</tr>
<tr>
<td>糖尿病患者の外来看護に携わる看護支援システムの試み</td>
<td>井並 葉子</td>
<td>田中 和子・塚本 真弓 森 菊子</td>
<td>平成12年～平成14年</td>
</tr>
<tr>
<td>精神障害者の地域生活支援と再発防止に関連した急性期ケアプロトコールの開発</td>
<td>佐佐美しおり</td>
<td>パトリシア・アンダーウッド 近澤 堺子・山崎 信実 山本 時子・山本真佐枝</td>
<td>平成12年～平成14年</td>
</tr>
<tr>
<td>倫理的ジレンマを伴う看護管理者の意思決定プロセスの分析</td>
<td>勝原裕美子</td>
<td></td>
<td>平成12年～平成13年</td>
</tr>
<tr>
<td>テーマ</td>
<td>研究代表者</td>
<td>共同研究者</td>
<td>期間</td>
</tr>
<tr>
<td>------------------------------------------</td>
<td>-------------------</td>
<td>---------------------------------------------------------------------------</td>
<td>----------</td>
</tr>
<tr>
<td>災害時における看護支援ネットワークの構築に関する研究</td>
<td>南 裕子</td>
<td>中西 瞳子 (神戸市看護大学) 中島紀恵子 (北海道医療大学) 新道 幸恵 (青森県立保健大学) 中山 洋子 (福岡県立医科大学) 山崎美恵子 (高知女子大学) 黒田 裕子 (三重県立看護大学) 貝山 桂子 (鹿児島統合大学) 片田 範子・山本あい子 井伊久美子・竹崎久美子 増野 園恵</td>
<td>平成12年～平成14年</td>
</tr>
<tr>
<td>情報通信技術 (IT) を活用した地域ケアシステムの開発</td>
<td>南 裕子</td>
<td>太田 健一 (武庫川女子大学) 片田 範子・近田 敬子 水谷 信子・山本あい子 森口 青子・野並 星子 近澤 範子・内布 敦子 宮島 朝子・井伊久美子 川口 孝泰・勝田 仁美 東 ますみ</td>
<td>平成13年～平成15年</td>
</tr>
<tr>
<td>小児における癌性疼痛緩和方法の開発</td>
<td>片田 範子</td>
<td>藤田 仁美・松林 知美 来生奈巳子・恵木 恒</td>
<td>平成12年～平成13年</td>
</tr>
<tr>
<td>遠隔看護 (telenursing) における健康状態のアセスメント手法の開発に関する研究</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ーカオス分析によるバイタルサイン情報の活用</td>
<td>川口 孝泰</td>
<td>太田 健一 (武庫川女子大学) 松浦 幸和・豊山 治 東 さすみ・鯨島 輝美</td>
<td>平成13年～平成15年</td>
</tr>
<tr>
<td>癌患者の症状緩和技術の開発に関する研究</td>
<td>内布 汉子</td>
<td>荒尾 晴恵・渋野みゆき 宇野さつき・大塚奈央子</td>
<td>平成10年～平成13年</td>
</tr>
<tr>
<td>移行期の女性達 (思春期・子育て期・更年期)のヘルスプロモーションモデルの構築</td>
<td>山本あい子</td>
<td>工藤 美子・田村 康子 鈴木 静・辻 久美子</td>
<td>平成11年～平成13年</td>
</tr>
<tr>
<td>阪神・淡路大震災による北淡町の地域社会と住民生活の変容</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ー八幡神社の祭礼参加者のケーススタディを中心としてー</td>
<td>岡村 行雄</td>
<td>長尾 昭義・松浦 和幸 福留 留美</td>
<td>平成12年～平成14年</td>
</tr>
<tr>
<td>ヒト成長ホルモン分泌促進物質 (GHS) 受容体遺伝子転写調節の分子機構</td>
<td>加治 秀介</td>
<td>千原 和夫 (神戸大学)</td>
<td>平成12年～平成13年</td>
</tr>
<tr>
<td>テーマ</td>
<td>研究代表者</td>
<td>共同研究者</td>
<td>期 間</td>
</tr>
<tr>
<td>------------------------------------------------------------------------</td>
<td>-----------------</td>
<td>---------------------------</td>
<td>---------</td>
</tr>
<tr>
<td>糖尿病患者の外来看護に携わる看護婦支援システムの試み</td>
<td>野並 薫子</td>
<td>森 菊子・藻川 真弓</td>
<td>平成12年〜 平成14年</td>
</tr>
<tr>
<td>一般大学と看護大学とのネットワークづくりを目指して〜</td>
<td></td>
<td>秋山 直子・近藤 千明</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>慢性疾患の児と家族のエンパワーメントを支えるコミュニティケアパッケージの開発</td>
<td>勝田 仁美</td>
<td>片田 範子・福留 留美</td>
<td>平成13年〜 平成15年</td>
</tr>
<tr>
<td>精神障害者のケアマネジメントに関する実証的研究</td>
<td>近澤 茂子</td>
<td>玉木 敦子・山本 慎子</td>
<td>平成13年〜 平成14年</td>
</tr>
<tr>
<td>他職種間の連携およびスタッフ教育・サポート体制づくりと看護職の役割〜</td>
<td></td>
<td>山崎 由実・丸本 典子</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>総合的学習と教師の成長</td>
<td>藤原 顕</td>
<td></td>
<td>平成13年〜 平成14年</td>
</tr>
<tr>
<td>授業実践経験へのナラティヴ・アプローチを軸に〜</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>倫理的ジレンマを伴う看護管理者の意思決定プロセスの分析</td>
<td>勝原 裕美子</td>
<td></td>
<td>平成12年〜 平成13年</td>
</tr>
<tr>
<td>看護職が認知する看護実践におけるリスクの探求</td>
<td>増野 園恵</td>
<td></td>
<td>平成13年〜 平成14年</td>
</tr>
<tr>
<td>在宅療養における介護経験の意味に関する研究</td>
<td>大金ひろみ</td>
<td></td>
<td>平成13年〜 平成14年</td>
</tr>
<tr>
<td>青春期の患者が自己の健康管理を主体的に行うことに関連する要因</td>
<td>来生奈巳子</td>
<td></td>
<td>平成13年〜 平成14年</td>
</tr>
<tr>
<td>先天性疾患や小児期特有の疾患をお抱えた患者と健常な青年を比較して〜</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>疲性疼痛をもつ子どもの睡眠導入への援助方法の開発</td>
<td>松井 知美</td>
<td></td>
<td>平成13年〜 平成14年</td>
</tr>
<tr>
<td>代替的療法(Alternative Therapies)を用いて〜</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>周産期における食行動への看護支援</td>
<td>田村 康子</td>
<td></td>
<td>平成13年〜 平成14年</td>
</tr>
<tr>
<td>一体重自己管理を必要とする妊婦の胎児認知との関連から〜</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>安全な性行動のための妊娠期女性に対する介入プログラム開発に関する研究</td>
<td>工藤 美子</td>
<td></td>
<td>平成13年〜 平成14年</td>
</tr>
<tr>
<td>テーマ</td>
<td>研究代表者</td>
<td>共同研究者</td>
<td>期間</td>
</tr>
<tr>
<td>-------</td>
<td>------------</td>
<td>------------</td>
<td>------</td>
</tr>
<tr>
<td>災害時における看護支援ネットワークの構築に関する研究</td>
<td>南 裕子</td>
<td>中西 桂子（国際医療福祉大学）&lt;br&gt;高橋 章子（北海道医療大学）&lt;br&gt;新道 純子（倉敷赤十字病院）&lt;br&gt;中山 洋子（福岡県立医療大学）&lt;br&gt;山田 覚（高知女子大学）&lt;br&gt;原山 信子（鹿児島純心病院）&lt;br&gt;沼本 敬子（神戸市立病院）&lt;br&gt;片田 範子・山本あい子&lt;br&gt;井伊久美子・津田万寿美&lt;br&gt;増野 雅恵</td>
<td>平成12年〜平成14年</td>
</tr>
<tr>
<td>情報通信技術（IT）を活用した地域ケアシステムの開発&lt;br&gt;—「町の保健室」を拠点としたネットワーク化への取り組み—</td>
<td>南 裕子</td>
<td>太田 健一（武庫川女子大学）&lt;br&gt;片田 範子・近田 敬子&lt;br&gt;水谷 信子・山本あい子&lt;br&gt;森口 育子・野並 愛子&lt;br&gt;近澤 範子・内丸 敦子&lt;br&gt;宫島 朝子・井伊久美子&lt;br&gt;川口 孝泰・勝田 仁美&lt;br&gt;東 ますみ</td>
<td>平成13年〜平成15年</td>
</tr>
<tr>
<td>小児における癌性疼痛緩和のための非薬理学的援助方法の開発</td>
<td>片田 範子</td>
<td>勝田 仁美・松林 知美&lt;br&gt;竹本 忍・小沢 幸恵</td>
<td>平成14年〜平成15年</td>
</tr>
<tr>
<td>遠隔看護（telenursing）における健康状態のアセスメント手法の開発に関する研究&lt;br&gt;—カルテル分析によるバイカルサン情報の活用—</td>
<td>川口 孝泰</td>
<td>太田 健一（武庫川女子大学）&lt;br&gt;松浦 和喜・鶴山 治&lt;br&gt;東 ますみ・鰭島 輝美</td>
<td>平成13年〜平成15年</td>
</tr>
<tr>
<td>外来で化学療を受けるがん患者の副作用・症状マネジメントとサポートシステムの開発</td>
<td>内布 敦子</td>
<td>荒尾 晴恵・滋野みゆき&lt;br&gt;宇野さつき・大塚奈央子</td>
<td>平成14年〜平成15年</td>
</tr>
<tr>
<td>「女性の健康」に関する研究領域を明確にするための企画調整</td>
<td>山本あい子</td>
<td>森 恵美（千葉大学）&lt;br&gt;田代 純子（聖路加病院）&lt;br&gt;吉澤井子（長野県看護大学）</td>
<td>平成14年</td>
</tr>
<tr>
<td>阪神・淡路大震災による北淡町の地域社会と住民生活の変容&lt;br&gt;—八幡神社の祭礼参加者のケーススタディを中心として—</td>
<td>岡元 行雄</td>
<td>長屋 昭義・松浦 和幸&lt;br&gt;福留 将実（九州大学）</td>
<td>平成12年〜平成14年</td>
</tr>
<tr>
<td>テー マ</td>
<td>研究代表者</td>
<td>共 同 研 究 者</td>
<td>期 間</td>
</tr>
<tr>
<td>---------------------------------------------------------------</td>
<td>------------</td>
<td>---------------------</td>
<td>--------</td>
</tr>
<tr>
<td>グレリン受容体遺伝子転写調節機構を利用した代謝改善栄養素ないし薬剤の探索</td>
<td>加治 秀介</td>
<td>桐村 智子</td>
<td>平成14年～平成15年</td>
</tr>
<tr>
<td>糖尿病患者の外来看護に携わる看護婦支援システムの試み</td>
<td>野並 葉子</td>
<td>森 菊子・塩沢 真弓</td>
<td>平成12年～平成14年</td>
</tr>
<tr>
<td>一般大学と看護大学とのネットワークづくりを目指して</td>
<td></td>
<td>秋山 直子・近藤 千明</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>慢性疾患の児と家族のエンパワーメントを支援するコミュニティ・ケア・パッケージの開発</td>
<td>藤田 仁美</td>
<td>片田 範子</td>
<td>平成13年～平成15年</td>
</tr>
<tr>
<td>精神障害者のケアマネジメントに関する実証的研究</td>
<td>近澤 範子</td>
<td>玉木 敏子・山本 満子</td>
<td>平成13年～平成14年</td>
</tr>
<tr>
<td>一時職種間の連携およびスタッフ教育・サポート体制づくりと看護職の役割</td>
<td>筒井 長男</td>
<td>松永 由実・麻本 典子</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>総合的学びと教師の成長</td>
<td>藤原 頌</td>
<td>平成13年～平成14年</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>看護師トップマネージャーの倫理的思考決定モデルの構築</td>
<td>藤原裕美子</td>
<td>平成14年～平成15年</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>看護職が認識する看護実践におけるリスクの探求</td>
<td>増野 園恵</td>
<td>平成13年～平成14年</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>在宅療養における介護経験の意味に関する研究</td>
<td>大金ひろみ</td>
<td>平成13年～平成14年</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>癌性疼痛をもつ子どもの睡眠導入への支援方法の開発</td>
<td>松本 知美</td>
<td>平成13年～平成14年</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>周産期における食行動への看護支援</td>
<td>田村 康子</td>
<td>平成13年～平成14年</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>安全な性行動のための思春期女性に対する介入プログラム開発に関する研究</td>
<td>工藤 美子</td>
<td>平成13年～平成14年</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>テーマ</td>
<td>研究代表者</td>
<td>共同研究者</td>
<td>期間</td>
</tr>
<tr>
<td>--------</td>
<td>------------</td>
<td>------------</td>
<td>-------</td>
</tr>
<tr>
<td>看護学的視点による形態機能学教育の再構築</td>
<td>坂下 哲子</td>
<td>加治秀介・内布 敦子・桐村 智子</td>
<td>平成14年～平成17年</td>
</tr>
<tr>
<td>在宅高齢者の生活環境と生活リズムの関係性の分析</td>
<td>宮島 朝子</td>
<td>若村 智子・大島理恵子・堤田 佐知子・近田 敦子</td>
<td>平成14年～平成16年</td>
</tr>
<tr>
<td>在宅ターミナルケアに携わる訪問看護師のケア支援プログラムの開発</td>
<td>荒尾 晴恵</td>
<td>内布 敦子・緒野みゆき</td>
<td>平成14年～平成16年</td>
</tr>
<tr>
<td>睡眠・覚醒リズム解析からみた療養環境の中の明るさに関する研究</td>
<td>若村 智子</td>
<td>宮島 朝子・大金ひろみ・大島理恵子・堤田 佐知子・近田 敦子</td>
<td>平成14年～平成16年</td>
</tr>
<tr>
<td>テーマ</td>
<td>助成機関</td>
<td>研究代表者</td>
<td>共同研究者</td>
</tr>
<tr>
<td>-----------------------------------------------------------------------</td>
<td>----------------------------------------------</td>
<td>----------------</td>
<td>-------------</td>
</tr>
<tr>
<td>カルシウムと痴呆、骨粗しょう症との関係について</td>
<td>日水製薬株式会社</td>
<td>吉本素生</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>業務体制の変更に向けた試行及び効果測定の策定</td>
<td>橿原市</td>
<td>上原和子</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>仮設住宅における支援システムに関する研究</td>
<td>神戸市</td>
<td>井伊久美子</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>災害関連研究</td>
<td>日本看護協会</td>
<td>南裕子</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>災害時看護支援システムの分析と開発</td>
<td>阪ひょうご科学技術創造協会</td>
<td>上原和子</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>疳性老人のQOLを高めるケア技術の開発</td>
<td>全労災</td>
<td>水谷信子</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>災害関連研究</td>
<td>明石ロータリークラブ</td>
<td>片田範子</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>老人保健施設で働く看護職と介護職の機能の独自性と協同の実態</td>
<td>阪急川医学研究財団</td>
<td>竹崎久美子</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>阪神・淡路大震災の被災地における母子の心身の健康及び母子の取り組む環境に関する研究</td>
<td>兵庫県地域政策研究機構</td>
<td>片田範子</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>阪神・淡路大震災被災者のメンタルケアに関する追跡研究</td>
<td>大同生命厚生事業団</td>
<td>溝口純二</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>災害関連研究</td>
<td>阪急川医学研究財団</td>
<td>南裕子</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
### 平成8年度

<table>
<thead>
<tr>
<th>テーマ</th>
<th>助成機関</th>
<th>研究代表者</th>
<th>共同研究者</th>
<th>期間</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>中高年者の歩行速度の個人差と各種筋群の筋力持久力との関係</td>
<td>岡崎市スポーツ体力研究財団</td>
<td>柴田 真志</td>
<td>高石 鉄雄（名古屋市立大学）</td>
<td>平成8年</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 平成10年度

<table>
<thead>
<tr>
<th>テーマ</th>
<th>助成機関</th>
<th>研究代表者</th>
<th>共同研究者</th>
<th>期間</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>地域で生活する初発後10年未満の精神障害者のニーズに対するケア・マネジメントの実態</td>
<td>病院療科学研究所</td>
<td>宇佐美しおり</td>
<td>竹崎久美子・塩崎優子（局限于藤田香里）</td>
<td>平成10年</td>
</tr>
<tr>
<td>病床症高齢者のQOLを高めるケア技術の確立とその効果測定 -ケア効果測定のための用具開発-</td>
<td>市管医療医療研究財団</td>
<td>水谷 信子</td>
<td>佐野妙子</td>
<td>平成10年</td>
</tr>
<tr>
<td>超音波による睡眠時呼吸測定の評価</td>
<td>創造科学技術協会</td>
<td>増田 園子</td>
<td>木村美里</td>
<td>平成10年</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 平成11年度

<table>
<thead>
<tr>
<th>テーマ</th>
<th>助成機関</th>
<th>研究代表者</th>
<th>共同研究者</th>
<th>期間</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>精神障害者の再発・再入院を抑制する急性期治療病棟における看護ケア技術</td>
<td>岡崎市看護教育進行財団</td>
<td>宇佐美しおり</td>
<td>高田 克世（光愛病院）</td>
<td>平成11年</td>
</tr>
</tbody>
</table>
研究助成
平成12年度

<table>
<thead>
<tr>
<th>テーマ</th>
<th>助成機関</th>
<th>研究代表者</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>在宅療養者の一日の過ごし方と睡眠覚醒リズムとの関わり.健康高齢者との過ごし方の比較を通じて</td>
<td>日本科学協会</td>
<td>助手／橋本加奈子</td>
</tr>
<tr>
<td>終末期がん患者の症状マネジメントに関する研究</td>
<td>日本医学療養研究財団</td>
<td>講師／荒尾晴恵</td>
</tr>
</tbody>
</table>

平成13年度

<table>
<thead>
<tr>
<th>テーマ</th>
<th>助成機関</th>
<th>研究代表者</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>運動習慣が子供の心臓自律神経活動動態および体調に与える影響</td>
<td>石本記念デサントスポーツ科学振興財団</td>
<td>助教授／柴田真志</td>
</tr>
<tr>
<td>在宅ホスピスケア支援のために必要なデイケアに関する研究</td>
<td>日本訪問看護振興財団</td>
<td>講師／宮尾晴恵</td>
</tr>
<tr>
<td>発展途上国の看護職者に対するプライマリヘルス・ケア（PIIC）研修の評価</td>
<td>兵庫県ヒューマンケア研究機構</td>
<td>教授／森口育子</td>
</tr>
<tr>
<td>情報通信技術（ＩＴ）による双方向のコミュニケーションを活用した産婦人科支援システムの開発</td>
<td>兵庫県ヒューマンケア研究機構</td>
<td>教授／山本あい子</td>
</tr>
<tr>
<td>精神障害者のケアマネジメントに関する研究 -地域生活支援センター利用者ニーズおよび援助活動の実態-</td>
<td>兵庫県ヒューマンケア研究機構</td>
<td>助教授／近澤範子</td>
</tr>
</tbody>
</table>

平成14年度

<table>
<thead>
<tr>
<th>テーマ</th>
<th>助成機関</th>
<th>研究代表者</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>糖尿病患者へのヒューマン・ケアリングアプリケーションの開発</td>
<td>兵庫県ヒューマンケア研究機構</td>
<td>教授／野並葉子</td>
</tr>
<tr>
<td>高齢者の活動状況と睡眠覚醒リズムとの関係 -「まちの保健室」来談者の実態分析-</td>
<td>兵庫県ヒューマンケア研究機構</td>
<td>助教授／宮島朝子</td>
</tr>
</tbody>
</table>
### 受託研究
#### 平成8年度
<table>
<thead>
<tr>
<th>テーマ</th>
<th>委託機関</th>
<th>研究代表者</th>
<th>共同研究者</th>
<th>期間</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>カルシウムと頻度、骨粗鬆症との関係について</td>
<td>日水製薬株</td>
<td>吉本 祥生</td>
<td></td>
<td>平成8年</td>
</tr>
</tbody>
</table>

#### 平成9年度
<table>
<thead>
<tr>
<th>テーマ</th>
<th>委託機関</th>
<th>研究代表者</th>
<th>共同研究者</th>
<th>期間</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>補腎薬とカルシウムの併用と骨粗鬆症との関係について</td>
<td>日水製薬株</td>
<td>吉本 祥生</td>
<td></td>
<td>平成9年</td>
</tr>
</tbody>
</table>

#### 平成10年度
<table>
<thead>
<tr>
<th>テーマ</th>
<th>委託機関</th>
<th>研究代表者</th>
<th>共同研究者</th>
<th>期間</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>補腎薬とカルシウムの併用と骨粗鬆症との関係について</td>
<td>日水製薬株</td>
<td>吉本 祥生</td>
<td></td>
<td>平成10年</td>
</tr>
<tr>
<td>梅菌予防に関する基礎的研究</td>
<td>帝国薬器製薬株</td>
<td>川口 孝泰</td>
<td></td>
<td>平成10年</td>
</tr>
</tbody>
</table>

#### 平成11年度
<table>
<thead>
<tr>
<th>テーマ</th>
<th>委託機関</th>
<th>研究代表者</th>
<th>共同研究者</th>
<th>期間</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>梅菌予防に関する基礎的研究</td>
<td>帝国薬器製薬株</td>
<td>川口 孝泰</td>
<td></td>
<td>平成11年</td>
</tr>
</tbody>
</table>

#### 平成14年度
<table>
<thead>
<tr>
<th>テーマ</th>
<th>委託機関</th>
<th>研究代表者</th>
<th>共同研究者</th>
<th>期間</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>小児の感染防止に向けた有用な石鹸手洗い方法の基礎的研究</td>
<td>ピー・アンド・ジー・ノースイースト・アジア・ピーティーイー・リミテッド</td>
<td>鶴岡 和浩</td>
<td></td>
<td>平成14年～平成15年</td>
</tr>
</tbody>
</table>
# 学内行事

## 年間スケジュール

<table>
<thead>
<tr>
<th>月</th>
<th>4月</th>
<th>5月</th>
<th>6月</th>
<th>7月</th>
<th>8月</th>
<th>9月</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>入学式</td>
<td>定期健康診断</td>
<td>体育祭</td>
<td>HBe抗原抗体検査 2回目</td>
<td>夏季休業</td>
<td>前期試験（1回生）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>新生歓迎パーティー</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>学期休業</td>
<td>開学記念日</td>
<td>体育祭</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>前期休業、集中講義（2回生を含む）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>前期教務事項</td>
</tr>
</tbody>
</table>

- 夏季課外活動
- 学外オリエンテーション
- ポスターセッション
- 体育祭
<table>
<thead>
<tr>
<th>回</th>
<th>テーマ</th>
<th>期間</th>
<th>講師</th>
<th>受講者数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>第1回</td>
<td>看護実践とエキスパートネス</td>
<td>1993.12.17-18</td>
<td>Patricia Benner (カリフォルニア大学サンフランシスコ校教授)南 裕子 (兵庫県立看護大学長)</td>
<td>400名</td>
</tr>
<tr>
<td>第2回</td>
<td>危機管理 一部：緊急時に対する看護としての備え</td>
<td>1996.1.20-21</td>
<td>Hanna Admi (イスラエル・テルアビブ大学看護学部ラバム病院看護部長)高谷嘉枝 (神戸大学附属病院看護部長)井伊久美子 (兵庫県立看護大学長)</td>
<td>338名</td>
</tr>
<tr>
<td>第3回</td>
<td>看護のエンパワーメント</td>
<td>1996.9.21-22</td>
<td>Patricia Underwood (兵庫県立看護大学教授)南 裕子 (兵庫県立看護大学長)</td>
<td>384名</td>
</tr>
<tr>
<td>第4回</td>
<td>看護実践における倫理的課題</td>
<td>1997.9.18-19</td>
<td>Anne J. Davis (長野県看護大学教授)福間誠之 (明石市立市民病院院長)片田範 (兵庫県立看護大学教授)</td>
<td>268名</td>
</tr>
<tr>
<td>第5回</td>
<td>21世紀に向けた看護の国際協力</td>
<td>1998.9.25-26</td>
<td>Sally A. Bisch (WHO南東アジア地域本部女児及び健康課地域顧問)石川信克 (福岡県立大学看護学部准教授)森口育子 (兵庫県立看護大学教授)</td>
<td>204名</td>
</tr>
<tr>
<td>第6回</td>
<td>症状マネジメント：21世紀における患者と看護者の挑戦</td>
<td>1999.9.25-26</td>
<td>Patricia J. Mulhern (ワシントン大学、ノースウエスト病院看護サービス副所長)Patricia J. Lanson (兵庫県立看護大学教授)</td>
<td>364名</td>
</tr>
<tr>
<td>第7回</td>
<td>病む人と対する人</td>
<td>2000.9.23-24</td>
<td>Dieter Janz (元ベルリン自由大学教授)池川清子 (日本赤十字見護大学教授)石井誠士 (兵庫県立看護大学教授)</td>
<td>371名</td>
</tr>
<tr>
<td>第8回</td>
<td>看護における東洋的「知」</td>
<td>2001.9.22-23</td>
<td>崇 男照 (ソウル女子看護大学教授)石橋晃 (北里大学名誉教授)千浦淑子 (高知医科大学医学部助教授)長瀬千秋 (兵庫県立東洋医学研究所副所長)陳錦秀 (中国福建中医学附属人民医院看護部長)</td>
<td>134名</td>
</tr>
<tr>
<td>第9回</td>
<td>実践における看護の新しい可能性—医療機関と家庭の場においてー</td>
<td>2002.9.13-14</td>
<td>Lene Hollander (スカンティナヴァイアンホームケアコンサルタント社長)南 裕子 (兵庫県立看護大学長)</td>
<td>198名</td>
</tr>
<tr>
<td>第10回</td>
<td>はじけたば看護の専門性—専門看護師の挑戦—</td>
<td>2003.9.12-13</td>
<td>Theresa Harvath (オレゴンヘルスサイエンス大学准教授)南 裕子 (兵庫県立看護大学長)</td>
<td>394名</td>
</tr>
</tbody>
</table>

場所：兵庫県立看護大学
### 地域交流

#### 公開講座（地域交流委員会）

<table>
<thead>
<tr>
<th>開催年度</th>
<th>テーマ</th>
<th>講師</th>
<th>受講者数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>平成5年度</td>
<td>「変わりゆく社会と健康」&lt;br&gt;—はじめまして、看護大学です—</td>
<td>吉本 祥生・近田 敬子・石井 诚士&lt;br&gt;長屋 信子・岡元 行雄・片田 祐子</td>
<td>157名</td>
</tr>
<tr>
<td>平成6年度</td>
<td>「変わりゆく社会と健康」&lt;br&gt;—くらしの問題／ここらの問題—</td>
<td>北島 淵里・柳吉 桂子・竹崎久美子&lt;br&gt;溝口 純二・山下 貴宏・井伊久美子</td>
<td>83名</td>
</tr>
<tr>
<td>平成7年度</td>
<td>「変わりゆく社会と健康」&lt;br&gt;—生活と体の健康—</td>
<td>廣末 ゆか・足利 幸乃・柴田 真志&lt;br&gt;内布 敦子・根本 清次・鶴岡 和浩</td>
<td>50名</td>
</tr>
<tr>
<td>平成8年度</td>
<td>「変わりゆく社会と健康」&lt;br&gt;—豊かな生活・医療情報の手厚い活用法—</td>
<td>國崎 稔・水谷 信子・野並 蕾子&lt;br&gt;松浦 和幸・上泉 和子・川口 孝泰</td>
<td>71名</td>
</tr>
<tr>
<td>平成9年度</td>
<td>「変わりゆく社会と健康」&lt;br&gt;—女性の健康と社会—</td>
<td>藤原 健・福留 留美・吉本 祥生&lt;br&gt;岡元 行雄・山本あい子・森口 育子</td>
<td>54名</td>
</tr>
<tr>
<td>平成10年度</td>
<td>「変わりゆく社会と健康」&lt;br&gt;—今、ケアを考える—</td>
<td>櫻田 仁美・近澤 範子・鶴山 治&lt;br&gt;宇佐美しおり・穴吹 章子・南 裕子</td>
<td>149名</td>
</tr>
<tr>
<td>平成11年度</td>
<td>「変わりゆく社会と健康」&lt;br&gt;—21世紀に備える—</td>
<td>柴田 真志・長田 浩・鶴岡 和浩&lt;br&gt;宮島 朝子・増田 園子&lt;br&gt;アンダーワッドパトリシア</td>
<td>56名</td>
</tr>
<tr>
<td>平成12年度</td>
<td>「高齢社会、あなたはどう考えますか」&lt;br&gt;—新世紀をしなやかに生きるために—</td>
<td>工藤 美子・川口 孝泰・吉本 祥生&lt;br&gt;藤原裕美子・竹崎久美子・近田 敬子</td>
<td>54名</td>
</tr>
<tr>
<td>平成13年度</td>
<td>「ライフスタイルの変化と健康づくり」&lt;br&gt;—新世紀をしなやかに生きるために—</td>
<td>野並 萩子・荒尾 晴恵・福留 留美&lt;br&gt;長屋 昭義・加治 秀介・松浦 和幸</td>
<td>54名</td>
</tr>
<tr>
<td>平成15年度</td>
<td>「看護最前線」&lt;br&gt;—過去・現在・未来—</td>
<td>新井香奈子・鶴山 治・森口 育子&lt;br&gt;片田 範子・内布 敦子・東 ますみ</td>
<td>97名</td>
</tr>
</tbody>
</table>

場所：兵庫県立看護大学
### 県立大学特別講座（地域交流委員会）

<table>
<thead>
<tr>
<th>開催年度</th>
<th>テーマ</th>
<th>講師</th>
<th>受講者数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>平成13年度</td>
<td>「ライフスタイルの変化と健康づくり」&lt;br&gt;—新世紀をしなやかに生きるために—</td>
<td>南 裕子・野並 友子・荒尾 晴恵&lt;br&gt;長屋 昭義・加治 秀介・山下 豊宏</td>
<td>40名</td>
</tr>
</tbody>
</table>

場所：丹波の森公園

### ひょうごオープンカレッジ（地域交流委員会、兵庫県生活創造課）

<table>
<thead>
<tr>
<th>開催年度</th>
<th>テーマ</th>
<th>講師</th>
<th>受講者数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>平成14年度</td>
<td>「健康生活に役立つ知識と技術を身につける」</td>
<td>南 裕子・長屋 昭義・柴田 眞志&lt;br&gt;加治 秀介・塚下 玲子・桐村 智子&lt;br&gt;鶴山 治・吉田 明子・近澤 範子&lt;br&gt;玉木 敦子・近田 敏子・大島理恵子&lt;br&gt;内布 敦子・荒尾 晴恵</td>
<td>35名</td>
</tr>
</tbody>
</table>

場所：兵庫県立着護大学
附属図書館

附属図書館では、蔵書数約54,000冊と雑誌456誌（和雑誌372誌、洋雑誌84誌）の他、紀要、新聞、視覚資料を所蔵し、図書館資料の閲覧、貸出、文献検索、レファレンス・サービス（文献の探し方や、文献に関する相談）を行っています。

(1) 利用について
① 開館時間 9:00〜21:00（大学院生のみ22:00まで、夏季等の学生休業期間中17:00まで）
② 休館日 土曜日、日曜日、国民の祝日、年末年始（臨時休館はその都度掲示）
③ 利用上の注意
  • 館内では静悄悄にしてください。
  • 館内での飲食はできません。
  • 図書は丁寧に取り扱い、館内閲覧後は元の所へ返してください。
④ 入館・退館
  2Fからブックディテクション・システム（無断持ち出し防止装置）を通って、入館してください。正規の貸し出し手続きをしないで図書を持ち出そうとするとき、退館ゲートで警告音が生じます。

(2) 図書館資料の利用
① 館内閲覧
  • 館内の図書館資料は、自由に閲覧できます。
  • 視聴覚資料（ビデオ・CD・カセットテープ）は、受付カウンターで、ヘッドホーンを受け取り利用してください。席が空いている場合は、持ち込みの資料も視聴できます。
② 館外貸出
  • 貸し出し冊数及び期間

<table>
<thead>
<tr>
<th>資料区分</th>
<th>貸出冊(本)数</th>
<th>貸出期間</th>
<th>貸出期間の更新</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>学部学生 / 院生／教職員</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>図書</td>
<td>3冊</td>
<td>2週間以内</td>
<td>可(1回のみ)</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌</td>
<td>3冊</td>
<td>3日間以内</td>
<td>不可</td>
</tr>
</tbody>
</table>

• 貸出手続
  資料を図書館カウンターでカウンターに提出してください。通常の貸出と学内で利用するための一時貸出ができます。

通常の貸出は、自動図書貸出・返却装置（ABC）を使えば自分で手続きができます。新着雑誌、新聞、参考図書、二次資料、その他禁帯出の資料は貸出できません。

• 返却
  期限内に受付カウンターに返却してください。ABCを使えば自分で手続きができます。閉館時は、図書館入り口左側のブックポストへ入れてください。

• 予約
  借りたい資料が貸出中の場合は予約することができます。

• 利用紹介
  貸出している図書の書名や冊数、返却日の確認ができます。

(3) 相互利用
  探している資料が本学にない場合は、資料の複写や貸出を他の機関に依頼したり、他の図書館を利用してすることができます。

(4) 文献検索
  医学中央雑誌、CINAHL（看護学文献）、PsycINFO（心理学文献）、NACSIS-IR（国立情報学研究所の文献検索システム）等のオンライン文献検索ができます。

(5) 図書館ツアー
  文献、図書の探し方等を体験する図書館ツアー・サービスを実施しています。
### 1. 図書蔵書数

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>和 書</th>
<th>洋 書</th>
<th>合 計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>0 - 総計</td>
<td>1,554</td>
<td>114</td>
<td>1,668</td>
</tr>
<tr>
<td>1 - 哲学</td>
<td>2,222</td>
<td>755</td>
<td>2,977</td>
</tr>
<tr>
<td>2 - 歴史</td>
<td>971</td>
<td>82</td>
<td>1,053</td>
</tr>
<tr>
<td>3 - 社会科学</td>
<td>7,313</td>
<td>1,519</td>
<td>8,832</td>
</tr>
<tr>
<td>4 - 自然科学</td>
<td>8,481</td>
<td>2,900</td>
<td>11,381</td>
</tr>
<tr>
<td>N - 看護学分類</td>
<td>8,711</td>
<td>3,725</td>
<td>12,436</td>
</tr>
<tr>
<td>5 - 技術</td>
<td>990</td>
<td>82</td>
<td>1,072</td>
</tr>
<tr>
<td>6 - 産業</td>
<td>222</td>
<td>5</td>
<td>227</td>
</tr>
<tr>
<td>7 - 芸術</td>
<td>1,212</td>
<td>134</td>
<td>1,346</td>
</tr>
<tr>
<td>8 - 言語</td>
<td>1,710</td>
<td>891</td>
<td>2,601</td>
</tr>
<tr>
<td>9 - 文学</td>
<td>3,143</td>
<td>550</td>
<td>3,693</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>3,893</td>
<td>2,249</td>
<td>6,142</td>
</tr>
<tr>
<td>合 計</td>
<td>40,922</td>
<td>13,006</td>
<td>53,928</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### ●看護学関係図書

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>和 書</th>
<th>洋 書</th>
<th>合 計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>基 礎</td>
<td>2,272</td>
<td>373</td>
<td>2,645</td>
</tr>
<tr>
<td>理 論</td>
<td>526</td>
<td>518</td>
<td>1,044</td>
</tr>
<tr>
<td>技 術</td>
<td>352</td>
<td>121</td>
<td>473</td>
</tr>
<tr>
<td>過 程</td>
<td>140</td>
<td>142</td>
<td>282</td>
</tr>
<tr>
<td>管 理</td>
<td>266</td>
<td>265</td>
<td>531</td>
</tr>
<tr>
<td>教 育</td>
<td>181</td>
<td>67</td>
<td>248</td>
</tr>
<tr>
<td>研 究</td>
<td>135</td>
<td>366</td>
<td>501</td>
</tr>
<tr>
<td>制 度</td>
<td>149</td>
<td>24</td>
<td>173</td>
</tr>
<tr>
<td>母 性</td>
<td>425</td>
<td>358</td>
<td>783</td>
</tr>
<tr>
<td>小 児</td>
<td>653</td>
<td>222</td>
<td>875</td>
</tr>
<tr>
<td>成 人</td>
<td>529</td>
<td>299</td>
<td>828</td>
</tr>
<tr>
<td>老 人</td>
<td>1,005</td>
<td>273</td>
<td>1,278</td>
</tr>
<tr>
<td>精 神</td>
<td>628</td>
<td>254</td>
<td>882</td>
</tr>
<tr>
<td>地 域</td>
<td>931</td>
<td>313</td>
<td>1,244</td>
</tr>
<tr>
<td>状 態 別</td>
<td>519</td>
<td>130</td>
<td>649</td>
</tr>
<tr>
<td>合 計</td>
<td>8,711</td>
<td>3,725</td>
<td>12,436</td>
</tr>
</tbody>
</table>
2. 図書館蔵書增加推移

3. 開館日数・入館者数

<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>開館日数（時間延長日数）</th>
<th>総入館者数</th>
<th>開館時間延長時入館者数（内数）</th>
<th>一般公開利用者数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>5年度</td>
<td>223 (0)</td>
<td>11,931</td>
<td></td>
<td>145</td>
</tr>
<tr>
<td>6年度</td>
<td>232 (123)</td>
<td>21,660</td>
<td>1,853</td>
<td>601</td>
</tr>
<tr>
<td>7年度</td>
<td>238 (168)</td>
<td>36,940</td>
<td>4,513</td>
<td>1,313</td>
</tr>
<tr>
<td>8年度</td>
<td>238 (166)</td>
<td>40,533</td>
<td>5,517</td>
<td>821</td>
</tr>
<tr>
<td>9年度</td>
<td>239 (167)</td>
<td>47,082</td>
<td>5,481</td>
<td>1,069</td>
</tr>
<tr>
<td>10年度</td>
<td>226 (166)</td>
<td>52,833</td>
<td>5,380</td>
<td>1,239</td>
</tr>
<tr>
<td>11年度</td>
<td>233 (162)</td>
<td>52,173</td>
<td>6,485</td>
<td>1,606</td>
</tr>
<tr>
<td>12年度</td>
<td>243 (163)</td>
<td>42,432</td>
<td>5,471</td>
<td>2,037</td>
</tr>
<tr>
<td>13年度</td>
<td>237 (161)</td>
<td>57,388</td>
<td>10,959</td>
<td>2,413</td>
</tr>
<tr>
<td>14年度</td>
<td>241 (168)</td>
<td>63,924</td>
<td>13,797</td>
<td>2,507</td>
</tr>
</tbody>
</table>

4. 貸出冊数・その他資料利用状況

<table>
<thead>
<tr>
<th>年度</th>
<th>学生</th>
<th>院生</th>
<th>教職員</th>
<th>特別貸出</th>
<th>総数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>5年度</td>
<td>1,722</td>
<td></td>
<td>804</td>
<td>2,168</td>
<td>4,694</td>
</tr>
<tr>
<td>6年度</td>
<td>4,592</td>
<td></td>
<td>1,590</td>
<td>1,531</td>
<td>7,713</td>
</tr>
<tr>
<td>7年度</td>
<td>9,395</td>
<td></td>
<td>1,591</td>
<td>710</td>
<td>11,696</td>
</tr>
<tr>
<td>8年度</td>
<td>11,445</td>
<td></td>
<td>1,730</td>
<td>969</td>
<td>14,144</td>
</tr>
<tr>
<td>9年度</td>
<td>10,503</td>
<td>1,958</td>
<td>1,885</td>
<td>1,663</td>
<td>15,409</td>
</tr>
<tr>
<td>10年度</td>
<td>10,937</td>
<td>3,452</td>
<td>2,035</td>
<td>1,674</td>
<td>18,098</td>
</tr>
<tr>
<td>11年度</td>
<td>8,882</td>
<td>4,858</td>
<td>1,812</td>
<td>2,581</td>
<td>17,933</td>
</tr>
<tr>
<td>12年度</td>
<td>10,046</td>
<td>6,081</td>
<td>2,861</td>
<td>1,413</td>
<td>20,401</td>
</tr>
<tr>
<td>13年度</td>
<td>13,405</td>
<td>8,609</td>
<td>5,020</td>
<td>1,787</td>
<td>28,821</td>
</tr>
<tr>
<td>14年度</td>
<td>14,126</td>
<td>8,854</td>
<td>3,516</td>
<td>1,658</td>
<td>28,154</td>
</tr>
</tbody>
</table>
センターの役割・機能

国際地域看護

本学では、グローバルな視野に立った教育研究を目指しています。国際地域看護では、国際的に地域保健・地域看護の共通基盤であるWHOの提唱するプライマリ・ヘルスケアの考え方と現在世界最高の健康水準に達した日本の実践を生かして、アジア地域の看護職者や教育研究者の研修の受け入れや共同研究を行います。将来的には、本センターをベースにアジア地域の看護職が連携し情報交換や共同研究をして、アジアの特色を生かした看護の構築を目指しておりたいと考えています。また、国内の国際協力に関心のある看護職者には、情報提供や研修、海外の看護職者との交流や学習の場も考えています。

災害看護

災害は、いつでもどこでも、そして誰にでも起こります。しかし発生予測のたたえにくさから、災害への備えは整いにくいと言われています。「災害看護」では、災害看護に関連した知識を蓄積し、災害時に機能する災害支援ネットワークの構築を試みています。また、災害看護教育の内容や体系を検討しています。これらの活動を通して、災害看護学に関連した研究を一貫して行い、災害看護学の知識体系の拡充を図ることを目指しています。

まちの保健室

兵庫県看護協会が、県内に設置した「まちの保健室」では、看護職者が、皆様の不安や悩みにじっくりと耳を傾けたり、気軽に健康相談に応じるなどの活動を通じて、心身の健康状態の維持・向上を図ります。また、閉じこもりがちな高齢者の方に対して訪問活動を行い、自立への支援を行います。

センターでは、このような活動を行う看護職者の研修を通じて、相談に応じるなどの支援を行うとともに、活動状況の評価・検証を行います。

遠隔看護

家庭にいながら自己の健康管理ができるように、インターネットを通じて、「まちの保健室」の看護職者が支援を行います。支援の具体的な内容は、看護観察情報として簡便な測定機器を使用して得た生理的データ、パソコンに設置されたカメラからの映像や音声によるデータを分析して、皆様一人一人に応じたケアを提供します。また、文書メールによる相談も行います。

センターでは、皆様から寄せられてきたデータを分析・処理し「まちの保健室」に送信するとともに、看護職者に対する専門的支援を行います。また、インターネットを通じて、より簡便かつ正確に健康情報が得られるようなシステムおよび機器の開発を行います。
卒業生の動向

卒業生(平成14年度)

主な就職先

■病院
神戸大学医学部附属病院
兵庫県立尼崎病院
兵庫県立こども病院
兵庫県立脳循環器センター
兵庫県立成人病センター
兵庫県立淡路病院
兵庫県立坪口病院
兵庫県立総合リハビリテーションセンター中央病院
神戸市立病院
加古川市民病院
三菱神戸病院
財西神戸医療センター
公立学校共済組合近畿中央病院
関西労災病院
鉄道記念病院
西宮協立リハビリテーション病院
東神戸病院
兵庫医科大学病院
国立国際医療センター
国立がんセンター中央病院
神奈川県立病院
大阪市立病院
大和高田市立病院
大阪市立大学医学部附属病院
京都府立医科大学病院

東京武蔵野病院
虎の門病院
澀川キリスト教病院
医療法人光愛会光愛病院
大関会ポルネズ記念病院
洛和会音羽病院
総合病院社会保険徳山中央病院
昭和大学藤が丘リハビリテーション病院
藤田保健衛生大学病院
福岡大学病院

■保健所等
加西市、茨木市、枚方市、草津市
近江八幡市、茨城県牛久市

主な進学先

兵庫県立看護大学大学院
京都大学大学院人間環境学研究科
大阪府立看護大学大学院
京都大学医療技術短期大学部専攻科
信州大学医療技術短期大学部専攻科
奈良県立医科大学看護短期大学部専攻科
関西大学養護教育特別別科
修了生の進路（平成14年度修了生）

修了生 25名

看護師 12名
- 県内 4名
  - 加古川市民病院
  - 兵庫医科大学病院
  - 新日鉄広畑病院
  - ライフ明海 明海病院
- 県外 8名
  - 燕市立病院
  - 兵庫県立広域病院
  - 順天堂大学医学部附属順天堂病院
  - 大阪医科大学病院
  - 浜の町病院 (国共連)
  - 広島県立病院
  - 医療法人洋和会池田病院
  - 石巻赤十字病院

助産師 1名
- 国立循環器病センター

大学及び
専門学校教員
10名
- 県内 5名
  - 兵庫県立看護大学
  - 神戸市立看護大学
- 県外 5名
  - 神奈川県立保健福祉大学
  - 名古屋市立大学看護学部
  - 岐阜県立大学
  - 九州大学看護学部
  - 国立京都病院附属看護助産学校

研究職 1名
- 兵庫県立看護協会

その他 1名

博士後期課程修了生

大学教員 2名
- 県内 兵庫県立看護大学
- 県外 福岡県立大学看護学部
第5章

10年のふりかえりと
統合に向けての課題
喜び

哲学系 石井 誠士

兵庫県に日本に初めて公立の看護大学ができることになり、私がそこに赴くことを決めたとき、恥ずかしいことか、実は私は、数々の期待が2つあった。一つは、学生時代によく読んだ柳原の龍珠禅師の寺の近くに行けること、もう一つは、通勤の電車で甲子園のそばを往復することであった。

内から添々とこみ上げてくるごく自然な喜びがある。愛する人と再会できたとき、今まで解らなかったことが急にひらめき見たとき、あるいは、差しきれない病気を癒えたときなど。これは埋没ではなく、そういったとき、私はただにうれしくなる。

龍神の龍門寺には、卒業論文の学生と一緒に訪れたことがある。大きな修行の集いには全国から5万人の人が来たと言われる寺は、300年前のことで。質素でとっさしくとしたたずまいをしていて。予期せず、関山堂で禅師が自別のお姿にまじえて、笑いとともに静かな喜びにうせ震えた。

18年待ったタイガース優勝の喜びに、郷土性もあるが、それだけでもない。野球というスポーツの特徴もあるが、プロリーグでは決してこんなことは起こらない。ベートーヴェンの第9交響曲は、人類の理念を表現した最高傑作と見なされることのある曲だが、さすがに、あの歓喜の大合唱で祝うような阪神ファンはいないだろう。優勝が決まった瞬間、「ほぐが阪神ファンでなかったら、こんなに苦しまずてすなんだのに」と泣いている青年がいた。阪神が負けて悲しみ、勝ってもまた悲しむ彼のような人こそ、道頓堀川に飛び込んだ人たちよりも、ほんとうの阪神ファンの気持ちを表している。樽のディオゲネスのような者かもしれないが、私自身は、翌日、明石から三ノ宮までランニングした。

明石第九合唱団と
看護大学コーラス部

看護病態学 亀岡 和浩

平成7年の阪神淡路大震災の際、本学一丸となって被災地の方々への支援活動については周知のことであるが、当時、それは他と異なる大学と地域の方々とのかかわりがあったことを知る人はそう多くないかもしれません。本当に忘れてられないことのエピソードを、この機会に記録にしておきたいと思う。

1983年に結成された明石の第九合唱団は、兵庫県のバックアップを受けながら、毎年秋に明石市立市民会館でオーケストラの下、ベートーヴェンの第九交響曲を演奏しており、市民主に明石市のかつまた一団として1989年から参加してきた私の自身の年末恒例行事として定着していたが、震災で市民会館のドアの脇に損壊し、さらに震災による市の財政窮迫を加えて、その年の演奏会開催をはても考えられないような状況であった。春が訪れ、少しずつ復興に向かって人々の気持ちも前向きになり始め、町で、団員の中から「このような時だからこそ、なんとか歌いたい」という声が高まってきたが、実際には練習場の確保さえ困難な状況だった。

当時、三年生だった一期生の大塚さん（現、本学助手）と飛田さん（現、吹田市保健センター保健師）もこの合唱団の部員だったが、「みんなで第九を歌いましょう」という二人の呼びかけに共感して集まった30人の学生と共に大学コーラス部を設立、合唱指導に第九合唱団の合唱指導をしておられた坂下先生を迎え、コーラス部としての練習をこなしながら、第九も練習することになった。と、同時に第九合唱団の一般団員を募集したところ、明石市民を中心に130名もの人が集まり、6月5日に本学講堂で「新生」明石第九合唱団の結団式が行われた。それから週一回、コーラス部員達と合同で練習を重ね、例年より2ヶ月早く10月23日に市民会館の玄関ロビーで演奏会が開かれた。ステージの前半は看護大学コーラス部の初舞台、そして後半が二台のピアノ伴奏による合唱主体の第九演奏であった。この演奏会は話
題となり、神戸新聞、県の広報誌「ニューヒューゴ」、明石ケーブルテレビなどでも取り上げられた。

なのにぶんロビーという限られたスペースのため、多くのお客様に聞いていたかどうかにはいかなかったことは残念であったが、手作りの感動的な演奏会であったと思う。どんな状況下でも歌うことを持続されなかった皆様に、感動の拍手を送ります、「苦悩を乗り越え喜びに至る、というベートーヴェンの言葉そのまま演奏会だった」などの感想が寄せられ、本学の学生達と明石の人々が分かち合った感動とふれあいが、今でも忘れられない思い出となっている。

懷かしき「旅立ちの会」

看護病院学 山本 恭子

平成5年4月1日、この日、私は初めて兵庫県立看護大学のけやき並木をくくりました。それから10年が過ぎ、いつの間にか学習当時の人が少なくなりました。大学に来て最初の大事な仕事は、教職員あわせて一斉清掃でした。各自持ち場が決められていおり、ほこりだらけの学舎をみんなで引きこけて掃除したのを懐かしく思います。掴めない手つきの方々も多くそれがまた新鮮でした。それとも、しっかりしたの壁面にすれると服に白い粉が付いてしまうのです。今はそのようなこともなく、この建物は使いやすいほど良くなるというのはこのことだったのでしょうか！それから、楽しかったのが、掃除の次に開かれた「旅立ちの会」です。カフェテリアで自分たちで準備をしてパーティーを開いたのです。私は京都から来ましたので、魚の塩のさし、明石焼きなども珍しく感じられました。また、毎のあらび焼きを作って下さった先生、人影が丸ごと入っているダイナミックな場で、ブッコリーを生で食べると美味しいと教えて下さった先生、珍しいワインやチーズ、等々…私たちはナッペを作りました。会場の準備なども含めてすべてのものに作者の個性が出ておりとてもステキなパーティーでした。ほとんどの人が初

看護ケアリングの探求

成人看護学 野並 葉子

兵庫県立看護大学第一回国際セミナー‘93「看護実践とエキスパートネス」が、カリフォルニア大学サンフランシスコ校からバリアシア・ペーター博士をお迎えして、1993年12月17日・18日に美しいベービーロープセンターの講堂で開催された。このセミナーは、私のこの10年間の教育・研究・実践活動に決定的な影響を与えたことが、10年という時間を経てやっと自分の中で鮮明な形を形立てた。当時の資料やメモを見ても、大学開設当時の教員と

学部一回生が力を合わせて開催した熱意が伝わってくる。このセミナーの内容は、看護実践におけるテクノロジーと教、経験と感情の反応など、直接的に学問としての看護を直視したものであり、今振り返って見直しても挑戦的で刺激的なものであった。
10年をふりかえって

その結果は、この10年間、成人
看護学教員で取り組んだ「臨床看護実習
プログラム設モデル」の開発」として形になった。これもまた、実習を通して、この10年間の学部学生の苦悩と
喜びの洗礼を受けて、確かなものとなってきた。実習から2年後、兵庫県立看護大学看護学研究科修士
課程が開設され、平成13年には私が担当する成人健
康看護学専攻の修了生も12人となった。平成14年
にはこれらの人材とともに「糖尿病患者へのヒューマン・ケアリングアプローチの開発」に着手した。
開学から10年を経て、やっと看護ケアリングが看護
実践の知識・技術に繋がり始めた。

こうして看護学のおもしろさに浸ってこられたのも、この10年間に出会った学部生や大学院生や成人
看護学教員との協働や支えのお陰であった。

実習病院との連携は
どのようにして作られたか？

実践基礎看護学 II 内布 敦子

実践基礎看護学 II という授業は、病院とい
う医療の場で初めて学生が実習を行うのをサポート
している。初めて病院で実習するとき、学生は非常
に緊張する。人に慣れ、自分の居場所に安心できず、おろおろしてしまう。私たち教員と病院の看
護師は、この初めての病院実習で学生に良い看護の
体験をさせることができるように、様々な努力をし
ている。優れた臨床実習は、病院看護部という組織
と教員の協力関係が良好でなければ決して実現しな
い。私たち教員が1993年の4月に兵庫県に赴任して最初
にしたことは、まず病院に出向き看護師の方々と
会って話をするということであった。実習の目的や
内容も何も持たずに臨床実習の場となる病院や保健
所に飛び込んだ。「とにかく早期にお互いの顔を
見て話することが大切」と考えていたからである。
兵庫県ははじめてという教員がほとんどであったが、
施設側は喜んで受け入れてくれた。実際に実習
が始まる細部に至ったトラブルはもちろんであったが、
いつも臨床の看護師に助けられ、信頼関係のもとに
解決できたことは、私たち教員の誇りである。
大学生の実習を受け入れるのは初めてということ
あって臨床側にも緊張があったが、一方で楽しみに
してくださった面もあり、学生が発する笑は常にも
な質問にも丁寧に対応してくださっている。看護職
だけではなく医師、理学療法、作業療法、ソーシャル
ワーカー、事務職の方々も大変大きな助けをくださ
ったと思う。

兵庫県立看護大学は実習現場との連携が非常に良
いので他の大学にも認知されているが、この関係
は偶然できあがったものではない。看護師の方々が
教育に強い関心を示してくれたこと、小さなこ
ともないがしきりにせずに大学側とよく話し合うという
文化が育っているということが要因であると思う。
大学も教育会議や共同研究の機会を提供し、臨床と
大学の教員が一緒に何かを作り上げるという仕組み
を意図的に作っており、組織によるバックアップも
見逃せない。看護教育の世界では、しばしば臨床現
場と教育現場の乖離が取りざたされるなかで、兵庫
県看護大学の臨床との連携は非常に成功をおさめて
いることができるよう。
忘れていいもの。
心に留めておきたいもの

4・5・6・5・6・6・6・6・6・4—これは1993年開学以来の阪神タイガースのあっぱれなシーズンの記録である。タイガースは私の趣味のひとつである。年間130-140試合の9割程は、週刊からゲームの瞬間まで、飲食しながら、運転しながら、うたた寝しながら観・聴きしている。約20年過ごした東京でも、かつてはタイガースの放映が少なくて、UHFのアンテナを立てたり、21時を過ぎると途切れて流れてくる関西のラジオ局の電波をステレオで拾っていたものである。兵庫県立看護大学の教員に採用が決まった時、「これで、しっかりサンテレビと毎日放送が聴ける！」と。ご存知、今年のタイガースはふっかちりVである。十年一昔、過去の成績は忘れよう。

兵庫県立看護大学が誕生してから10年。夏休みに、研究室の整理をしていても、当時の懐かしいメモが出てきた。初年度、私は広報委員会に所属し、初めてのパンフレットを作成しようというに、各自、キャッチコピーを考えることになった。手元に多数の不採用作品を含め20余のコピーが。例えば、◇集まれ！多士済済の個性！明石の国に！◇看護の帆に吹く風はいつもも子午線上の世の中資格の花盛り、実のなる花は本物志向等明石をイメージしたものです。Jリーグを意識して、◇でっかい夢をのせて、子午線上からさあキックオフ！また、ちょっと苦しいところでは、◇今の君はWHY看護？明日の君はわい！いわん！◇21世紀の看護三十五年の大好きなあなたの感性で看護キャンパスにあなたの絵を描いてみませんかなど。そのようなコピーのなかで結構気に入ってきたものもある。◇バンく目にした君は偶然という名の必然とか◇94年夏君をバンフに載せたい。きっと、他の委員会などでも大学の基盤づくりのためにあっという心地よい議論が交わされたことだろう。十年一日の感もあるが、大学創成期の思いは、心に留めておきたいものである。

10年前に看護大学の中で
体験したこと、今体験していること

大学設立以前、兵庫県に看護系大学の設置をいう声に身近に接しながら県職員として仕事をしていたのは、今のように看護系の大学が林立していない時期です。開学と同時に兵庫県立看護大学に赴き、ここで、自分がどのように役に立つだごうか、非常に緊張が大いかったことを憶えています。そして、篤が聞いて、関東の嵐の中で関西の看護人材の発足を思い知った気がしました。また、これまで、自分が正しいと思ってきたこと、当たり前に思ってきたことが、んな？と思われる体験を幾度も、しかし、そのことは、どんなこと、ここで仕事をするこの醸造極めて行きりました。当初、もっと私を憶びたことは、たとえば、個々の学生・個々の患者さんに対しては最大の努力をし自分なりの理念を持っていたつもりだったのですが、システムを動かす、グローバルに看護の世界を考えるといった視点が、自分には欠けていたことに気づかれたということでした。そのころ、さまざまな価値観の面の中で、自分のまわりの先生達が述べる意見に疑問をもってもやたらと切り捨てられず、自分の中でニュートラルにおいて得を得ない事柄が続出して、整理するのに随分時間がかかりました。

その後、たくさんの人々に支えられ、また、多くの学生に出会い、実習、学会活動を通して、自分の看護や教育や社会的活動の意味を整理する機会をもういました。この大学のすごさは、果てしない看護の夢に向かって進む歩みを続けすること、10年経ってもいつも新しい土地に自分が立っている気がすること。常に次のチャレンジすべき自综合体の課題が見え、常に全力で駆けてきました。課題はありすぎて、どう走りでなければ自分ではありませんが、こんな人生に足を踏み入れたが10年目、じわっと覚悟が迫ってくるのです。
10年をふりかえって

帰来去想

語国語 穴吹 章子

私ではなく、私でなく、私を吹き抜ける風だ、さわやかな風が「時」の新しい方へと吹いていく
D・H・ロレンス

本学に奉仕して十年が経過しました。その間、千人を超える学生と関わったことになります。その千人が毎年毎年若しい思いや考えをもたらしてくれました。また、人の役に立とうと思って勉強している学生の真摯な姿に接すると、清々しい気持ちも味わってきました。職業人としても人間的にもさらに成長した卒業生と再会したときに、懐かしく話かけてくれると教師夢利につき合っていると感じています。

一方、大学発足時に集まり大学づくりに対して心を合わせた同僚が、大学完成年次より去っていったのは、こののほか寂しいこととして思い出されます。新人生と同じように、看護のことを知りたいと思っていた私に、折にふれ教えてくれくれくれた先生たちでした。阪神淡路大震災のときは、その同僚たちが看護のありようの一端を実践してみせてくれました。被災者一人だった私には今も胸に残る思い出となっています。また、私の研究が、身体的な視点をもつようになったのは、その同僚たちの影響でもあります。

来春、特に卒業生には一時の寂しさを感じることだと聞いていますが、単科大学から総合大学へと変わります。新入生は、山（神戸キャンパス）と海（明石キャンパス）の両方で学ぶことになるので、また新たに山と海のさわやかな風を送ってしてくれるのだろうと期待しています。

10年間をふりかえって

- 散想 -

保健体育 長屋 昭義

走馬灯のように過ぎ去った10年間を思いつくまま綴ることになります。

開学から数年間、学生と教職員が一緒に体育館・グラウンドで汗を流し、楽しんだことを思い出します。

「総合看護」の卒業生が養護教員、保健師、看護師、助産師と本学で取得できる専門分野で活躍していることを誇りに思っています。

真夏の暑さ・雨が降る寒さ・共鳴して学生への説明が延々と続かず、通気性や換気が欠乏ないような体育館の中で、学生が健康者や身体障害者と一緒にできるミニバーの楽しみを限界まで燃やしているのが現状です。それが現在、明石市社会体育事業として位置づけられ、多くの市民に受け入れられ、楽しまれています。

一方、開学から共に、夢と希望を持ち大学づくりをして来た同僚が、今後も続けていくことに一株の寂しさがあります。このようなような教育の大事業は、志と同じような者が10年間からなけれれば基盤づけができないのではないかと、考えているからです。

夏季課外活動で一食は学生が忙しいことになっているのですが、ところが最近、家事の手伝いを行うことが少なくなくなっているのか、その技術や知識不足が目立つようになってきています。将来の看護の専門家として生活技術や能力の低下が心配です。

本学のような小規模大学が好きです。それは学生との関係が取りやすいという意味を含む教育環境にあるからです。しかし、平成16年度からは大規模な大学になります。現在、大学教育にとってやって学生の教育のあり方を問われています。これまで培ってきた本学の特色を失わないことがないよう、真剣に考えなくてはならない時期にきているのではないか、と思っています。
統合に向けて

統合の全体像
小児看護学 片田 範子（カリキュラム委員会委員長）

兵庫県立看護大学の教養教育（一般教育）科目は、基本科目と専門科目からなっている。学生が人間をより幅広く捉えられるように、哲学、心理学、社会学のような一般的な科目だけでなく、バイオエクスベース、演劇論、コミュニケーション論など専門とのつながりを意識した科目を用意しているのが特徴である。しかし単科大学の宿命で、必ずしも学生の希望をかなえるだけの幅広い分野の教養科目が用意されているわけではない。

兵庫県立看護大学では、人文社会科学系と自然科学系の融合を重視した教養教育の充実を目指して「全学共通科目」が設けられている。そのため全学部が横断的な共通教育機構を作り、姫路と神戸学園都市キャンパスで授業を展開する。「全学共通科目」は、教養科目（共通教育科目、課程別教養科目）、グローバル・コミュニケーション科目（英語コミュニケーション科目、情報関連科目）、他専攻科目からなる。教養科目、他専攻科目は遠隔授業システムの活用で、姫路キャンパスの科目も受講可能となる。グローバル・コミュニケーション科目は、国際化と情報化の急速な進展の中で求められる英語能力と情報活用能力の向上を目指す。英語は授業科目数、時間数を増やし、少人数教育を実施する。TOEICなどの資格試験の点数で単位を認定する制度も用意されている。情報教育は、情報科学概論で基礎知識を習得し、演習科目で実践能力を高め、情報処理技術の向上を目指す。他専攻科目は各専門分野先端（専門関連）科目で学部教育科目を精選し、他学部学生も利用できる科目である。華僑・華人論、ベンチャー経営論1、環境科学概論、医療経済学、生命論など幅広い分野の講義が用意されており、看護学部の学生の多様な関心に応えることができるようになる。
統合に向けて

応用情報科学研究科における
看護情報学領域
母性看護学 山本あい子

平成16年の県立大学の統合に伴い、情報系の独立
研究科として「応用情報科学研究科」が新設される。
この研究科は、情報通信技術の社会応用に重点を置
いた教育研究を実践し、情報通信技術の新たな社会
応用の実用的研究分野を開拓することを目的として
いる。

専攻は、「政策経営情報科学コース」と「ヘルスケ
ア情報科学コース」の2コースであり、政策経営情
報科学コースは、「施策情報を」と「経営情報学」の
2領域から、またヘルスケア情報科学コースは、「看
護情報学」と「医療福祉情報学」の2領域から構成
されている。いずれの領域も、12単位以上の共通科
目（基礎科目8単位以上と応用科目4単位以上）
と、14単位以上のコース科目の履修が課され、修了
には合計30単位以上の科目履修と修士論文の審査合
格が要件となっている。

看護学が含まれているヘルスケア情報科学コース
では、複雑化かつ多様化しているヘルスケア情報
を分析・統合し、施設や地域における保健・医療・福祉
の効率的な運用を図るために必要な情報システムの
構築と運用、あるいは管理にかかわる研究開発に
従事する研究者や専門家となる人材を育成しようとして
いる。特に「看護情報学」領域では、情報関連
の基礎系科目、並びに看護情報論や看護情報学教育
論などの専門科目に加えて、理論や研究、看護倫理
など専門看護師に必要な科目も配置し、日本初の看
護情報専門看護師を想定したカリキュラムも準備し
ている。

専門看護師とは、複雑で解決困難な臨床問題や課
題を解決できる専門知識・技術をもち、実践・教育
・相談・調査・研究の役割を果たすことができる人
を言う。現在、日本看護学大学協議会では、地域看
護・小児看護・母性看護など10看護領域を専門看護
師教育として特定している。情報通信技術は、社会
・産業・医療など、人々の日常生活を変える社会的
技術であり、看護は人々の健康のためにこの技術を
どのように使いこなすのかを模索していく必要があ
らう。兵庫県立3大学の統合を機に、日本で初めて
看護情報学領域を研究科に設置したことは、新たな
看護分野拡大の可能性につながり、社会的にも学問
的にも大きな貢献になると信じている。

遠隔授業への取り組み
老人看護学 水谷 信子

兵庫県立大学では21世紀にふさわしい大学の構築
に向けて、教育方法の特色の一つとして、遠隔授業
システム導入を基本計画に掲げている。これにより、こ
のシステム導入より、１１月在する各キャンパスの教
育環境がコンピュータネットワークを用いて統合さ
れ、統一的な学習環境が構築される。２各学部およ
び各大学院間に共通する教育や学際的な教育の必要
に応じて、すべてのキャンパスにおける履修の機会
を平等に提供することができる。３兵庫県立大学の
学部以外各大学院間に共通する科目の開講に際し、
学生および教員の移動時期が省略されることによっ
て、学習効果の向上を可能にしつつ効果的なカリキュ
ラムを構成することができる。４このシステムを
利用した授業は、ディジタルビデオとして蓄積する
ことができ、生涯学習や公講講座など何らかの形で
後日一般に公開することができる。５このシステム
の一部を利用して、大学の運営に関する各種の委員
会等のための会議を開催することができる。等の成
果を期待している。

遠隔授業システムWGでは、平成14年度は、兵庫
県立大学にどのような遠隔授業システムの導入がよ
り教育効果があるのか、現在、他大学で導入されて
いる遠隔授業システムの最新情報をもとに、複数教
師による遠隔授業システムのデモストレーションや
意見交換を行った。その後、遠隔講義の授業画像の
画質確認が問題になり、遠隔授業システムWG委員、
情報ネットワーク部会および教学部会の委員を交えた模擬講義授業を提案し、7月30日、神戸商科大学で模擬会、8月9日、明路工業大学でその試写会を行った。その後、教学部会での遠隔授業の具体的な実施方法や時間制作を、生涯学習部会での検討事項を踏まえ、遠隔授業システム仕様を作成し、平成15年7月、導入すべき遠隔授業システムが決定され、8月より、各キャンパスで導入作業が開始されている。

助産師養成課程
本学における統合カリキュラムの特色
母性看護学 山本あい子・工藤美子

現行の助産師養成教育は、助産師学校や医療技術短期大学部の専攻科、あるいは4年制大学の中で行われている。本学には助産師養成のための課程がないことから、助産師を希望する学生は、卒業後に助産師養成の教育機関に再度入学して一年間学ぶことになっている。

入学後の本学の学生達への調査によると、約25％が助産師免許取得を希望しており、第一期生が卒業してから過去7年間に、毎年6名から12名前後の卒業生が、助産師教育機関に進学している。このことから、統合を図る本学カリキュラムの中に助産師養成課程を設置し、学生達の要望に答えると同時に、県ならびに大学の同意と協力のもとに、カリキュラムの作成を行った。

助産師養成に必要とされる教育には、助産師の援助対象である女性や乳幼児及び家族の特性を理解し、女性や乳幼児の健康問題や課題に対して必要なケアを提供するための診断技術や援助技術を修得し、地域における女性の健康支援者としての基礎力を研修することである。

しかしながら4年制大学で行われている教育内容を見ると、助産師養成課程で求められている内容は、一般支持科目あるいは専門科目の教授を通して、看護師及び保健師養成のためのカリキュラムの中でも一部行われていることになる。そこで新しい看護学部の提供予定科目をもとに、既定の科目の中で助産師養成課程の科目としての選択を行い、同時に追加の必要な教育内容を精選した。結果、追加科目として5科目12単位を設置することとした。

新大学看護学部における助産師課程の教育は、1年次から4年次までの教育を通じて、意図的に統合されたカリキュラムの中で行われていくことになる。男子学生も含めた多くの学生が履修されることを期待し、職業としての助産師の追求と共に、学問としての発展も学生と共に追求したいと夢を描いている。

養護教諭教職課程創設とその将来
教育学系 藤原

平成16（2003）年度より、兵庫県立大学看護学部に、養護教諭一種免許状を取得できる教職課程が設置されることとなった。15年8月末現在では、日下、文部科学省への申請作業が詰めの段階に入っている。

県立大学看護学部がこの教職課程をもうけることができるのは、県立大学の統合によるところが大きい。統合によって、現行姫路工業大学と神戸商科大学の教職課程の帰属化が可能となり、そこで新看護学部が設立される形で、今後の養護教諭教職課程が実現できる運びとなった。

こうした教職課程を看護学部における看護基礎教育カリキュラムに位置づけていくことの意義は、何よりも洋の点にあると考えることができる。すなわち、学生が形成していく看護の専門性に、教育学的観点を統合していくという可能性が生まれること、である。もちろん、看護学部の学生全員が、養護教諭教職課程を履修するわけではないし、また、専門科目以外の、多くの教職科目を履修していくことは、履修生個々にとって、大きな負担ではない。しかし、看護と学校教育の接点に位置する養護の問題について
統合に向かって

見識を深め、それを自身の看護の専門性を広げる
ことに活かし続けていける機会を、看護学部生が持てる
ことは、意義のあることだと思われる。

将来には、何年かの臨床経験を経た後、採用試験にチャレンジして、学校現場で養護教諭として活
躍する卒業生が出てくることを、私たちとしては期待したい。学校とは、本学、そして隣接するスタ
ッフの専門性の多様さによって活性化するものであり、そうした多様さを支えるもの一つとして、看
護という専門性は重要だと考えられる。

21世紀C O Eプログラム
ユビキタス社会における
災害看護拠点の形成

21世紀C O Eプログラム
ユビキタス社会における
災害看護拠点の形成

世界に冠たる教育研究拠点を形成するために、
文部科学省は平成14年度から21世紀C O Eプログ
ラムを開始した。学問分野を10に分け、平成14年度
41学問分野から、そして平成15年度は看護学が入
っている医学系を含む5分野からの申請を受け付け
た。本学では、平成14年10月の研究科委員会におい
て、当プログラムに申請することを決定した。その
後、拠点テーマの決定や教育研究計画の立案、書類
の準備などに5ヶ月を要して申請を行った。この過
程では、本構想への参画教員、附属研究推進センター
教員、また本学総務課など、多くの人々の力とエネ
ルギーが結集している。

申請過程の中で、拠点テーマの決定は一つの山場
であった。テーマ選定には、既に実績があり、今後
の発展が望ましい世界規模でみても他に類を見な
い教育研究であることが期待された。本学は過去10
年間で、災害時のボランティア派遣システムや看護
支援ネットワーク、又は被災者の継続支援システム
などの構築、日本災害看護学会の設立、災害後の
人々の健康状態に関する研究、災害看護フォーラム
の開催など、多くの活動に関わった実績がある。討
議の結果、本学の申請プログラムとして、情報化社
会における災害看護拠点の形成に取り組むことを決

拠点形成実施計画

情報基地の整備
-災害調査
(実態・追跡調査)
-データベース
(データマイニング
データウェアハウス)
-情報提供システム
(各種プログラム開発)

ネットワークの構築
-看護専門家支援ネットワーク
(専門家、学術ネットワーク)
-住民参加型支え合いネットワーク
(地域再建の支援)
-災害看護国際ネットワーク
-災害ケア方法の開発
(災害前支援／災害後支援)
-教育・訓練方法の開発
(専門家支援／住民支援)

災害看護研究拠点
(兵庫県立大学地域ケア開発研究所)

看護ケア方略
定した。

ユビキタス社会とは、誰もがいつでもどこでも情報
を入手でき、人々がその恩恵に浴すことができ
る社会のことである。本構想は、このような社会に
おいて、災害発生前の備えから始まり、災害直後か
ら中・長期までを視野に入れて、災害によって生じ
る生命や健康への被害を最小限に抑えるための看護
の支援方法と情報ネットワークを構築することを目
的としている。国の拠点形成実施計画が示している
ように、本拠点は3研究部門（情報館の整備・ネ
ットワークの構築・看護ケア方略）、8プロジェクト
（各部門下に点で示している）から構成されている。
構想全体の教育研究活動は、本学研究科で設置推
進センターを中心に、国際機関や国内の関連機関と、
また平成16年の県立大学統合後は、他学部や応用情
報科学研究科なども含めた連携を通して、知識を蓄
み出し、かつ集積し、また人々との間に情報連携の
ネットワークを構築し、更に人々が目的に応じて情
報を使いやすい形で取り出せるシステムを構築して
いく。

阪神・淡路大震災後、様々な学問分野が災害研究
に取り組み、得られた成果に基づき、災害に備えた
物流システムや災害に強い都市づくりなどが行われ
できている。医療分野では、災害発生直後の救急救
急に関する研究が主として行われてきている。本プ
ロジェクトは、地域の人々や地域コミュニティの復
興と再生に視点をおいた災害への備えや、心のケア
などの災害後の生活の中での人々の健康への対応な
どに関する中・長期的研究を目指している。このよ
うな中・長期的視野で地域を含めた人々の健康生活
再生への方略を展開し、また情報連携ネットワーク
を前提とした災害時にはケアや、あらかじめ地域や人々
の健康再生力を促す仕組みを準備するという視点は
世界に類を見ないものであり、医療職は勿論のこと、
地域住民の方々に対する大きな貢献になると期待し
ている。またこの構想実施を通して、災害に強い看
護職の育成や災害看護という学問領域の構築にもつ
なり、災害時の人々の健康やシステムなどの知識、
また具体的なケア方略を提示できることは、看護界
への寄与と考える。

いたるところで自然災害や人的災害が多発する今、
国を超えて人々に脅威を与える災害に備え、また人
々の健康を長期的視野で維持・増進していくことは、
災害多発国日本の看護者が率先して取り組む課題で
ある。COEという機会を得て、この課題に取り
組めることは大きなやりがいであると自負している。
寄稿

本学のThink Globally, Act Locally の魅力
地域看護学 森口 育子

大学開設4年目の平成8年4月に地域看護学の教授として着任した。私が本学に転せられたのは、Think Globally, Act Locallyのスローガンの基に「国際的視野で活動できる能力を養う」を教育目標に掲げ、国際的活動を重視しているためである。私の場合、1973年から2年半のニューヨークにおける経験を経て、実践活動を通して開発途上国の健康問題の深刻さを痛感し、WHO／UNICEFの奨奨したプライマリー・ヘルスケアの考え方と日本の保健師の経験を生かして、アジア諸国において地域看護の実践や教育・研究を重ねてきた。

本学ではこれら経験を生かして、将来国際的に活動できる学生の教育やアジアの看護職との交流・研究を通して、アジアの文化に根ざした看護を構築したいと考え7年間過ごして来た。

国際的活動として思い出に残ることは、平成10年度に国際交流委員長としてWHO東南アジア地域事務局のSally Ann Bish氏を招聘して「21世紀に向けた看護の国際協力アジアとの交流センター」の国際セミナーを開催したこと、平成12年度より国際協力に関心がある学生が中心となってGlobal Unityのクラブが発足し、積極的に活動していること、平成13年度の助教研修推進センター開設と共にJICAからの委託により「プライマリー・ヘルスケア（PHC）と看護」の国際研修に取り組み、兵庫県内の保健医療機関の協力を得てこの3年間にインドネシアとフィジーの看護職12名に対して研修を実施してきた。彼らは外国語に外せばRNA同窓会をつくりPHCのリーダーとして活躍している。また総合看護を担当した卒業生が某海外協力隊やNGOで海外に出し始めてもう騒がしいものである。

平成15年度から兵庫県立大学教務学部となっても、本学が築いてきたThink Globally, Act Locallyの伝統を継続して、さらに兵庫県内外の看護界に向け発信していけるようにしたいものである。

学生課長の7年
学生課 竹島 健夫

平成9年、大学構内やケヤキ並木が茅営くにまぎれた2年を半にじっと早4月に学生課部長兼学生課長として赴任した。

特にこの大学事務は経験したことのない未聞の世界だが、3ヶ月ももてば事務処理の一応の目途は立つだろうとタカをくくっていた。ところが、入学式の司会から始まった私の仕事は、大学パンレッスンの企画・募集要項の作成、オープンキャンパスの実施、大学祭への支援、各種入学試験の実施等々初めると続きして実験するイベントが1年を通して次から次へと起きてくる。新しい事態への対応しようと、フリスビーやボールに反して木目が新しい顔は持たずバーチャルを起こす。特に大学特有の教務事務は、大学設置基準や学習規程を読んでも、日常的に処理しなければならないノウハウはそこから生まれてこない。それに、保健師・看護師養成のためのカリキュラムが適用されるためにさらに頭を悩ませる。

1年目はこれまでの行政経験が生かされず、右談左談する日々だった。それから6年が過ぎ、7年目を迎え今年、兵庫県立看護大学は創立10周年を迎えることとなった。

この間、4代の学生部長のもとで、入退制度の改革やカリキュラム改革等に携わってきた。また、平成9年度に修士課程、平成11年度に博士後期課程が開設されたほか、来年度からの新規立大学看護学科計画にも従事させていただくなど大学としての成長過程にも立ち会わせていただいた。さらに、今年は「21世紀COEプログラム」の研究教育拠点に選定されるという再評価ある期間にも巡り会えた。

これまで、世界的にも誇り上る先生方とともに大学を運営できたことを誇りに思う。
情報処理教室の10年
統計・情報系 松浦 和幸

（第1世代）
機種：NEC PC9801FX 内部記憶：640+3072KB
CPU：i386
FDD2台内蔵 プリンタがそれぞれのPCに1台
外付けHD：128MB
OS：MS-DOS Ver.5.00
主なソフト：一太郎Ver.4.3 Lotus 1-2-3 R2.3
＊開学時は今時の最新PCが導入されたわけである
が、いま振り返ってみると、時代はちょうどMS-
DOSからWindowsへの転換期にあたっていた。私
の研究室には PC9821 As2 が入った。これは
Windows Ver.3.1+MS-DOS Ver.5.00で作動し
た。
＊当時のプリンタは、印刷時に大きな音を立てた。
＊この時代は、マウスはほとんど使わず、キーボー
ルドからの入力が主体だった。
＊情報処理教室からリ教室に電話線を延ばして、パ
ソコン通信を授業に取り入れた。
（この原稿を書くにあたり、久しぶりにPC8801FXの電源を入れました。10年間のものだが、まだ立
派に作動しました。）

（第2世代）
機種：IBM PC 300GL 内部記憶：64MB
CPU：Pentium II
FDD1台、CD-ROMを1台内蔵
ネットワーク経由でレーザープリンタ4台に接続
内蔵HD：4GB
OS：Windows 95 ないし Windows 98
主なソフト：一太郎Ver.8 Word97 Excel97
＊インターネットに接続できるようになったが、残
念ながら学部学生にはメールアドレスを配ること
ができなかった。

（第3世代）
＊3大学統合にともない、新しいPCが導入されます。

Hope, Fear, and Self-Esteem
外国語 M. R. Sunwall

Everybody, presumably, would agree that the world of 2003 is quite different from the world of 1993. when this school was founded. In 1993, the world was congratulating itself on the end of the Cold War. Democracy, health, and the general welfare were expected to progress automatically. At the local level, Kansai was considered a safe and prosperous conurbation. Earthquakes were things that happened in Kanto. During those ten years our consciousness has been impacted by disturbing and often discordant images: Buildings destroyed by natural events or terrorism, people devastated by diseases which had no known previous existence, and the seemingly inexorable face of war.

One should look for strength, not in the headlines of the morning newspaper, but within one’s self. One’s evaluation of the outside world will always be subject to flux and contrary indicators. Bad news will always spoil the day for an optimist, and sometimes even good news will rile a pessimist. However the self has to be lived with every day, and the only way to live more fully and effectively is through developing a sound sense of self esteem. There is a special message here for teachers. Does one present a pessimistic attitude toward the world or an optimistic one? To do the former might rob one’s students of hope; to do the latter might deprive them of some necessary reflection on the virtue of prudence. Instead of emphasizing hope or fear, why not communicate an attitude of self-esteem and then let them figure out where the world is
heading on their own? Self-esteem is one thing that all people, especially young people, need. Moreover the opposite of self-esteem, self-hatred, has never, to my understanding, been considered a virtue by anybody.
ります。

1つは「先生方の創意と熱意に満ちた臨間で、教室の内外で真剣に討論する学生たちの生き生きした姿が見えます」との学長の実感は、兵庫県神戸市
県知事が「心豊かな看護職が育つよう、また、学生や卒業生が誇りと愛着を持てるように」との願
いが叶えられた証である事です。

2つは学長が「ケアの基質は患者さんの一挙手一
投足に手を差し伸べる事でもなく、無関心でいる事
でもない。患者さんがよろけられたり、困られた時
にそっとハルプしてあげることである。」と言われ
た事です。

承りますれば、来春の4月より3大学が統合され
新大学としてスタートされるとの事。名誉ある
COEを2つ持たれた内外で抜群なハイレベルな
県立大学になられますよう祈念しております。特に
看護分野では人への優しさや思いやりを持った開拓
精神旺盛な卒業生を輩出されますよう期待申し上げ
拙文を閉じます。

卒業後10年の節目に立って

同窓生 片岡 未希

学生の頃から、20歳台の10年間で3つのことに挑戦、経験するというのが私の計画だった。これは、広い看護の領域で自分の興味のあることを最低3つ
はトライし、生涯を通して携わっていきたいことを
探そうという戦略である。卒業後、東京の国立国際
医療センターの感染症病棟に3年間従事した。そ
の感染症病棟は、HIV/AIDS感染の研究、治療開
発を目的に新たに開設された厚生省管轄の専門病棟
であった。次第に、私は感染予防の重要性を認識せ
ずにはいられなくなった。適切な予防法を正しく知
っていれば、そして実行すれば防げた感染も多く、
私の中に保健衛生についての教育に関わりたいとい
う希望が芽生えた。また、そこでは私にとって意味
の深い出会いがあった。病棟医長であり、日本国際
協力機構（JICA）の医療専門家の1人でもあられる
安岡弘先生との出会いにより、私は今後自分が進ん
で行くべき道がはっきり見えたような気がした。医
療・保健の専門家として、国際協力を行う上で必要
とされる知識と経験を得ること、それが近い将来に
おける私の目標となった。

東京から実家のある京都に戻ってから約1年半保
健婦として勤務した後、2001年8月、イギリスの大
学院にて開発途上国における保健・公衆衛生の向上
に関わる学びを得ることを目指し、イギリスに渡っ
た。半年間の語学研修を終えた後も、さらなる語学
力の向上と海外で看護職の経験を得るため、イギリ
スの看護免許取得を目指すことを決意。そして半年
間、医学英語に苦しみながら臨床研修を終えた後、
ようやく正看護婦としての登録を今年7月に完了し
た。正式登録が終了した際に感じた達成感を私は、
きっと忘れないだろう。異国での生活も早
や3年目を迎えようとしている。今後は、感染コ
ントロールや地域看護に関する看護コースを取る他、
渡英した目的の1つである大学院で学びを得ること
を実現したい。

この10年間何をしてきたのか自分に問うてみると、
思い描く将来の像が見えたもののそこにはまだ続く
道があると言える。次の10年間に何をしていくか、
その計画を練る節目に今、私は立っているだろう。
寄稿

設立10周年によせて

職務生 藤本 美生（兵庫県立粒子線医療センター）

私は平成10年度に修士課程2期生として入学いたしました。がん専門病院で看護師として働いているとき、様々な問題を解決する術なく日々がすぎてしまいがちで、現状を変えるという思いがありました。看護大学は当時全国でもCNSコースの設置された数少ない大学院でしたので、看護業界を引っ張っておられるすばらしい先進方のもとで、実践につながる学びをする機会を得られ、とても幸運だったと思います。

2年間の学びを振り返ってみると、カリキュラムの中には実習がありました。状況の客観的、論理的分析からエビデンスのあるケアを提供するという繰り返しは、感覚的に経験的にケアを提供することに慣れていた私には困難なプロセスでしたが、臨床での現象を立体制的に捉え、問題を焦点化するための訓練だったと思います。

がん患者、かつては不治の術といわれた病気でしたが、近年がんに関する様々な研究の結果、約50％が治癒する時代になったといわれています。大学院修了後、兵庫県立成人病センターを経て、現在の粒子線医療センターに就職してから2年が経ちました。兵庫県立粒子線医療センターは治療目的とした先端医療を実施する施設です。治療を終了した患者さんとの外来相談室での関わりの中で、患者さんにはがんが発生するメカニズムや、再発を防止するための科学的知識、エビデンスのある取り組み方法などを求めていることが分かりました。がんと闘うことは容易ではなく、患者さん自身が主体的に積極的に自己管理をコントロールしたいという新たな挑戦だと思います。数年前の臨床経験では出会ったことのない課題であり、時代とともにがん患者さんが変化してきてもうまく思いません。大学院で専門的知識を学び、癌の軌跡をふま

博士課程の学生生活から得た「財産」

職務生・基礎看護学 野澤美江子

創立10周年おめでとうございます。とくに兵庫県立看護大学との出会いは、1995年に兵庫県立看護大学で開催されたJANS国際看護学術集会では、震災で大きなダメージを受けたにも関わらず、学生間であった先進薬の薬剤師「不死鳥の如くよみがえった神社」と学会をも

博士後期課程に入学してからの3年間、私はとても貴重な時間を過ごすことができました。研究者としての基盤を学ぶ講義や演習は、感覚的または体験的にとらえながら現象を、どのように学際的にとらえようかと考える機会を与えてくれました。また、先生方と行った共同研究は、まさに実戦を通じて学びのプロセスを学ぶ機会でした。これらの“学んだこと”や“考えたこと”に加え、看護業

の第一線で活躍されている国内外の先生方からの講義や、アジアの研究者達が集う国際学術大会で発表の機会を得たことは、研究者としての姿勢を高める貴重な“刺激”でした。さらに、最後まで見守り続けた先生方の指導のきもまとめ上げることができた博士論文は、“再発”)したもののもので

 hottest" sóquet" ome de tou go de soto kibun ga de kirei ga de

的です。そして、同じ目標を目指す友人とも言える先輩や同士、後輩、学習環境をサポートして下さった学生課・総務課・図書館職員の方々、研究に協力頂いた多くの方々との“人とのつながり”も得ることができました。これら全て、私がにとってかけがえのない“財産”です。
私は、この春、兵庫県立看護大学の教員として再スタートしました。この大学で、すばらしい先生方や職員の方々と共に働けることをとても幸せに感じています。そして、博士課程で学んだことをより深化させ、看護学の発展に結びつけるという次の課題に取り組んでいこうと思っています。

最後になりましたが、新たな可能性に向かって生まれ変わらぬ兵庫県立大学看護学部ならびに大学院看護学研究科、そして地域ケア開発研究所の益々のご発展をお祈り申し上げます。そして、微力ではありますが、少しでもお役に立てるよう精進してまいりますのでよろしくお願いいたします。

初代事務局長さんへの
10年目のお便り

事務局 横田 成樹

拝啓 柏木初代事務局長様にはお変わりなく、お元気でお過ごしのことと存じます。
さて、兵庫県立看護大学も、本年4月に開学10周年を迎えました。平成5年4月15日、「只今から、兵庫県立看護大学の開校式を挙行いたします。」開校式典での柏木初代事務局長さんの第一声が、ついこの間のことのように思えてなりません。

開校当時は色々ありましたから、初代の事務局長さんは大変でしたでしょう。「寝ちゃん、ケヤキが枯れるで！」「講堂が水漏れや！」「おい、暖房がきかんへんで、どないったんや！」「柏木さんのあの威勢のいい声が今にもキャンパスに響きそうです。

特に、震災の時は学生の安否確認、教職員への連絡など大変でしたね。そんな中での、南学長さんをリーダーとする看護の先輩方の救助活動は鮮やかでした。まさに、看護の神髄を見た感がありました。でも、局長さん、職員も先生と一緒に頑張りましたよね。

大学の近況ですが、この春で、学部卒業生が757名、大学院修了生が252名となり、昨年春は初めての看護学博士が誕生しました。また、本年7月に
第6章
資料
歴代部局長
教員名簿
非常勤講師名簿
職員名簿
学部学則
大学院学則
入学試験状況
編集後記
<table>
<thead>
<tr>
<th>職名等</th>
<th>氏名</th>
<th>H5年度</th>
<th>6年度</th>
<th>7年度</th>
<th>8年度</th>
<th>9年度</th>
<th>10年度</th>
<th>11年度</th>
<th>12年度</th>
<th>13年度</th>
<th>14年度</th>
<th>15年度</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>学長</td>
<td>南 裕子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>学生部長</td>
<td>近田 敏子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>片田 篠子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>水谷 隆子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>森口 輝子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>野並 藤子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>附属図書館長</td>
<td>吉本 和生</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>石井 誠士</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>鶴田 和浩</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>岡元 行雄</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>藤山 恒夫</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>事務局長</td>
<td>柏木 謙</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>橫山 隆</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>照井 孝男</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>橫田 成樹</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>区分</td>
<td>講座又は科目群</td>
<td>職名</td>
<td>氏名</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>----------------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>基礎</td>
<td>哲学系</td>
<td>教授</td>
<td>石井誠士</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>心理学系</td>
<td>助教授</td>
<td>藤口純二</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助教授</td>
<td>福留留美</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助教授</td>
<td>金外悠</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>教育学系</td>
<td>助教授</td>
<td>菅原輝</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>社会学系</td>
<td>教授</td>
<td>岡元行雄</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>社会福祉系</td>
<td>教授</td>
<td>山下慎宏</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>経済系</td>
<td>講師</td>
<td>國崎耕</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助教授</td>
<td>長田浩</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>統計・情報系</td>
<td>教授</td>
<td>松浦和幸</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>外国語系</td>
<td>教授</td>
<td>松本隆子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助教授</td>
<td>柴崎章子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助教授</td>
<td>M・サンカル</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>健康体育系</td>
<td>教授</td>
<td>長尾昭義</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助教授</td>
<td>柴田真志</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>基礎看護生態学</td>
<td>教授</td>
<td>高木祥生</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助教授</td>
<td>加治秀介</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助教授</td>
<td>木村清太</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助教授</td>
<td>増田雄子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助教授</td>
<td>園下玲子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>横井利江</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>川井亜美</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>鈴村智子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>看護病態学</td>
<td>教授</td>
<td>萩野和浩</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>教授</td>
<td>萩野和浩</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>山本亜子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>区分</td>
<td>講座又は科目群</td>
<td>職名</td>
<td>氏名</td>
<td>1H5年度</td>
<td>2H5年度</td>
<td>3H5年度</td>
<td>4H5年度</td>
<td>5H5年度</td>
<td>6H5年度</td>
<td>7H5年度</td>
<td>8H5年度</td>
<td>9H5年度</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>----------------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
</tr>
<tr>
<td>専門</td>
<td>基礎</td>
<td>基礎</td>
<td>教授</td>
<td>南 裕子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助教授</td>
<td>川口 孝泰</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助教授</td>
<td>野澤 美江子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>藤田 仁美</td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>小西 美和子</td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>蕨島 基美</td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>実践基礎</td>
<td>実践基礎</td>
<td>教授</td>
<td>近田 敬子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助教授</td>
<td>宮島 朗子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>若村 智子</td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>平河 聖美</td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>志村 満子</td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>大原 美香</td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>石橋 寿子</td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>大金 ひろみ</td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>備本 阿奈子</td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>南口 亜子</td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>大島 理恵子</td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>堀田 佐知子</td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>奥野 信行</td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>実践基礎</td>
<td>実践基礎</td>
<td>教授</td>
<td>P. ラーソン</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助教授</td>
<td>内布 敏子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助教授</td>
<td>萩尾 晴恵</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>松田 稔子</td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>萩田 秀子</td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>萩田 しおり</td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>和泉 成子</td>
<td></td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>区分</td>
<td>講座又は科目群</td>
<td>職名</td>
<td>氏名</td>
<td>6年度</td>
<td>7年度</td>
<td>8年度</td>
<td>9年度</td>
<td>10年度</td>
<td>11年度</td>
<td>12年度</td>
<td>13年度</td>
<td>14年度</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>----------------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
</tr>
<tr>
<td>実践看護</td>
<td>教授</td>
<td>河野文子</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>教授</td>
<td>神山明子</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>教授</td>
<td>滝野美由紀</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>教授</td>
<td>神作真澄</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>教授</td>
<td>宇野さつき</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>教授</td>
<td>大塚秀央子</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>教授</td>
<td>川崎優子</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>教育・管理看護学</td>
<td>教授</td>
<td>P.アンダーウッド</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>助教授</td>
<td>上泉和子</td>
<td>講師</td>
<td>助教授</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>助教授</td>
<td>坂田彩美子</td>
<td>助手</td>
<td>講師</td>
<td>助教授</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>増野恵</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>成人看護学</td>
<td>教授</td>
<td>野原葉子</td>
<td>助教授</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>講師</td>
<td>足利幸乃</td>
<td>講師</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>講師</td>
<td>森秋子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>友田裕江</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>織田秀実</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>茅岡由紀子</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>山川美里子</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>田岡和子</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>深谷真弓</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>秋山直子</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>近藤幸子</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>助手</td>
<td>中村朋子</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>老人看護学</td>
<td>教授</td>
<td>永谷信子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>助教授</td>
<td>竹崎久美子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>講師</td>
<td>松岡千代</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>譲務</td>
<td>成人老人</td>
<td>老人看護学</td>
<td>教授</td>
<td>山本あい子</td>
<td>教授</td>
<td>教授</td>
<td>教授</td>
<td>教授</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>----------</td>
<td>------------</td>
<td>------</td>
<td>-------------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>職名</td>
<td>助手 坂田 優子</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>助手 三上 由香里</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>助手 山田 佳代</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>助手 井藤 由香里</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>助手 多田 祐美</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>助手 梅垣 信子</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>助手 江上 史子</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>助手 平林 美保</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td>助手</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>名称</th>
<th>母性看護学</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>教授</td>
<td>山本あい子</td>
</tr>
<tr>
<td>教授</td>
<td>工藤 美子</td>
</tr>
<tr>
<td>教授</td>
<td>横井 桂子</td>
</tr>
<tr>
<td>教授</td>
<td>川村 千恵子</td>
</tr>
<tr>
<td>助手</td>
<td>中込 さと子</td>
</tr>
<tr>
<td>助手</td>
<td>小竹 桃枝</td>
</tr>
<tr>
<td>助手</td>
<td>小林 亜樹</td>
</tr>
<tr>
<td>助手</td>
<td>鎌崎 和子</td>
</tr>
<tr>
<td>助手</td>
<td>増井 耐子</td>
</tr>
<tr>
<td>助手</td>
<td>足立 静</td>
</tr>
<tr>
<td>助手</td>
<td>田村 奨子</td>
</tr>
<tr>
<td>助手</td>
<td>田村 美子</td>
</tr>
<tr>
<td>助手</td>
<td>鳥取 恵子</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>名称</th>
<th>小児看護学</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>教授</td>
<td>片田 範子</td>
</tr>
<tr>
<td>教授</td>
<td>岡村 仁美</td>
</tr>
<tr>
<td>教授</td>
<td>廣末 ゆか</td>
</tr>
<tr>
<td>助手</td>
<td>大崎 富士代</td>
</tr>
<tr>
<td>区分</td>
<td>演説会</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>--------</td>
</tr>
<tr>
<td>1</td>
<td>広域地域衆議学</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<p>| 区分 | 附属研究会 | 講師 | 津田 万寿美 | 講師 | 講師 | (学生郎年) | 13年度 | 14年度 |
|------|-------------|-------|-------------|-------|-------|            |        |        |
| 附属 | 推進センター | 講師 | 近藤 麻理 | 講師 | 講師 |            |        |        |
|       |             | 講師 | 東 すみ | 講師 | 講師 |            |        |        |
|       |             | 講師 | 内海 孝子 | 講師 | 講師 |            |        |        |
|       |             | 助手 | 吉田 明子 | 助手 | 助手 |            |        |        |</p>
<table>
<thead>
<tr>
<th>科目</th>
<th>氏名</th>
<th>H5年度</th>
<th>6年度</th>
<th>7年度</th>
<th>8年度</th>
<th>9年度</th>
<th>10年度</th>
<th>11年度</th>
<th>12年度</th>
<th>13年度</th>
<th>14年度</th>
<th>15年度</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>法学</td>
<td>高木 多喜男</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>三井 賢</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>香川 孝三</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>濱田 素郎</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td>生物学</td>
<td>坪山 由宏</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>新井 宏男</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>安岡 則武</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td>食生活論</td>
<td>宮川 久達子</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>大野 佳美</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td>歴史学</td>
<td>立川 昭二</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td>国際関係論</td>
<td>木村 修三</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>萩尾 孝</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>片原 菊一</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>吉田 勝次</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td>化学</td>
<td>山田 博昭</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>世間 明</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td>教育学</td>
<td>佐藤 信一</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>杉林 隆</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td>論理学</td>
<td>島田 賢一</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td>演劇論</td>
<td>竹内 敏晴</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td>文学</td>
<td>藤原 克己</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>前田 貞昭</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td>認知科学</td>
<td>正司 和彦</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td>医事法学</td>
<td>大谷 実</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>手嶋 素</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td>バイオエシックス</td>
<td>坂本 百大</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>稲田 求</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td>医療人類学</td>
<td>渡部 恵美子</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td>コミュニケーション論Ⅰ</td>
<td>坂本 夏木</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>麻生 武</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td>コミュニケーション論Ⅱ</td>
<td>井上 愛</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
<td>[ ]</td>
</tr>
<tr>
<td>科 目</td>
<td>氏 名</td>
<td>H5年度</td>
<td>6年度</td>
<td>7年度</td>
<td>8年度</td>
<td>9年度</td>
<td>10年度</td>
<td>11年度</td>
<td>12年度</td>
<td>13年度</td>
<td>14年度</td>
<td>15年度</td>
</tr>
<tr>
<td>------------</td>
<td>-----------</td>
<td>--------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
</tr>
<tr>
<td>基礎看護論Ⅲ</td>
<td>野崎香野</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>家族健康論</td>
<td>野崎佐由美</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>高野順子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>精神健康論Ⅱ</td>
<td>中井久夫</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>前田潔</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>山口直彦</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>職理学</td>
<td>山本和敬</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>臨床薬理学</td>
<td>奥村勝彦</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>岩川情吾</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>福島昭二</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>疾病論Ⅱ</td>
<td>丸尾猛</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>大谷微郎</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>松尾博昭</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>疾病論Ⅲ</td>
<td>会田直夫</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>松山壮一郎</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>地球環境論</td>
<td>山口克人</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>環境保健論Ⅰ・Ⅱ</td>
<td>青山英樹</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>環境保健論Ⅱ（A）</td>
<td>原 悟隆</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>環境保健論Ⅲ</td>
<td>住野公昭</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>環境保健論Ⅲ（B）</td>
<td>中園直樹</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>地域援助論Ⅰ</td>
<td>久富郁子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>薬語Ⅰ</td>
<td>竹田和子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>薬語Ⅰ・Ⅱ</td>
<td>藤野一夫</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>丸橋裕</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>W・ニッコ</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>中国語Ⅰ・Ⅱ（A・B・C・D）</td>
<td>日野みどり</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>中国語A・B・C・D</td>
<td>蕭 羅軍</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>美会話英語</td>
<td>土平紀子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>竹中美奈子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>心理学／発達心理学</td>
<td>中島承出</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>技術援助論</td>
<td>足利幸方</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>科目</td>
<td>氏名</td>
<td>4年度</td>
<td>5年度</td>
<td>6年度</td>
<td>7年度</td>
<td>8年度</td>
<td>9年度</td>
<td>10年度</td>
<td>11年度</td>
<td>12年度</td>
<td>13年度</td>
<td>14年度</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
</tr>
<tr>
<td>生涯教育論</td>
<td>杉山 明男</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>国際保健学</td>
<td>石川 信克</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>看護教育</td>
<td>小山 真理子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>小児看護学</td>
<td>村田 忠子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>鳥名 美智子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>母性愛護論Ⅰ</td>
<td>新道 幸恵</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>喜多淳子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>家族看護学</td>
<td>野島 佐由美</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>中野 憲美</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>老人看護方法論Ⅰ</td>
<td>太田 喜入子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>リエゾン精神看護論</td>
<td>野末 琥香</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>看護と保健政策</td>
<td>小山 真理子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>久常 節子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>田村 やよい</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>継続教育論</td>
<td>玄田 公子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>成人看護援助論</td>
<td>中西 藤子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>看護経済学</td>
<td>金井Pak 雅子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>環境看護学特論Ⅱ</td>
<td>古賀 俊介</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>組織行動管理論</td>
<td>上泉 和子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>精神看護方法論</td>
<td>宇佐美 しおり</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>看護管理</td>
<td>上泉 和子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ストレス看護論</td>
<td>林 優子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>高等社会統計学</td>
<td>高木 廣文</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>看護学研究法Ⅱ</td>
<td>ビバリ・A、ホール</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>ナンシー・ベリン</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>ジュディ・ウンドール/岡田</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>所属</td>
<td>職務</td>
<td>氏名</td>
<td>4年度</td>
<td>5年度</td>
<td>6年度</td>
<td>7年度</td>
<td>8年度</td>
<td>9年度</td>
<td>10年度</td>
<td>11年度</td>
<td>12年度</td>
<td>13年度</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
<td>-------</td>
</tr>
<tr>
<td>事務局総務課</td>
<td>事務局長</td>
<td>柏木 善</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>横山 隆</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>照井 孝男</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>横田 徹</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>白桃 繁</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>(5年度〜8年度：事務局次長)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>事務局次長</td>
<td>横田 徹</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>有本 よう</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>(7年度〜9年度：学生部次長兼学生課長)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>総務課長</td>
<td>松原 健一</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>丸山 宏司</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>平田 浩</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>宇部宮 敏信</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>総務課員</td>
<td>中村 道男</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>三木 洪彦</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>西海 さくえ</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>中道 泉和</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>西條 千明</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>植本 一郎</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>藤田 博</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>岸本 佳史</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>寺尾 美幸</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>高瀬 雅信</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>荒木 久晴</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>平田 清美</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>原田 吉英</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>藤原 由佳</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>信野 瞳生</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>神尾 由紀</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>田口 俊幸</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>西村 幸之</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>野倉 加奈美</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>和田 昌亮</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>(13年度〜12年度：附属図書館)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>所属</td>
<td>職名等</td>
<td>氏名</td>
<td>45年度</td>
<td>6年度</td>
<td>7年度</td>
<td>8年度</td>
<td>9年度</td>
<td>10年度</td>
<td>11年度</td>
<td>12年度</td>
<td>13年度</td>
<td>14年度</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>--------</td>
<td>-------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
</tr>
<tr>
<td>学生部学生課</td>
<td>学生部次長 兼学生課長</td>
<td>長田 博樹</td>
<td>（9年度〜12年度：事務局幹事長）</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>有本 まゆみ</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>佐島 透夫</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>学生課</td>
<td>金井 一哉</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>松野 郁子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>大谷 浩彦</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>堂端 昭平</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>永田 育子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>佐佐 彌行</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>河野 俊</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>中道 利佳</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>岸本 重美</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>岡本 早苗</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>abbix 俊雄</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>西海 さくえ</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>八木 功竭</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>井戸 郁子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>三木 弥彦</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>藤田 妙子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>藤原 品子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>久保田 久美子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>関島 博子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>西村 史和</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>附属図書館</td>
<td>事務長</td>
<td>北川 啓子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>原野 多恵子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>高橋 守昭</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>図書館員</td>
<td>内藤 みよ子</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>松本 史</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>八木 功竭</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>髙橋 雅信</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
兵庫県立看護大学学則

制定 平成5年4月1日
改正 平成11年9月1日
改正 平成14年3月6日
改正 平成14年4月3日

第1章 総則

（目的）
第1条 本学は、教育基本法及び学校教育法に基づき、生命の尊重を基盤とした豊かな人間性の鍛錬と看護の専門的知識・技法の教授研究を行い、社会の幅広い領域で活躍する人材の育成に努め、もって健康の増進と福祉の向上に寄与することを目的とする。

（構成）
第2条 本学に、看護部を置く。
2 看護部の学科及び入学定員、3年次編入学定員、受容定員は次のとおりとする。

<table>
<thead>
<tr>
<th>学 科</th>
<th>入学定員</th>
<th>3年次編入学定員</th>
<th>受容定員</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>看護学科</td>
<td>100名</td>
<td>10名</td>
<td>420名</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（附属図書館）
第3条 本学に、附属図書館を置く。

（職員組織）
第4条 本学に、学長、教授、助教授、講師、助手、事務吏員、技術吏員及びその他の職員を置く。

（教授会）
第5条 本学に、大学運営に関する重要な事項を審議するため、教授会を置く。
2 教授会は、学長、教授、助教授及び常務講師をもって構成する。
3 教授会においては、次の事項を審議する。
（1）学則、学内諸規程等の制定、改廃に関する事項
（2）人事に関する事項
（3）経理に関する事項
（4）学生の入学、編入学、転学及び卒業に関する事項
（5）学生の休学、復学、退学、除籍、再入学及び

び賞罰に関する事項
（6）教育課程及び授業科目に関する事項
（7）学生の厚生補導に関する事項
（8）施設の拡充に関する事項
（9）その他本学に関する重要な事項
4 教授会に関する規程は、別に定める。

第2章 学年、学期、休業日、修業年限及び在学年限

（学年）
第6条 学年は、4月1日から始まり、翌年3月31日に終わる。
（学期）
第7条 学年を次の2学期に分ける。
（1）前期 4月1日から9月30日まで
（2）後期 10月1日から翌年3月31日まで
（休業日）
第8条 休業日は、次のとおりとする。
（1） 土曜日・日曜日
（2） 国民の祝日に関する法律による休日
（3） 開学記念日 4月15日
（4） 春季休業 4月1日から4月6日まで
（5） 夏季休業 8月1日から9月30日まで
（6） 冬季休業 12月25日から翌年1月7日まで
2 前項の休業日は、臨時の休業日、学長がその都度定める。
（修業年限）
第9条 学部の修業年限は、4年とする。
（在学年限）
第10条 学生は、8年を超えて在学することはできない。

第3章 教育課程及び履修方法等

（授業科目）
第11条 授業科目は、基本科目、外国語科目、保健体育科目、専門科目及び専門科目とする。
（単位計算の方法）
第12条 授業科目の単位数は、1単位45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、次の基準により計算するものとする。
（1） 講義は、15時間又は30時間の講義をもって
1単位とする。
（2）見習は、30時間もって1単位とする。
（3）実習及び保健体育実技は、30時間又は45時間もって1単位とする。
（単位の授与）
第13条 授業科目を履修し、その試験に合格した者には、所定の単位を与える。
（成績の評価）
第14条 授業科目の成績は、秀・優・良・可・不可の評語をもって表し、秀・優・良・可を合格とする。
（他の大学における履修等）
第15条 教育上有益と認めることは、他の大学（外国の大学を含む）との協定に基づき、学生に当該大学の授業科目を履修させることができる。
2 前項の規定により、他の大学の授業科目を履修しようとする者は、教授会の議を経て学長の許可を得なければならない。
3 前項の規定により履修した授業科目について修得した単位は、60単位を超えない範囲で本学における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。
（入学前の既修得単位の認定）
第16条 教育上有益と認めることは、学生が本学に入学する前に他の大学又は短期大学において履修した授業科目について修得した単位（科目等履修生として修得した単位を含む）を、本学に入学した後の本学における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。
2 前項により修得したものとみなす単位数は、本学において修得した単位以外のものについては、前条第3項により修得した単位数と合わせて60単位を限度とする。
（編入学生の既修得単位の認定）
第17条 編入学生の既修得単位の認定については、別に定める。
（教育課程及び履修方法）
第18条 この章に定めるもののほか、授業科目の種類、単位数及び履修方法等については、履修規程の定めるところによる。

第4章 入学、編入学、転学及び卒業（入学の時期）
2 編入学生は、4年を超えて在学することはできない。
3 編入学志願者の選考及び入学許可は、第21条から第23条の規定を準用する。
   （転学）
第25条 本学の学生が、他の大学に転学を希望するときは、学長の許可を得なければならない。
   （卒業）
第26条 本学に4年以上在学し、履修規程に基づき卒業所要単位以上を修得した者は、教授会の議を経て、学長が卒業を認定する。
   （学士の学位）
第27条 本学を卒業した者に、学士の学位を授与する。
2 学位の授与については、別に定める。

第5章 休学、復学、退学、除籍及び再入学（休学及び復学）
第28条 学生が、病気・事故等やむを得ない事情により3か月以上休学することができないときは、必要書類を添えて学長に願い出て、その許可を得て休学することができる。ただし、病気による休学の願い出には、医師の診断書を添えなければならない。
2 病気のため修学が適当でない学生に対しては、学長は休学を命ずることができる。
3 休学の期間は、1年を超えることができない。ただし、特別の事情があると認められたときは、更に1年の範囲内で延長を許可することができる。
4 休学期間は、通算して3年を超えることはできない。
5 休学期間は、在学期間に入算しない。
6 休学期間中にその該当事由がなくなったときは、学長に願い出て、その許可を得て復学することができる。
   （退学）
第29条 学生がやむを得ない事情によって退学しようとするときは、必要書類を添えて学長に願い出て、その許可を得なければならない。
   （除籍）
第30条 学生が、次の各号の1つに該当するときは、学長は教授会の議を経てこれを除籍する。
   (1) 第28条第4項に定める休学期間を超える者
   (2) 病気その他の理由のため、成績の見込みのない者
   (3) 授業料等の納付を怠り、督促してもなおその納付がない者
   (4) 定められた在学期間を超える者
   （再入学）
第31条 次の各号に掲げる者が、再入学を願い出たときは、学長は教授会の議を経て入学を許可することができる。ただし、入学の時期は学期の始めとする。
   (1) 第29条により本学を退学した者
   (2) 前条第1号、第2号及び第3号により除籍された者

第6章 賞罰（表彰）
第32条 学生として表彰に値する行為があった者は、学長は教授会の議を経て表彰することができる。
   （懲戒）
第33条 学生は、本学則その他の学生に関する諸規程に反し、又は学生としての本分に反した行為のある者を教授会の議を経て懲戒することができる。
2 懲戒は、訓告、停学及び退学の3種とする。
3 前項の退学は、次の各号の1つに該当した場合とする。
   (1) 性行不良で改善の見込みのないと認められる者
   (2) 正当な事由がなくて修業の実のない者
   (3) 本学の秩序を乱し、その他学生としての本分に反した者

第7章 科目等履修生、研究生、研修員及び外国人特別学生（科目等履修生）
第34条 本学の学生以外の者で、特定の授業科目の履修を希望する者があるときは、学長は教授会の議を経て、これを科目等履修生として許可することができる。
2 科目等履修生について必要な事項は別に定める。
   （研究生）
第35条 特定の事項について研究を願い出る者が
あるときは、学長は教授会の議を経て、これを研究会として許可することができる。
2 研究生について必要な事項は別に定める。
（研究員）
第36条 大学又はその他の団体から、特定の事項の研究のためその所属の職員の派遣について願い出があるときは、学長は教授会の議を経て、これを研究員として許可することができる。
2 研究員について必要な事項は別に定める。
（外国人特別学生）
第37条 外国人で、外国公館又は本学において適当と認める団体から推薦された者が、本学への特別入学を願願するときは、学長は教授会の議を経て、これを外国人特別学生として許可することができる。
2 外国人特別学生は、第2条第2項に定める定員外とする。
3 外国人特別学生の入学資格は、第29条を準用する。
（規定の準用）
第38条 学則のうち必要な事項は、科目等履修生、研究生、研究員及び外国人特別学生に対し準用する。

第8章 公開講座
（公開講座）
第39条 県民の健康・福祉に関する教養を高めるとともに、広く若者従事者、健康福祉関係者、ボランティア等の知識又は文化の向上に資するため、公開講座を設けることができる。

第9章 授業料及び入学料等
（授業料及び入学料等）
第40条 授業料、入学料、研究料、研究員及び公開講座受講料（以下「授業料等」という。）の額並びに徴収に関しては、兵庫県立学校授業料等徴収条例の定めところによる。
2 休学を許可された者に対しては、前項の条例の定めるところにより、休学期間の授業料を免除する。
3 特別の理由があると認められる者は、兵庫県立大学の授業料等の免除等に関する規則の定めるところにより、授業料等の全部又は一部の免除を申請することができる。

附則
（施行期日）
1 この学則は、平成5年4月1日から施行する。
（経過措置）
2 平成5年度から平成7年度までの各年度における収容定員は、学則第2条第2項の規定にかかわらず、次に掲げるとおりとする。

<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>平成5年度</th>
<th>平成6年度</th>
<th>平成7年度</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>一般入学生</td>
<td>100名</td>
<td>200名</td>
<td>300名</td>
</tr>
<tr>
<td>3年次入学生</td>
<td>0名</td>
<td>0名</td>
<td>10名</td>
</tr>
<tr>
<td>収容定員</td>
<td>100名</td>
<td>200名</td>
<td>310名</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（施行期日）
3 この学則は、平成11年4月1日から施行する。
（施行期日）
4 この学則は、平成14年4月1日から施行する。
（施行期日）
5 この学則は、平成14年4月1日から施行する。
兵庫県立看護大学大学院学則

制定 平成9年4月3日
改正 平成10年5月14日
改正 平成14年3月13日

第1章 総則
（目的）
第1条 兵庫県立看護大学大学院（以下「本大学院」という。）は、人間の尊厳を基軸とし、看護学の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめて、文化の進展に寄与することを目的とする。

（研究科）
第2条 本大学院に看護学研究科（以下「研究科」という。）を置く。

（専攻）
第3条 研究科に看護学専攻を置く。

（課程）
第4条 本研究科に博士課程を置く。
2 博士課程は、これを前期2年の課程（以下「博士前期課程」という。）及び後期3年の課程（以下「博士後期課程」という。）に区分し、博士前期2年の課程は、これを修士課程として取り扱うものとする。
3 博士前期課程（修士課程）は、広い視野に立って看護学の精深い学識を授け、高度な専門性を有する看護実践等に必要な実践能力や研究者の基礎能力を養うものとする。
4 博士後期課程は、看護学の分野における研究者として自立して研究活動を行うために必要な高度な研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養うものとする。

（学生定員）
第5条 研究科の定員は次のとおりとする。

<table>
<thead>
<tr>
<th>研究科名</th>
<th>専攻名</th>
<th>課程名</th>
<th>入学定員</th>
<th>収容定員</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>看護学研究科</td>
<td>看護学専攻</td>
<td>博士前期課程（修士課程）</td>
<td>25名</td>
<td>50名</td>
</tr>
<tr>
<td>看護学研究科</td>
<td>看護学専攻</td>
<td>博士後期課程</td>
<td>4名</td>
<td>12名</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（教員組織）
第6条 本大学院における研究指導は原則として教授が行い、授業は教授、助教授又は講師が担当する。

第7条 研究科に研究科長を置き、学長をもって充てる。

（研究科委員会）
第8条 本大学院の運営に関する重要事項を審議するため、研究科に研究科委員会（以下「委員会」という。）を置く。
2 委員会は、次に掲げる者をもって組織する。
(1) 研究科長
(2) 専門分野の研究指導を行う教授
(3) その他研究科長が必要と認める者
3 委員会は、次に掲げる事項を審議決定する。
(1) 研究科の人事に関すること。
(2) 大学院学則及び研究科に関する規程の制定、改廃に関すること。
(3) 研究科学生の入学、休学、退学、転学、復学、除籍及び賞罰他学生の身分に関すること。
(4) 研究科の教育課程及び研究指導に関すること。
(5) 修士論文、特定の課題及び博士論文に関すること。
(6) 最終試験及び課程修了に関すること。
(7) 学位に関すること。
(8) その他研究科に関すること。
4 委員会の運営に関して必要な事項は別に定める。

第2章 学年、学期、休業日、修業年限及び在学年限
（学年、学期及び休業日）
第9条 本大学院の学年、学期及び休業日については兵庫県立看護大学学則（以下「大学学則」という。）第6条から第8条までの規定を準用する。
（修業年限）
第10条 本大学院博士前期課程（修士課程）の修業年限は2年とし、博士後期課程の修業年限は、3年とする。
（在学年限）
第11条 学生は、博士前期課程（修士課程）においては4年、博士後期課程においては5年を超
て在学することはできない。

第3章 入学、休学、復学、退学、除籍、転学、転入学、再入学及び留学
（入学の時期）
第12条 入学の時期は、学年の始めとする。
（入学資格）
第13条 博士前期課程（修士課程）に入学することのできる者は、次号の各号の一に該当するものでなければならない。
(1) 大学（学校教育法第52条に定める大学をいう。以下同じ。）を卒業した者
(2) 学校教育法第66条の2第3項の規定により学士の学位を授与された者
(3) 外国において学校教育における16年の課程を修了した者
(4) 文部科学大臣の指定した者（昭和28年2月7日文部省告示第15号）
(5) 大学に3年以上在学し、又は外国において学校教育における15年の課程を修了し、本大学院において、所定の単位を修了し、所定の成績をもって修了したものと認めた者
(6) その他本大学院において第1号と同等以上の学力があると認めた者
2 博士後期課程に入学することのできる者は、次の各号の一に該当するものでなければならない。
(1) 修士の学位を有するもの
(2) 外国において修士の学位に相当する学位を授与された者
(3) 文部科学大臣の指定した者（平成元年9月1日文部省告示第118号）
(4) その他本大学院において、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
（入学志願の手続き）
第14条 入学志願者は、本大学院の指定する入学願書その他の書類を定められた期日までに提出しなければならない。
2 前項の必要書類及び期日は、学生募集時にこれを指示する。
3 入学志願者は、必要書類に添えて入学考査料を納付しなければならない。
（入学許可及び入学許可の取消し）
第15条 入学許可及び入学許可の取消しについてことは、大学学則第22条及び第23条の規定を準用する。
（休学及び復学）
第16条 学生の休学及び復学については、大学学則第28条の規定を準用する。ただし、同条第4項に定める休学期間は、通算して博士前期課程（修士課程）においては2年を、博士後期課程においては3年を超えることはできない。
（退学）
第17条 学生がやむを得ない事情によって退学しようとするときは、必要書類を添えて学長に願い出て、その許可を得なければならない。
（除籍）
第18条 学生が次の各号の一に該当するときは、学長は委員会の議を経てこれを除籍する。
(1) 第16条に定める休学期間を超える者
(2) 病気その他の理由のため、成業の見込みのない者
(3) 授業料の納付を怠り、督促してもなおその納付がない者
(4) 定められた在学期間を超える者
（転学）
第19条 学生が他の大学院に転学しようとするときは、委員会の議を経て、学長の許可を得なければならない。
（転入学）
第20条 他の大学院から本大学院に転入学を志望する者があるときは、委員会の議を経て、相当年次に転入学を許可することがある。
2 前項の規定による転入学の時期は、学年の始めに限る。
（再入学）
第21条 本大学院を退学した者で、再入学を志願する者があるときは、委員会の議を経て、相当年次に入学を許可することがある。
（留学）
第22条 外国の大学院等に留学しようとする者は、学長の許可を得て留学することができる。
2 前項の許可を受けて留学した期間は第10条に規定する期間に算入することができる。

第4章 教育課程及び履修方法
（授業及び研究指導）
第23条 本大学院の教育は、授業科目の授業及び
学位論文の作成等に対する指導（以下「研究指導」という。）により行う。
（授業科目及び履修方法）
第24条 授業科目の種類、単位数及び履修方法等については、別に定める。
（教育方法の特例）
第25条 博士前期課程において、教育上特別の必要があると認められる場合には、夜間その他特定の時間又は時期において授業又は研究指導を行う等の適当な方法により教育を行うことができる。
（単位計算の方法、単位の授与及び成績の評価）
第26条 単位計算の方法、単位の授与及び成績の評価については、大学学則第12条から第14条までの規定を準用する。
（他大学院における授業科目の履修等）
第27条 教育上不可欠と認められるときは、他の大学院（留学しようとする外国の大学院を含む。以下同じ。）との協議に基づき、学生に当該大学院の授業科目を履修させることができる。
第2項の規定により、履修した授業科目について修得した単位は、10単位を越えない範囲で本大学院における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。
（入学前の既修得単位等の認定）
第28条 教育上不可欠と認められるときは、学生が本大学院に入学する前に他の大学院において履修した授業科目について修得した単位（大学院設置基準（昭和49年文部省令第28号）第15条の規定により科目等履修生として修得した単位を含む。）を、本大学院に入学した後の本大学院における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。
第31条 博士前期課程の修了の要件は、大学院に5年（博士前期課程（修士課程）に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあっては、当該課程における2年の学術期間を含む。）以上在学し、博士後期課程授業科目について所定の授業科目を10単位以上修得し、かつ、必要な研究指導を受けるが、博士論文の審査及び最終試験に合格することを必要とする。
（教育方法の特例）
第25条 博士前期課程において、教育上特別の必要があると認められる場合には、夜間その他特定の時間又は時期において授業又は研究指導を行う等の適当な方法により教育を行うことができる。
（単位計算の方法、単位の授与及び成績の評価）
第26条 単位計算の方法、単位の授与及び成績の評価については、大学学則第12条から第14条までの規定を準用する。
（他大学院における授業科目の履修等）
第27条 教育上不可欠と認められるときは、他の大学院（留学しようとする外国の大学院を含む。以下同じ。）との協議に基づき、学生に当該大学院の授業科目を履修させることができる。
第2項の規定により、履修した授業科目について修得した単位は、10単位を越えない範囲で本大学院における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。
（入学前の既修得単位等の認定）
第28条 教育上不可欠と認められるときは、学生が本大学院に入学する前に他の大学院において履修した授業科目について修得した単位（大学院設置基準（昭和49年文部省令第28号）第15条の規定により科目等履修生として修得した単位を含む。）を、本大学院に入学した後の本大学院における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。
第31条 博士前期課程の修了の要件は、大学院に5年（博士前期課程（修士課程）に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあっては、当該課程における2年の学術期間を含む。）以上在学し、博士後期課程授業科目について所定の授業科目を10単位以上修得し、かつ、必要な研究指導を受けるが、博士論文の審査及び最終試験に合格することを必要とする。
（教育方法の特例）
第25条 博士前期課程において、教育上特別の必要があると認められる場合には、夜間その他特定の時間又は時期において授業又は研究指導を行う等の適当な方法により教育を行うことができる。
（単位計算の方法、単位の授与及び成績の評価）
第26条 単位計算の方法、単位の授与及び成績の評価については、大学学則第12条から第14条までの規定を準用する。
（他大学院における授業科目の履修等）
第27条 教育上不可欠と認められるときは、他の大学院（留学しようとする外国の大学院を含む。以下同じ。）との協議に基づき、学生に当該大学院の授業科目を履修させることができる。
第2項の規定により、履修した授業科目について修得した単位は、10単位を越えない範囲で本大学院における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。
（入学前の既修得単位等の認定）
第28条 教育上不可欠と認められるときは、学生が本大学院に入学する前に他の大学院において履修した授業科目について修得した単位（大学院設置基準（昭和49年文部省令第28号）第15条の規定により科目等履修生として修得した単位を含む。）を、本大学院に入学した後の本大学院における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。
（教育方法の特例）
第25条 博士前期課程において、教育上特別の必要があると認められる場合には、夜間その他特定の時間又は時期において授業又は研究指導を行う等の適当な方法により教育を行うことができる。
（単位計算の方法、単位の授与及び成績の評価）
第26条 単位計算の方法、単位の授与及び成績の評価については、大学学則第12条から第14条までの規定を準用する。
（他大学院における授業科目の履修等）
第27条 教育上不可欠と認められるときは、他の大学院（留学しようとする外国の大学院を含む。以下同じ。）との協議に基づき、学生に当該大学院の授業科目を履修させることができる。
第2項の規定により、履修した授業科目について修得した単位は、10単位を越えない範囲で本大学院における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。
（入学前の既修得単位等の認定）
第28条 教育上不可欠と認められるときは、学生が本大学院に入学する前に他の大学院において履修した授業科目について修得した単位（大学院設置基準（昭和49年文部省令第28号）第15条の規定により科目等履修生として修得した単位を含む。）を、本大学院に入学した後の本大学院における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。
第31条 博士前期課程の修了の要件は、大学院に5年（博士前期課程（修士課程）に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあっては、当該課程における2年の学術期間を含む。）以上在学し、博士後期課程授業科目について所定の授業科目を10単位以上修得し、かつ、必要な研究指導を受けた後、博士論文の審査及び最終試験に合格することを必要とする。
（教育方法の特例）
第25条 博士前期課程において、教育上特別の必要があると認められる場合には、夜間その他特定の時間又は時期において授業又は研究指導を行う等の適当な方法により教育を行うことができる。
（単位計算の方法、単位の授与及び成績の評価）
第26条 単位計算の方法、単位の授与及び成績の評価については、大学学則第12条から第14条までの規定を準用する。
（他大学院における授業科目の履修等）
第27条 教育上不可欠と認められるときは、他の大学院（留学しようとする外国の大学院を含む。以下同じ。）との協議に基づき、学生に当該大学院の授業科目を履修させることができる。
第2項の規定により、履修した授業科目について修得した単位は、10単位を越えない範囲で本大学院における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。
（入学前の既修得単位等の認定）
第28条 教育上不可欠と認められるときは、学生が本大学院に入学する前に他の大学院において履修した授業科目について修得した単位（大学院設置基準（昭和49年文部省令第28号）第15条の規定により科目等履修生として修得した単位を含む。）を、本大学院に入学した後の本大学院における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。
第31条 博士前期課程の修了の要件は、大学院に5年（博士前期課程（修士課程）に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあっては、当該課程における2年の学術期間を含む。）以上在学し、博士後期課程授業科目について所定の授業科目を10単位以上修得し、かつ、必要な研究指導を受けた後、博士論文の審査及び最終試験に合格することを必要とする。
の是「博士前期課程（修士課程）における在学期間に3年を加えた期間」と、前項中「3年（博士前期課程（修士課程））に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあっては、当該課程における2年の在学期間を含む。」とあるのは「3年（博士前期課程（修士課程）における在学期間を含む。）」と読み替えて、同項の規定を適用する。

4 前3項の規定に関わらず、第13条第2項第3号又は第4号の一に該当する者が、博士後期課程に入学した場合の当該課程の修了には、当該課程に3年以上在学し、博士後期課程授業科目について所定の授業科目を10単位以上修得し、かつ、必要な研究指導を受けた後、博士論文の審査及び最終試験に合格することを必要とする。

5 博士論文の審査及び最終試験については、別に定める。

第6章 学位
（学位）
第32条 本大学院において博士前期課程（修士課程）を修了した者に対しては、修士（看護学）の、博士後期課程を修了した者に対しては博士（看護学）の学位を授与する。

2 学位の授与については、別に定める。

第7章 賞罰
（賞罰）
第33条 学生に対する賞罰については大学学則第32条及び第33条の規定を準用する。この場合において、大学学則第32条及び第33条中「教授会」とあるのは「委員会」と、第33条中「本学則」とあるのは「本大学院学則」と読み替えるものとする。

第8章 科目等履修生、研究者及び外国人学生
（科目等履修生）
第34条 本大学院の学生以外の者で、本大学院が開設する一又は複数の授業科目を履修することを志願する者があるときは、授業に支障のない限り、選考のうえ、科目等履修生として入学を許可することがある。

2 科目等履修生について必要な事項は別に定める。

第35条 特定の事項について研究を願い出る者があるときは、学長は委員会の議を経て、これを研究者として許可することができます。

2 研究生について必要な事項は別に定める。

（外国学生）
第36条 外国入大学院に入学を志願する者があるときは、選考のうえ入学を許可することがある。

2 外国人学生については、定員外とすることができる。

3 外国人学生について必要な事項は別に定める。

第9章 授業料及び入学料等
（授業料及び入学料等）
第37条 授業料、入学料及び入学料の額並びに徴収については、大学学則第40条の規定を準用する。

附則
（施行期日）
1 この学則は、平成9年4月1日から施行する。
（経過措置）
2 平成9年度における収容定員は本学則第5条の規定にかかわらず25名とする。

附則
（施行期日）
1 この学則は、平成14年3月1日から施行する。
（経過措置）
2 平成11年度から平成12年度までの各年度における博士後期課程の収容定員は、本学則第5条の規定にかかわらず次の表に掲げるとおりとする。

<table>
<thead>
<tr>
<th>研究科名</th>
<th>専攻名</th>
<th>課程名</th>
<th>収容定員</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>看護学研究科</td>
<td>看護学専攻</td>
<td>博士後期課程</td>
<td>4名 8名</td>
</tr>
</tbody>
</table>
| 区分 | 推薦 | 前期 | 後期 | 社会人 | 編入 | 緊急特例 | 肥国生 | 外国人 | 合計 | 科目等数
|------|------|------|------|--------|------|----------|--------|--------|------|--------
| 平成5年度 | 募集人員 a | 20  | 60  | 20   | -    | -        | -      | -      | 100  | -      |
|       | 志願者数 b | 194 | 1327| 759  | -    | -        | -      | -      | 280  | -      |
|       | 倍率 b/a | 9.7 | 22.1| 38.0 | -    | -        | -      | -      | 22.8 | -      |
|       | 合格者数 | 24  | 56  | 47   | -    | -        | -      | -      | 137  | -      |
|       | 入学者数 | 24  | 41  | 36   | -    | -        | -      | -      | 101  | -      |
| 平成6年度 | 募集人員 a | 20  | 70  | 10   | -    | -        | -      | 若干名 | 100  | -      |
|       | 志願者数 b | 182 | 307 | 197  | -    | -        | 1      | -      | 686  | -      |
|       | 倍率 b/a | 9.1 | 4.4 | 19.7 | -    | -        | -      | -      | 6.9  | -      |
|       | 合格者数 | 22  | 71  | 17   | -    | -        | -      | 0      | 111  | -      |
|       | 入学者数 | 22  | 56  | 13   | -    | -        | -      | 0      | 101  | -      |
| 平成7年度 | 募集人員 a | 20  | 70  | 10   | -    | 10       | 若干名 | 若干名 | 100  | 10     |
|       | 志願者数 b | 133 | 306 | 152  | -    | 70       | 16     | 1      | 591  | 53     |
|       | 倍率 b/a | 6.7 | 4.4 | 15.2 | -    | 7.0      | -      | -      | 5.9  | 5.3    |
|       | 合格者数 | 22  | 76  | 10   | -    | 12       | 4      | 0      | 124  | 10     |
|       | 入学者数 | 22  | 70  | 10   | -    | 10       | 4      | 0      | 116  | 10     |
| 平成8年度 | 募集人員 a | 20  | 70  | 10   | -    | 10       | -      | 若干名 | 110  | 10     |
|       | 志願者数 b | 129 | 350 | 155  | -    | 69       | -      | 3      | 706  | 32     |
|       | 倍率 b/a | 6.5 | 5.0 | 15.5 | -    | 6.9      | -      | -      | 6.4  | 3.2    |
|       | 合格者数 | 20  | 73  | 13   | -    | 12       | -      | 1      | 119  | 11     |
|       | 入学者数 | 20  | 69  | 11   | -    | 10       | -      | 1      | 111  | 10     |
| 平成9年度 | 募集人員 a | 20  | 60  | 20   | 若干名 | 10       | 若干名 | 若干名 | 110  | 10     |
|       | 志願者数 b | 79  | 112 | 162  | 20   | 48       | -      | 0      | 1    | 422    |
|       | 倍率 b/a | 4.0 | 1.9 | 8.1  | -    | 4.8      | -      | -      | 3.8  | 4.2    |
|       | 合格者数 | 20  | 60  | 23   | 2    | 11       | -      | 0      | 0    | 116    |
|       | 入学者数 | 20  | 58  | 22   | 2    | 10       | -      | 0      | 0    | 112    |

139
<table>
<thead>
<tr>
<th>区 分</th>
<th>推薦</th>
<th>前期</th>
<th>後期</th>
<th>社会人</th>
<th>編入</th>
<th>帰国生</th>
<th>外国人</th>
<th>合計</th>
<th>科目等履修生</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>平成10年度</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>募集人員 a</td>
<td>20</td>
<td>60</td>
<td>20</td>
<td>若干名</td>
<td>10</td>
<td>若干名</td>
<td>若干名</td>
<td>110</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>志願者数 b</td>
<td>94</td>
<td>240</td>
<td>157</td>
<td>72</td>
<td>92</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>665</td>
<td>26</td>
</tr>
<tr>
<td>倍率 b/a</td>
<td>4.7</td>
<td>4.0</td>
<td>8.4</td>
<td>9.2</td>
<td>2.6</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>合格者数</td>
<td>20</td>
<td>60</td>
<td>23</td>
<td>2</td>
<td>10</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>115</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>入学者数</td>
<td>20</td>
<td>59</td>
<td>21</td>
<td>2</td>
<td>10</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>112</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>平成11年度</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>募集人員 a</td>
<td>22</td>
<td>58</td>
<td>20</td>
<td>若干名</td>
<td>10</td>
<td>若干名</td>
<td>若干名</td>
<td>110</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>志願者数 b</td>
<td>110</td>
<td>226</td>
<td>272</td>
<td>68</td>
<td>72</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>749</td>
<td>14</td>
</tr>
<tr>
<td>倍率 b/a</td>
<td>5.0</td>
<td>3.9</td>
<td>12.6</td>
<td>7.2</td>
<td>1.4</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>合格者数</td>
<td>21</td>
<td>61</td>
<td>22</td>
<td>4</td>
<td>14</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>123</td>
<td>14</td>
</tr>
<tr>
<td>入学者数</td>
<td>21</td>
<td>55</td>
<td>22</td>
<td>3</td>
<td>10</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>112</td>
<td>14</td>
</tr>
<tr>
<td>平成12年度</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>募集人員 a</td>
<td>22</td>
<td>58</td>
<td>20</td>
<td>若干名</td>
<td>10</td>
<td>若干名</td>
<td>若干名</td>
<td>110</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>志願者数 b</td>
<td>96</td>
<td>156</td>
<td>167</td>
<td>57</td>
<td>54</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
<td>532</td>
<td>15</td>
</tr>
<tr>
<td>倍率 b/a</td>
<td>4.4</td>
<td>2.7</td>
<td>8.4</td>
<td>5.4</td>
<td>4.8</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>合格者数</td>
<td>23</td>
<td>58</td>
<td>23</td>
<td>3</td>
<td>12</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>119</td>
<td>15</td>
</tr>
<tr>
<td>入学者数</td>
<td>23</td>
<td>55</td>
<td>20</td>
<td>2</td>
<td>10</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>113</td>
<td>15</td>
</tr>
<tr>
<td>平成13年度</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>募集人員 a</td>
<td>30</td>
<td>55</td>
<td>15</td>
<td>若干名</td>
<td>10</td>
<td>若干名</td>
<td>若干名</td>
<td>110</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>志願者数 b</td>
<td>145</td>
<td>181</td>
<td>155</td>
<td>51</td>
<td>76</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>609</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>倍率 b/a</td>
<td>4.8</td>
<td>3.3</td>
<td>10.3</td>
<td>7.6</td>
<td>5.5</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>合格者数</td>
<td>30</td>
<td>58</td>
<td>16</td>
<td>3</td>
<td>12</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>120</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>入学者数</td>
<td>30</td>
<td>55</td>
<td>15</td>
<td>2</td>
<td>10</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>113</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>平成14年度</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>募集人員 a</td>
<td>30</td>
<td>55</td>
<td>15</td>
<td>若干名</td>
<td>10</td>
<td>若干名</td>
<td>若干名</td>
<td>110</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>志願者数 b</td>
<td>129</td>
<td>189</td>
<td>152</td>
<td>33</td>
<td>49</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>533</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>倍率 b/a</td>
<td>4.3</td>
<td>3.1</td>
<td>10.1</td>
<td>4.9</td>
<td>4.8</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>合格者数</td>
<td>31</td>
<td>56</td>
<td>16</td>
<td>3</td>
<td>15</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>122</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>入学者数</td>
<td>31</td>
<td>54</td>
<td>15</td>
<td>2</td>
<td>10</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>113</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>平成15年度</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>募集人員 a</td>
<td>30</td>
<td>55</td>
<td>15</td>
<td>若干名</td>
<td>10</td>
<td>若干名</td>
<td>若干名</td>
<td>110</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>志願者数 b</td>
<td>128</td>
<td>113</td>
<td>115</td>
<td>45</td>
<td>49</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>452</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>倍率 b/a</td>
<td>4.3</td>
<td>2.1</td>
<td>7.7</td>
<td>4.9</td>
<td>4.1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>合格者数</td>
<td>30</td>
<td>57</td>
<td>18</td>
<td>3</td>
<td>12</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>121</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>入学者数</td>
<td>30</td>
<td>54</td>
<td>15</td>
<td>2</td>
<td>10</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>112</td>
<td>8</td>
</tr>
</tbody>
</table>
編集後記

平成14年度の拡大部長局長会議で兵庫県立看護大学創立10周年記念イベントの举行と記念誌作成のための2つの作業部会が立ち上がりました。記念誌を作成する部会では何度かの話し合いを経て大筋ができ、平成15年の夏頃から本格的な編集作業が始まりました。本年度は開学10周年の節目となるだけでなく、平成16年度より新しく統合される兵庫県立大学としての再スタートを控えており、これまでを振り返ることがこれからの教育や研究の方向を模索する上で参考となるような記念誌づくりを目標に編集作業が進められました。

開学当初より学外から本学の10年の歩みを暖かく見守ってくださった方々や、学外から非常勤講師として本学の学生に多大の影響と感銘を与えてくださった方々からも寄稿をいただき、本学の教職員のみではこの10年の歩みはなかったことをつくづく感じます。また学長が多くの資料を整理され、本学の歴史の概要をまとめられましたので、過去、現在を検証しながら未来への歩みに大いに役立つものと思われます。さらに本学学部、大学院、附属研究所推進センターの現況についての資料を載せていますので、特に現在本学を離れた卒業生、修了生や、転勤、退職された教職員の方々にも参考になれば幸いです。但し業績等については、自己点検委員会が定期的に発行している兵庫県立看護大学教員総覧や本学紀要委員会の発行する大学紀要に掲載があるので本記念誌には掲載を省かせていただきました。そして開学当初から熱く努力を続けられている現職の教職員の方々を中心に、10年の歩みをつながり強く振り返りながら、統合に向けての抱負も述べていただきました。

最後に、この記念誌刊行にあたり、執筆の依頼にこころよく応じてくださった方々、またいろいろな取材に協力くださった方々には、この場を借りてこころよりお礼申し上げます。この10年を本学で過ごしてきた教職員が、またその一時期を本学で過ごしてきた学生や教職員が、さらに行政、教育面や後援会等々で側面から支えてくださった方々が本学の10年を俯瞰し、今後の発展に生かすことのできる有意義な記念誌になることを願いつつ。

平成15年10月吉日

兵庫県立看護大学10周年記念誌編集作業部会
近田敬子、石井誠士、水谷信子、松井和子、加治秀介（文責）